

いふ葛藤にばかり束縛されて、少しも大解脱自由無礙の働きが出来ないとは何事ぞと叱る。着語に郎當少からずヨボ／＼した有様。傍觀の者が晒ふであらうぞ。お耻かしい次第では無いかと云ふ。

第五十一則 雪峰是甚麼

垂示 纔有是非。紛然失心。不落階級。又無摸索。且道放行。即是把往。即是到這裏。若有一絲毫解路。猶滯言詮。尙拘機境。盡是依草附木。直饒便到獨脫處。未免萬里望鄉關。還構得麼。若未構得。且只理會箇現成公案。試舉看。

纔に是非あれば紛然として心を失すといふは三祖僧璨大師の「信心銘」の語を引いてきたので、是非といふは善惡といふと同じである、苟くも何事に限らず其れが善いと此れが惡いとかと、心が動き初めたならば、モハヤ本心本性を失ふことになる、なぜかといふに本心本性は、元來善惡も邪正も是非も曲直も無いものであることは今さら申すまでも無い、花の咲いたに善惡があるかい、紅葉の散るに是非があるかい、それを善いの惡いの奇麗の汚穢のといふは、皆只人間の妄想から強いて彼れ此れといふまでのことであるから、花や紅葉の本性を傷つけて天真爛漫の法身佛を片輪とする五逆罪の隨一である、とは云ふもの階級に落ちされば又摸索すること無しで、沙彌から長老には成れないと云ふ俚諺の如く、一旦すでに久しく妄想分別に陥つたものが、修證の功を経て其の本分の田地に立戻らうと云ふには、何うしても追々と

階級を経て進むと云ふことで無ければ、何とも手の着けやうが無い、その様子を承陽大師は「此法は人分上ゆたかに具はれりと雖も、修せざるには顯はれず、證せざるには得ること無し」と示されてある、サア此處の進退去就をどうしたものであらうぞ、且らく道へ放行するが是か把住するが是か、許して自由に働かせやうとも、抑へつけて動かれないやうにするとも、ソコは師家たる人の學人を接する手段の掛引で必らずしも斯うと定つたことの無いのが、即ち祖師門下の他家諸派に異なる所である、這裏に到つて若し一絲毫の解路ありて、猶ほ言詮に滞ほり、尙ほ機境に拘はらば盡く是れ依草附木、要する所は把住するとも放行するとも其れは臨機應變であるけれども、少しでも理窟に涉つたり、又は言葉に着き廻つたり、或は見るものにせよ聞くものにせよ、客觀のために動かされるやうなことで有つたならば、盡く皆依草附木の精靈であるぞと言ふ、依草附木といふは、俗に謂ふ所の幽霊とか亡魂とか云ふものが、人の體を離れて依り所なきに、草に依つたり木に附いたりして種々様々な姿をあらはすと云ふことを、支那人は昔から言ふたもので、現に易にさへ遊魂作變と云ふ語があつて、支那は幽霊の根據地である、今も其の通り本體本性を失ふて妄想分別に迷ふて居たならば、依草附木の幽霊と何の異なる所も無いぞと云ふのである、然らばズツと通りぬけて直體便ち獨脱の處に到るも、獨脱は獨立脱體で決して他の支配を受けない自由の境界、たとへ其處まで到り得たとした處で、未だ免かれず萬里に郷關を望むことを、なぜかと云ふに既に獨脱の處に到つたと云ふのが、ハヤ一つの取り着き場が出来たので、決して其れが本來の面目では無い、法華經に謂ゆる化城であり、又淨土門で謂ふ所の化身土である、眞の極樂寂光淨土へは、千里萬里の

隔たりであるぞと云ふ、此に至つて還て構得すやサア斯やうに取り着く手蔓の絶えた所で、果して能く其の本分の家郷に到り得る趣向があるかドウぢや、若し未だ構得せずんば且らく只箇の現成公案を理會せよ箇の現成公案が即ち本分の作用であるから、先づ其の道理を會得するが好いぞと、本則に及ぼして試に擧す看よ。

本則 擧雪峰往庵時。有兩僧來禮拜。以手托庵門。放身出云。是什麼。僧亦云。是什麼。

相峯低頭歸庵。僧後到巖頭。僧云。嶺南來。僧云。曾到雪峯麼。僧云。曾到什麼處來。僧云。嶺南來。僧云。曾到什麼處來。僧云。曾到什麼處來。

有僧云。他無語低頭歸庵。他道什麼。僧云。曾到什麼處來。僧云。嶺南來。僧云。曾到什麼處來。僧云。曾到什麼處來。僧云。曾到什麼處來。

須粉碎○且道他僧至夏末再舉前話請益已是不懼何頭云○正賊去何。
不早問好與僧云未敢容易○這棒本是這僧喚頭云雪
峯雖與我同條生不與我同條死○漫地要識末後句只這是

信○泊乎分疎不○我也不○下

雪峰住庵の時と云ふは、唐の武宗皇帝が會昌年間に廢佛の勅令を出して、天下の寺を毀ち僧を逐ふた、其の時に雪峰義存禪師は嶺南の地に遁れて、小庵を結んで住んでゐた、それを住庵の時と云ふのである、其時に巖頭全谿禪師は同じく徳山宣鑑禪師の弟子で、雪峰の爲めには師兄であるが、此の武宗の廢佛の時に、巖頭は鄂渚湖といふ湖水の渡守になつて世を避けて居たのであつた、其頃の事と見えるが兩僧あり來りて禮拜せんとす、兩人の坊さんが雪峯禪師の庵室の門の傍へ往くと、雪峰は來るを見て手を以て菴門を托して身を放つて出づ、兩人の僧が門を敲くのを待たずに、直に内から門を托開して、ヒヨイと飛出して、是れ什麼ぞと言ふた、着語に什麼をか作すと兩僧が禮拜せんとするを咎め、又一狀に領過すウロウロと他人の足下に禮拜などをして歩く奴は、兩人とも一所に對してやるが好いぞと言ふ、サスガに雪峯は雪峰だけに庵門を托し開いて飛出した様子が鬼眼睛で恐ろしい見暮ぞと言ひ、又無孔の笛子で穴の無い笛は吹きやうが有るまいとほめ、更に頭を擧げ角を戴く危険で寄り附けないぞと言ふ、僧云く是れ什麼ぞ、

此の僧も亦た中々の舊參と見える、大抵の者であつたならば、サスガの雪峯に先を越されて是れ什麼ぞと擧着された時に、ひるむはずであるのに、スカササ鸚鵡返しに是れ什麼ぞと言ふたアンパイ、並々の行脚僧では無いと見える、けれども圓悟は泥彈子到底雪峰を撃つわけには往かぬぞと言ふ、泥彈子と云ふは子供が泥を丸めて木の尖に挟んで犬などに投げつけるものさうな、又誰拍板これは毛氈で張つた太鼓といふことで、到底鳴らないから太鼓の用は作さないと云ふ悪口、又箭鋒相拄ふとある、雪峯も是れ什麼ぞ、此の僧も是れ什麼ぞ、同じく是れ什麼ぞで勝負は見えぬと冷かした、其實は彼の達磨も不識と云ひ、武帝も不識と云ふたやうなわけで、到底同じ價で買ふわけにはゆかぬのである、峯低頭して庵に歸るコ、で雪峯が何とか言ふたならば、彼の兩僧も何とか働けることであつたかも知れぬが、雪峯は何とも言はずにチヨイと頭を下げてハイ左様ならと内へ入つてしまふた、兩僧遂に手の着けやうも口の出しやうも無かつた、着語に爛泥裏に刺あり此の黙して庵へ歸つた作略といふものは、徳山の棒とか臨濟の喝とか云ふやうな激烈なる所作では無いけれども、其の溫柔なる機轉に容易ならぬ峻峻の鋒刃を藏して居るぞと言ふ、又龍の足なきが如く蛇の角あるに似たり普通の姿でないに依て遂に非點の打つ處を見出しかねる、中に就く措置を爲す難し平生でも雪峯の機鋒は手の着けやうの無いことばかりであるが此れは亦た其中でも別段であるといふのである、僧後に巖頭に到る全谿禪師が既に渡守を罷めて鄂州の巖頭に住せられた後の事であらう、彼の兩僧は雪峯から巖頭への書翰をも持つて居たといふ事であるから、彼の時に門前拂ひを喰つただけでは無く、幾分か隨身して居たことが見える、とにかく巖頭の處へ往つた、着語に也た須からく是れ問

過して始めて得べし、巖頭に問ふたならば雪峯が無語で低頭歸庵した消息が分るであらうぞと云ふ、ナゼかと云ふに巖頭と雪峯とは同道方に知る俗に謂ゆる蛇の道は反鼻であるからぞ、頭問ふ什麼の處より來る、此れは例の如く地理的に問ふのでは無い、其の人の從來參得し來つた道程を問ふのであるから、作家の漢ならば此で十分の働きがなければ成らぬのである、故に圓悟が也た須く作家にして始めて得べし、凡庸の漢では致し方がない況んや道の漢往々に敗闕を納る既に雪峯の處で失策して來たのである、若し是れ同參に非ずんば泊んど放過せん、サスガに巖頭は雪峯と同參の兄弟であるから大丈夫であるが若し他人であつたならば取り逃がしてしまふであらうと言ふ、僧云く嶺南より來る嶺南は即ち雪峯住庵の他であるから、正直に答へたのである、着語に什麼の消息をか傳へ來る嶺南の地は六祖大師以來禪宗勃興の靈境であるが、此の僧果して如何なる好消息を持つてきたかと擲論し、也た須らく箇の消息を通ずべし、確かな消息を通じないでは冗らんぞと、兩僧に向ふやうに言ふて、暗に吾々お互ひに斯る場合の消息を示されるのである、還て雪峯を見るやと次の巖頭の拶問を豫言する、頭云く曾て雪峯に到るや地理的の雪峯山では無いぞ、故に圓悟が勘破し了ること多時と言ふ、巖頭は此の僧が必ず雪峯に參じた者であるといふことを疾に勘破して居る、然し雪峯に逢つても逢つた効が無いと云ふことも能く見透して居るらしい、して見れば到らずと道ふべからず雪峯に參じたことが無いとは言へない、參じたと言へば參じた所詮は何處に在る、是れ又吾々お互ひに反省せねば成らぬ所ぞ、僧云く曾て到れりと誠に正直である、着語に實頭の人は得難し、正直は正直であるが得べきことは得られない、打て兩槩と作す曾て到れりと云ふ言葉がハヤ兩端に涉

つて居る、元來本分の地は到るの到らぬのと論量すべき場處では無いぞと抑へる、頭云く何の言句がある雪峯が何とか言ふたかと問ふたのを、圓悟が齒痒がつて便ち恁麼にし去るやソんなことを問ふて居らずに、直に本分の令を行すれば好いにと云ふ、僧前話を擧すと前の低頭歸庵の話をした、又便ち恁麼に去る巖頭に何の言句があると問はれた言葉に付き廻つて、昔話をして居るとは何事ぞと叱り、又重々に敗闕を納ると誡めた、頭云く也什麼とか道ひしと巖頭の檢舉が厳しくなつて來た、着語に若し是れが圓悟であつたならば好し、劈口に打たん彼れが語路を逐ふて昔話などを仕掛けた時に、ピシヤリと打ち擲れば好かつたと言ひ、又鼻孔を失却し了れり巖頭何の面目があるぞと抑へる、僧云く他は無語低頭して庵に歸る、と到頭此僧が雪峯の作略如何を領會し得ぬことを白狀したやうなものである、故に着語に又敗闕を納ると抑へた、更に備且く道へ他は什麼ぞ貴公は其の雪峯の作略が何であるのか分らないかと叱つて、門下諸人を警醒せられた、頭云く噫我當初悔らくは他に向て末後の句を道はざりしことを、巖頭の此の一語は實に慈悲深重なるもので、此の一則の公案の尤も眼目とする所である、ナゼかと云ふに此の僧は雪峯の低頭歸庵したのを見て、己れが是れ什麼ぞと突き返したのを雪峯が許したことの様に思ふて、そこで其話を大切らしく擔ふて歩くのであると云ふことを巖頭が見ぬいたに依て、サテサテ氣の毒なことぞと思ひ、乃ち彼の雪峯は吾が同參の兄弟であるばかりでは無く、彼れが悟り切れないで居るのを吾が世話をして悟らせたのであつたが、其時にモウ一つ踏み込んで末後の句を言ふて聞かせて置けば好かつたに其れが欠けて居るか惜いことをした、若し伊に向て道ひたらましかば天下人雪老を奈何ともせざらん、末後の句さへ道ふ

て置いてあつたならば、誰も手の着けやうは無かつたらうにと、巖頭が愚痴をこぼすのを聞いて、此の僧は始めて雪峰には末後の句が欠けて居るといふことに氣を取られたから、かの是れ什麼で低頭歸庵させたと思ふて居た悟りの重荷をスツカリ巖頭に取りあげられてしまふたのである、乃ち今度は其の末後の句といふことが、難透の公案になつて、此僧これから九十日の間非常に苦辛した様子である、着語に洪波浩渺白浪滔天、此の末後の句といふことが何のことやら方角の着かないことで、巖頭の言ひ草が如何にも浩渺滔天の勢ひであるとほめたのである、癩兒伴を牽く雪峰巖頭好い道づれよ、必とせず末後の句といふことが敢て必ず無ければならぬわけのものではないと排し、須彌も也た粉碎すべし、其の末後の句に因つては雪老を奈何ともせず位のことでは無い、須彌山でも碎けるであらうに、上げたり下げたりして、遂に且く道へ他の團圓什麼の處にか在ると吾々後學へまで參究を勸誡せらる、僧其末に至りて再び前話を擧して請益。九十日の夏安居も愈々終らうといふ頃になつて、更に巖頭に向つて此の末後の句の會得し難い事を白狀し、何うしたならば好からうかと相談に及んだものと見える、着語に已に是れ慳々たらず何處までも愚な男であるぞと罵しり、更に正賊去り了ること多時今頃になつて何の事である、賊過後の張弓何の用に立つぞと叱る、頭云く何ぞ早く問はざる九十日の夏安居中何を考へて居た、なぜ早く末後の句を問はなんだぞと言ふ、團圓が好し爲めに禪床を掀倒するに巖頭が其う言ふた時に、巖頭の禪床を引くり返して痛い目に遭はせてやるべきであるに、過也モウ遅い、残念なと言ふアンパイ、僧云く未だ敢て容易ならずなぞ早く問はぬかと仰せられても、此の末後の句の工夫は中々容易なことでは無いに依つて、今日まで工夫に

工夫を重ねましたが、サテ何うも合點が往きませんと云ふ、着語に這の棒本是れ這の僧喫すと、此の着語は無いが好いと風外老人は言はれたがソウであらう、鼻孔を穿却す到頭此の僧は巖頭に鼻づらへ繩を透されてしまふた、囚に停つて智を長す一夏九十日の工夫がヤツト斯んな事か、囚に停て智を長すといふは監獄の中で罪を言ひぬげやうと考へるといふことださうな已に是れ兩重の公案最初にも不會であつたのが夏末になつても同じく不會で、不會の兩重公案よ、頭云く雪峰我と同條に生ずと雖も我と同條に死せず、雪峰と我とは同じ處で生れても、同じ處では死なない、彼は彼たり我は我たりであるぞ、末後の句を知りたのか、末後の句は只這れ是れよと言ふ、サア今度は此れが鐵饅頭ぞ、どんな味がするやら能く咬みしめか是れ別かとも參究して見ねばなるまい、是れとは畢竟何をさしたのであらうぞ、垂示に謂ゆる解路に涉らず言詮を離れて、依草附木の誹りを受けないやうにせねばならぬ所であると云ふことぢや、着語に漫天網地巖頭の機用は宇宙に充滿する、一船の人を賺殺す末後の句といふやうな妙なことを言ふて、何ぞ有り難いことでもあるかと思へば只這れ是れ、其れに釣られて九十日間の閑工夫、同學の者の迷惑になるぞと云ふ、我也た信ぜず只這れ是れだけのことは團圓は承知せぬぞと、亦た是れ人を賺殺するのである、泊んど分疎不下到頭何の事とも分らないぞと、すべての解路言詮を打ち拂ふてしまふた。

頌 末後句已在言前○將謂 爲君說有舌頭落地○說不着 明暗雙雙底時有尾無尾○有尾無尾

節葛藤老漢○如牛無角虎同條生也共相知是何種族○彼此沒交不同條

死還殊絶僧備鼻孔爲什麼在別人手裏還殊絶什麼摸索處黃頭碧眼

須瓢別却不慙麼只許老胡知不許老胡會南北東西歸去來猶帶五色線

末後の句と例の如く本則の眼目を拈提し來つた、圓悟が其れを奪つて已に言前に在り末後の句は雲寶から聞かないでも疾に分つてゐると言ひ、更に將に謂へり眞箇と、何ぞ別に末後の句といふものが眞實に有るか

のやうに思つて居たが、畢竟つぱりばかりよと言ひ、又觀着すれば睹す、若しも別に末後の句を見やうとしたならば目が墮れるぞと云ふ、然るに雪寶は君が爲めに説くと第二句を置いた、巖頭は曾て他に向つて道

はざりしを悔ゆと言ふて居る所の末後の句を、今や雪寶は君が爲めに説くと言ふ、君といふは吾々お互ひ總べて此の公案に參する諸人のことである、そこで圓悟は若しも其の末後の句を説いたならば、雪寶の舌

が抜けてしまふであらうぞと云ふので、舌頭落地と言ひ、又説不着到底説けるものではない、イヤ説くべきものでは無いと言ひ、更に頭ありて尾なく尾ありて頭なし、結局末後の句は有るとも無いとも判断の

つかぬものよと言ふ、けれども雪寶は續いて明暗雙々底の時節を諺ふ、明暗雙々と云ふは雙明雙暗といふも同じこと、明は物の形の能く見えるとで萬象差別の姿、暗は平等一相無差別の處、今此の末後の句只這

れ是れと巖頭の言ふた立場は、明とも暗とも即ち迷とも悟とも凡夫とも諸佛とも片付けて見らるべき所では無いに依て、明暗雙々底の時節である、圓悟が葛藤の老漢と雪寶が色々の言句を説き立てるのを叱り、

又牛の角なきが加く虎の角あるに似たり、畢竟有りと思へば無、無かと思へば有、明暗雙々では何とも形容のしやうが無いぞと賛成を表し、彼此怎麼あちらも明暗雙々、こちらも明暗雙々、宇宙萬象さらに擇ぶ

所は無い、同條生や共に相知る即ち本則に巖頭の雪峰は我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せずと言ふたのを拈じ來つて其れに注釋を加へて諺ふたのである、これは何も雪峰と巖頭に限つたことでは無い、又

斯ういふことを言ふたならば、頑固な禪僧などが恠むであらうけれども、天地萬物皆悉く同條に生じて同條に死せざるものである、山と川とは同條に生じて其生や同胞である、けれども山は是れ山で水は是れ水

である、其姿も其の作用も同條では無い、梅と櫻は同じ春風に咲くけれども、梅の香と櫻の色とは同條ではない、之を古人は春風無高低花枝自短長とも諺ふてある、今其の同條生の所に於ては共に相知るで、互

ひに同じ趣味を相弄して居る、着語に、是れ何の種族ぞ其の同條に生じたと云ふのは、同胞兄弟であらうか一體に其れは白哲人種か黄色人種か、利利種か婆羅門種か、能く參究して見ると吾々への注意であり、

彼此沒交涉雪寶は共に相知るといふけれども恐らくは互ひに何の交渉も無からうぞと抑へ、又君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ、途中までは親しい道づれであるが、いづれ追分でお別れである、別れた後は何うである、不同條死や還て殊絶、柳の縁は花の知らざる所で、花の紅は柳の知たつことでは無い、人々自ら光明

の在るあり、東方薬師の本願は現世の利益のみで、西方彌陀の本願は未來往生に在るも面白い、着語に拈

の在るあり、東方薬師の本願は現世の利益のみで、西方彌陀の本願は未來往生に在るも面白い、着語に拈

杖子は我が手裡に在りとある、圓悟殊絶の本分は即ち是の如くぞ、争てか山僧を怪み得てん何も不思議なことは無い、然るに爾が鼻孔什麼としてか別人の手裡に在ると門下の學人を警めて、其方たちは人々各自の本分を等閑にして、やゝもすれば他人の爲めに翻弄されて居るとは何事ぞと叱る、雪竇は例のくせで還て殊絶と前句を疊みかけて、サア此の殊絶の處は黃頭碧眼も須らく甄別すべし、黃頭といふは釋尊のこと碧眼といふは達磨大師のことである、此の殊絶なる不同條死の境界は釋迦も互ひに相知ることは出來ない、圓悟が還て棒を喫せんと要すや還て殊絶と疊みかけた上には、愈々圓悟の本分を行ぜぬばならぬやうになつたぞと言ひ、又什麼の摸索の處か有らん其の殊絶の處を其う事むづかしく摸索するには及ぶまいぞと言ふ、又次の句に盡大地の人鋒を亡じ舌を結ぶ、こゝに至りては誰でも手出しも口出しも出來るものでは無いと言ひ、然し我也た怎麼他人は却て不怎麼、すなはち我は我たり汝は汝たり、何も甄別し難いことは無い、只老胡の知るを許して老胡の會するを許さず、酒は醉ふものぞと云ふことだけは誰でも知れる、けれども其の醉ひ心は常人より外に合點するものは無い、果して然らば人々各自に南北東西歸去來サアお互ひに歸るべき所へ歸らうぞと雪竇老漢の大號令である、着語に收と上來の都ての云々を只此の歸去來の一句に能く收拾したとほめ、又脚跟下猶ほ五色の線を帶ぶること、在り歸去來と口では言ふても足元が覺束ないぞと抑へ、更に爾に一條の拄杖子を與へん愈々歸るなら杖を一本貸してあげやうかと擲擲ふ、然らば其の歸つて往く落ち着き場は何處であるぞ、夜深けて同く看る千巖の雪すなはち明暗双々底の好風景である、夜深けて眞暗なところに白皚々たる千巖の雪、石頭大師の參同契に「明暗各々相對して比するに

前後の歩の如し」とある、これが宇宙の眞景で即ち本地の風光である、其れを巖頭は只這れ是れとも言ふた、着語に猶ほ半月程に較れり、若し之を以て末後の句と認める者があつたならば、まだ遠くて本分の地までは尙ほ十五日もかゝるであらうぞと言ひ、從他あれ大地雪漫々、たゞ千巖のみならず大地漫々の雪であつても溝に填ち壑に塞りて人の會する無し誰ありて此の風光を眞實に合點する者は無からう、也た是れ箇の膳漢どもこれも皆盲目だちよと罵しり、還て末後の句を識得すやと警醒して、便ち打つ、末後の句を識り得たと云ふも三十棒、識り得ぬといふも三十棒、こゝに至つては同條も不同條も、双明も双暗もすべて絶勵し盡された、これが即ち圓悟の此の公案に對する本分の見やうである。

第五十二則 趙州石橋略約

本則 舉僧問趙州。久響趙州石橋到來只見略約。虎巖云。如何是州云。汝只見略約。且不見石橋。老漢賣身去也。僧云。如何是石橋。上釣來也。州云。渡驢渡馬。無田氣處。一死更不活。

趙州從諗禪師の住して居られた觀音院は、趙州城の東にあたり石橋を距ること十里とある、其の石橋といふは天台山と南嶽と趙州との三石橋と稱して、天下の名所の隨一であるさうな、そこで或る僧が趙州和尚

に問ふ久しく趙州の石橋と響く到り来れば只略約を見ると言ふた、これは謂ゆる借事間で、石橋に事よせて趙州の佛法を勘檢しやうと云ふのである、略約と云ふは獨木橋、すなはち一本橋のことであるから、此僧が無遠慮にも趙州和尚に向つて、趙州の從諗禪師といふ名前は久しく天下に鳴り響いて居るから、モ少し大善知識らしく眉間から光明でも輝やかして居るかと思ふたに、来て直接に遭ふて見れば何の奇特も無い老耄の坊さんで御座るのうと云ふたやうなアンバイ、隨分失禮な言ひかたである、着語に也た人あり來つて虎の鬚を持つ命しらすの僧ではある、趙州の如き虎の鬚を持で、今にワングリと咬み殺されるであらうにと云ふ、然しながら也た是れ衲僧本分の事ぞ、と褒めたやうにも見えるが又其の石橋に譬へられる事がらは、人に問ふべきことでは無い、人々各自本具のことで、殊に衲僧本分の事であるにと抑へたやうでもある、州云く汝只略約を見て且らく石橋を見ず其れは其方が只老耄だけを見ることが出来て、眞實の趙州老漢を見ることが出来ぬのよと、誠にアツサリとした答ではあるが、中々に毒氣を含んだ一言であるから、着語に其便を得るに慣へり、ササガの趙州であるに依て、人を接することに慣れたものであると言ひ、又這の老漢身を賣り去れり其方は眞實の趙州老漢を見ることが出来まいと言ふたのは、已れと已れの身を餌にして釣を垂れるやうなものぞと言ふ、果して此の僧は其の釣針に懸かつて、僧云く如何なるか是れ石橋、一體に此僧が最初から石橋と略約と二物對待の見を以て、其間に揀擇取捨する所のあることを自白して居るのであるから、ソんなことで到庭此の七百甲子の老趙州を勘破することなどは思ひも寄らぬことである、果して趙州の語路に翻弄されて、略約の外に別段の石橋と云ふ物が有つて、特別の人だけ渡ることであ

もあるかのやうに思ふた、圓悟が釣に上り来れりと言ひ果然と言ふ皆其の模様を評したのである、州云く驢を渡し馬を渡す、其の石橋と云ふ橋は何も異つたことは無い、驢も渡れば馬も渡る、天子も通れば乞食も通る、花も咲けば紅葉も散る、宇宙萬象そのまゝが眞如法性の當體よ、圓悟が一網に打就す何も彼も皆一網に引きあげてしまふたぞと讚し、更に直に得たり盡大地の人氣を出す處なし斯うおつかぶせせられては誰でも動きは取れまいと言ひ、又一死更に再活せず管に氣を出す處なし位なことでは無い、三世の諸佛も歴代の祖師も皆ことごとく死人となつてしまふぞと言ふ、ナゼかと云ふに只此の驢を渡し馬を渡すところ、佛法にも祖道にも用は無いからである。

頌 孤危不立道方高須是到這地始得入海還須釣巨鼈斷

云劈箭亦徒勞猶較半月程堪笑同時灌溪老也有恁麼人曾恁麼來解問○大丈夫漢不可兩兩三三

孤危立せず道方に高しといふは、趙州老漢の人を接する手段が、彼の臨濟や徳山などの忽ち棒を揮ひ喝を吐いて、甚だ孤危峻峻近か寄ることの出来ないやうなことはしない、其の様子を孤危不立と言ふた、孤危不立で誠に言葉やはらかに、汝は只略約を見て石橋を見ずなどと、平生の談話のやうであるけれども、其の平話の中に萬仞峻岸容易に攀ぢ登り難い所のあるのを道方に高しと言ふた、着語に須く是れ這の田地に

到て殆て得べし此れは中々他人の及ばぬ所で、趙州ほどの境界に到り得たもので無くては、決して眞似も出来るものではないと言ふ、言猶ほ耳に在りかねて趙州の機鋒の鋭い噂は聞いて居たが、實に聞きしに違はず威あつて猛からざる所に浸々と感服したと言ふアンバイ、他に本分の草科を還せ納僧の本分を旌はすに草料、すなはち棒もあれば喝もあるが、其のやうな孤危を用ひずとも、平話常談の間に是の如く納僧の本分を旌はすことが出来るとすれば、棒喝其他の孤危峻なる材料は、皆この趙州老漢に譲り渡してしまはねばなるまいと、徹頭徹尾の大賛成である、海に入ては還て須く巨鼈を釣るべし倍て其の趙州の道方に高き調子を譬へて見やうならば、列子に龍伯國に大人あり、足を擧げて數十歩に盈たざるに、五山の所におよび、一釣に六鼈を連ね負ふて國に歸るなどと云ふことがあるやうなもので、佛法の大海に於て一言半句を吐くも、蝦や雜魚を釣るのでは無い、鼈とも謂ふべき大龜、すなはち立地に成佛作祖し得るほどの上根上機の學人を接するのであるぞと言ふ、着語に要津を坐斷して、凡聖を通ぜず要津とは此岸より彼岸に到るに肝要なる渡し場であるが、今此の趙州の機鋒は、煩惱生死とか菩提涅槃とか云ふ所の其の根元から斷ち截るのであるから、其の煩惱生死に沈淪して居る凡夫とか、其の菩提涅槃を得たる聖者とか云ふ所の名目さへも無くなつてしまふのであるぞと言ふ、蝦蟇螺蚌は問ふに足らず斯んな着語は無くもがなと思ふ、大丈夫の漢兩々三々なるべし兩々三々といふはアレもコレもと云ふやうなことで、今は海に入れば必らず巨鼈が目的、其他に鰐が居ても鯨が居ても其んなものには目を懸けないと云ふ意味、笑ふに堪たり同時の灌溪老之は雪竇が趙州を讚歎する餘りに、灌溪老を引合ひに出して比較したのであるが、灌溪老こそ好い面の皮で

である、此れは趙州と同時代の灌溪志閑禪師と云ふ人のことで、此人にも此の本則と誠に同じやうな問答がある、其れは或る僧が灌溪に問ふて、久しく灌溪と響く到來するに及びて只箇の漚麻池を見ると言ふた、漚麻といふは詩經にある語で、少しばかりの水がビチャビチャして居て、僅に麻をひたすほどの小さい池ぞと云ふのである、溪曰く汝は只漚麻池を見て且く灌溪を見ず、僧云く如何なるか是れ灌溪、この問も答も全く今の本則と同じ調子である、然るにこゝで灌溪の答は全く趙州と違つて甚だ孤危峻嶮に、溪云く劈箭急なり、即ち此の灌溪の激流は強弓で射る矢よりも疾いぞと答へた、雪竇は其れを引合ひに出して來て、何も其のやうに力を入れて劈箭急なりなどと威張らないでも、穩健平易に驢を渡し馬を渡すと力も入れず骨も折らず、十分に本地の風光を吐露し得るものと云ふので、笑ふに堪たりと批評したのである、着語に也た恁麼の人ありて曾て恁麼にし來ると言ひ更に也た恁麼に機關を用ふる底の手脚ありと言ふ、二句ともに同じ意味で、さては趙州ばかりでなく外にも斯のやうな問答で學人を接した人もあるぞと云ふのであるが、彼の一句は前の一句の説明として後人が書入れるのが混じたのでは無からうか、劈箭と云ふことを解するも亦た徒らに勞す此の句の意味は既に前に辨じた通りのもので、力を入れて威張つたやうな所だけ、趙州の常談平話には及ばない、そこで只徒らに勞すと言ふたのである、着語に猶ほ半月程に較れり趙州の境界に到るには尙は半月もかゝらうぞと云ふ、似たることは則ち似たり是なることは則ち未だし、形式は能く似て居るけれども、精神の程度は餘ほど違ふて居ると言ふ。

第五十三則 馬大師野鴨子

垂示 徧界不藏。全機獨露。途無滯着。着有出身之機。句下無私頭。頭有殺人意。且道古人畢竟向什麼處休歇。試舉看。

徧界藏さず全機獨り露はるとは、宇宙の本體は萬象の上に其の作用の全分を露はして居るぞと云ふことである、徧界とは十方世界に徧ねく満ちてあると云ふ意味であるから、謂ゆる無限の空間に充ち塞がつて居ると云ふこと、不藏といふも獨露といふも同じ意味で、要する所は其の無限の空間に充ち塞がつて居る所の本體、即ち眞如とも法性とも名けられるもの、或は大極と見られたり、ゴツドと眺められたりするもの。の全力の活機は、山となつては高く聳え、水となつては長く流れ、花となつては春に咲き、紅葉となつては秋に散る、少しも掩ひ藏す所はない、赤裸々露堂々の姿である、其れを其儘にお互ひ人間の上に受用し得て自在無礙になつたのを、且らく假りに名けて本分の衲僧とも、又は佛とも祖とも曰ふのである、そこで其の衲僧たる者の作用は、途に觸れて滞りなく着々出身の機あり、即ち如何なる場合に於て如何なる事情に出會ふても、其の爲めに束縛されるといふこと無く、自由自在に働らくことの出来る様子を、着々出

身の機ありといふのである、又句下に私なく頭々殺人の意ありといふは、其の衲僧たる者が本分の令を行じて學人を接する時になつては、一言一句皆悉く天眞の本性に契ふて、決して自己の憶斷を雜えない様子を句下無私と謂ふ、已に是れ無私の言句であるに依つて、頭々殺人の意ありで、如何なる人に對しても皆悉く其生命與奪を自由にする機鋒がある、且く道へ古人畢竟什麼の處に向つてか休歇するサテ是の如き大機大用を逞くする衲僧の、謂ゆる殺人の鋒刃を受けつゝ大安心の境に住して休歇することの出来る人は、古人の中に於て誰であらうぞ、試みに舉看よと本則を呼び出した、前の語句の中で休歇といふ二字が誠に肝要なので、煩惱だの菩提だの生死だの涅槃だのといふ重擔を悉く卸してしまふて、自家の座床に樂々と穩坐することの出来る姿を休歇といふのである。

本則 舉馬大師與百丈行次見野鴨子飛過

大師云。是什麼處去也。丈云。野鴨子飛過。

師云。什麼處去也。丈云。飛過去也。

大師遂扭百丈鼻頭。何曾飛去。

馬大師といふは江西馬祖山の道一禪師のこと、第三則の處に大略其の傳記を申して置いたことであつ

た、百丈山の懷海禪師は即ち馬祖の上足の法嗣である、ある日のこと師弟二人で散歩して居た時に、野鴨子の飛び過ぐるを見る。圓悟の着語に兩箇落艸の漢と言ひ轆裡に轆すと言ふ、師匠も師匠なれば弟子も弟子である、何の目的もなしにノソノソと遊び歩くとは何事ぞと抑へたけれども、此の兩人決して空しく遊び歩くのでは無い、即ち直に野鴨子の飛び過ぐるのを見つけた、然るに圓悟は蕤願して什麼か作さん本分の地には一法も見ろべきものは無いはずであるに、野鴨子などに目を留めて何にするぞと抑へた、大師云く是れ什麼ぞこれは馬大師が野鴨子の何物たるかを知らずに百丈に問ふたので有らうか、マサカさうではあるまい、垂示に謂ゆる徧界不藏全機獨露の處を、此の野鴨子の飛び過ぐる上に於て、弟子の百丈が何う見て居るかを勘檢せられるために、斯う問はれたことは申すまでも無い、着語に和尚まさに知るべしと、これは圓悟が馬大師に向つての一拶である、更に這の老漢鼻孔も也た知らずイヤ馬大師は野鴨子を知らないに見える、この様子では己れの鼻の孔が何う明いてるかも知らないであらうと冷かす、丈云く野鴨子まことに正直な答である、明日以後は佛祖の頂顛を蹂躪して、天下人の如何ともし難き百丈大智禪師も今日の所では未だ此の場合に於て自由の分は無かつたのである、故に着語にも鼻孔已に別人の手裡に在り、到底百丈を活かさうとも殺さうとも馬大師の手心一つといふことにあつた、又只管に欸を供す氣の弱い罪人が正直に白狀するやうな姿であるぞと言ひ、更に第二杓の惡水は更に毒ならんと言ふ、此の二問一答はマダしものこと、次の一問は別して透りにくからうぞと豫言したのである、大師云く什麼の處にか去る、さて彼の野鴨子は何處へ住くのであるぞ、イヤ徧界不藏の全機は何處に落着するぞとの問である、着語に前箭は猶

ほ軽く後箭は深し、前の是れ什麼ぞと放つた矢よりも、今度の什麼の處にか去ると放つた矢の方が百丈の胸板へグサリと深く立つたぞと云ふ、第二回の啗呀これは第十六則にあつた啗呀の啗の字で親鳥が卵の中の兒鳥をつゝき出すことで、即ち師匠の馬大師が弟子の百丈に悟らせやうと思ふ一心で、前に是れ什麼ぞと第一回の啗呀を試みたが、未だ雛が卵から出ないに依て、今また什麼の處にか去ると再び啗呀したと云ふのである、也た合に自知すべし馬大師自家の事ならば何も百丈に問ふの必要は無い、丈云く飛び過ぎ去る實に言はずとも知れたことよ、着語に只管に他の後に隨て轉ず少しも自己出身の處は無く、どこまでも人の口車に乗せられて歩く氣の毒さよ、當面に蹉過す全く行き違ひになつてしまふた、大師遂に百丈の鼻頭を扭る、馬大師到頭疔癢をおこして百丈の鼻づゝを指の尖でキリ、と扭つた、こゝに遂にと云ふてあるが、此字は何處に使つてあつても、其前に彼れ此れとヤツて見たけれども、何うも思ふやうに往かぬに依て、遂に斯うしたと云ふやうな場合の時に使ふ字である、即ち此の一字に依て馬大師が百丈のために色々心配せられたことが解つて、師匠の恩の深重廣大なることが想ひやられる、圓悟が父母所生の鼻孔却て別人の手裡に在ると言ふ、百丈元來自家本具の光明があるでは無いか、然るにソレを自ら發揮することが出来ないで、屢々馬大師に手敷を掛けるとは何事ぞ、これは吾々お互ひ誰でも尤も反省せねばならぬ要點である、槍頭を振轉すと此れは馬大師が今までは言葉で以て啗呀して居たのを、今度は腕力で開發させやうとするのを許したのである、鼻孔を裂轉し來れりとはモウ言ふにや及ぶ、丈忍痛の聲を作す百丈は鼻づゝを扭られてアイタ、と號んだ、此の一刹那に無始劫來の無明煩惱ことごとく根絶しに切斷し盡したと見

える、着語に只這裏に在り、只此の忍痛アイタ、と云ふ聲、これは馬大師が強いて百丈に啼かせたのか、幾ら啼かせやうとしても本具の聲の無いものは啼きもしまい、還て喚で野鴨子と作し得てんや、さては野鴨子が啼いたので有つたかナ、どうぢや百丈これで還て痛痒を識るや、痛さ痒さが解つたとすれば實にお目でたい、大師云く何ぞ會て飛び去らん、其方は先刻野鴨子が飛び過ぎ去ると言ふたが、ソレ其處に居て其のやうな聲を出して啼いてるでは無いかと言ふ、實に馬大師の慈悲廣大限りも無い言葉である、圓悟は餘りに其の深切に過ぐるを抑へて、人を瞞することなくんば好しと言ひ、更に這の老漢元來只鬼窟裡に在て活計を作すと云ふ、忍痛の聲を認めて法性法身の説法の如くに言ふ所甚だ婆談に類するを抑へるのである、然しながら百丈は此の一段の因縁に依て、其翌日馬大師から汝深く今日の事を知ると云ふ印可の證言を受けたのである、又圓悟も評唱の中に於て、諸人佛祖のために師とならんと要せば、百丈に參取せよと言はれてある、古人暫時も放過せず、日々夜々に寝ても起きてても、只此の事にのみ専心工夫せる結果、此の如き時節因縁に逢著したのである、吾人お互ひ眞面目に學ぶべき肝要の所ぞ。

頌野鴨子

又成羣作隊 ○ 知何許 用作什麼 ○ 馬祖見來相共 語打葛藤 有馬祖識箇俊底 話盡山雲海月情 短 ○ 知他打葛藤 多少 依前不會還

飛去

○ 飛過什麼處去 欲飛去 鼻孔在別人手裏 ○ 已却把住 老婆心切 ○ 道

道

什麼道 ○ 不可也 教山僧道 ○ 不可作野鴨子 叫蒼天蒼天 ○ 脚跟下好與三十棒 ○ 不知向什麼處去

野鴨子知ぬ何許ぞ、長空を飛び行く野鴨の數は何程あるぞ、梵網菩薩戒經の序には、「我今盧舍那まさに蓮華臺に坐す、周匝せる千華の上に復た千の釋迦を現す、一華に百億の國ありて一國に一釋迦あり、各々菩提樹に坐して一時に佛道を成す」と説かれてある、野鴨子の道づれば實に限りもなく多いことぞ、圓悟は群を成し隊を作すと云ひ、又一雙ありと言ふは百丈を斥す、用て什麼をか作さん幾ら有つたからといふても何の用に立つかと拂ひ、更に麻の如く粟に似たり十方三世の一切諸佛、西天東土の歴代の祖師、そんな物が入用ならば幾らでもあるぞと言ふ、馬祖見來りて相共に語る、かねて馬大師は其の多くの野鴨子と親しい中であるから、それを百丈に紹介して是れ九什麼ぞと話しかけたが、百丈は彼の現に空を飛で行く野鴨だけが見えた様子で、馬大師が少し間のぬけた氣味であつた、そこで着語に葛藤を打して什麼の了期が有らん、馬大師が幾ら其やうなことを言ふたからでも果てしのあるものでは無いと抑へ、又箇の什麼をか説かんと、元來言語道斷で彼れの此れのと云ふべきことでは無いと言ひ、けれども獨り馬祖のみありて箇の俊底を識る此の百丈には十分に見込があるといふことを馬祖は知つて居るから、次の句の話し盡す山雲海月の情で、更に什麼の處にか去ると第二問を發し馬祖は深切の心底を傾け盡して居る、奈何せん東家の杓柄は長く西家の杓柄は短かし、馬祖と百丈と程度が違ふて居るので、知ぬ他は葛藤を打すること多少ぞ色々と馬大師が言はれても相談になりかねて、依然として會せず還て飛び去るとばかり、未だ〜解らない、圓

悟は固と着語した、此の固の字は日本の俗に何か不慮に氣の付いた時など、ハツと云ふ聲を出す其音を寫したのであるさうな、今もハツと氣がついて、其の野鴨は何處へも往かぬ、それ此處にと云ふたアンバ、道ふこと莫れ他は言ふことを會せずと、イヤこれは百丈が會せぬのでは無い、飛び過ぎ去ると言ふ一言に、凡聖迷悟皆悉く勦絶し盡したのであらうぞと冷かし、什麼の處にか飛び過ぎ去れりや其の行き先きを知つて居るかとはこれは學人への拶着、飛び去らんと欲す却て把住せらる、百丈は飛び過ぎ去ると言ふたけれども、中々飛び過ぎ去ることが出来なないで、馬大師に鼻柱をキユツと扭られてアイタ、着語に鼻孔は別人の手裡に在り、己れの鼻を他人に自由にされた、己に是れ他のために注脚を下し了れり、此れは雪竇の頷の能く行届いたをほめ、老婆心切とは馬祖の把住、すなはち鼻頭を扭却したのを贊し、更に什麼をか道はん、こゝで百丈が何と言ふたものぞと言ふて、次の道へ道へを引き出した、サア什麼とか道はん百丈は只アイタ、と忍痛の聲を發したのみであつたが、也た山僧をして道はしむべからず他人のことはイザ知らず圓悟は何も言はぬぞ、野鴨子の叫を作すべからずマサカ野鴨子の眞似でもあるまい、蒼天蒼天とコレが圓悟の言ひやうと見える、何を悲しんだのであらうぞ、脚跟下好し、三十棒を與ふるに、本式でゆけば斯うぢや、知らず什麼の處に向つてか去る結局落處は何處であるぞと門下及び吾々までへの拶着である、圓悟は評唱の結末に、雪竇然も頷し得て甚だ妙なりと雖も、争奈せん跳不出なることをと言ふて居る。

第五十四則 雲門近離甚處

垂示 透出生死撥轉機關等閑截鐵斬釘隨處蓋天蓋地。且道是什麼人行履處試舉看。

凡そ禪宗の參學は定慧等學を必要とするので、禪定の力と智慧の働きとが圓滿せんければ、定力も其用をなさず、智力も亦其効がないことになる、そこで其の定力の結果は生死を透出してイツ何時に生死岸頭に立ち、忽ちに閻魔大王のお迎ひにあづかつて、用事はてゝ家に歸るが如く心嬉しく死に就くことが出来るやうになり、又其の知見の力を以て機關を撥轉し、如何なる場合に於ても自由自在に働き得るやうになるのである、既に是の如く定慧圓明の地に到り得た作家の衲僧であれば等閑に鐵を截り釘を斬る、等閑といふは別段に注意を用ゐずに、思ふまゝに言ひ手當り次第に何事でも行ふ、それが其儘に截斷し難きことカチキ鐵釘の固きが如き困難なる煩惱妄想をも、自在無礙に易々と透りぬけて、隨處に蓋天蓋地なり、隨處といふは何處でもといふこと、即ち順境に於ても逆境に於ても、嬉しい中でも悲しい處でも、其處が其儘に其事がらを取りも直さず蓋天蓋地で、宇宙萬象の上に充滿瀾淪することになる、且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞ、さういふ境界の人は誰であつたらうぞ、試みに舉す看よと本則を舉揚する。

本則 舉雲門問僧近離甚處。僧云。西禪。實頭○當時好門云。西禪近日有何言句。僧展

與二本分草料。好門云。西禪近日有何言句。僧展

兩手家○不○了也○勾○賊○破○門○打 一掌○據○令○而○行○快○便○難○逢 僧云。某甲話在備○待○要○翻○款○那
奪○鼓○底○手○脚○一○者○若○不○放○過○一○合○作○麼○生 門却展龍○不○解○騎 兩手惜○可○門○便○打○合○是○雲○門○喫○何 僧無語故○當○斷○不○斷○返○招○其○亂○開○聚○合○喫○多 門便打少○放○過○一○者○若○不○放○過○一○合○作○麼○生

雲門、僧に問ふ近離甚の處ぞ、これは例の如く初めて來た坊さんに從前の經歷を問ふ定例の試験である、着語に也た西禪と道ふべからず、雲門の問ふ所は地理上における近離の處では無いぞ、然るに若し地理上から西禪から参りましたなどと言ふまいぞと、ころばぬ先の杖をさづけけた、畢竟この問は探竿影草で、此の僧の定慧の程度を探偵するのであるぞ、東西南北と道ふべからず假令いづれの方角にもせよ地理的の答では濟まぬぞと言ふ、僧曰く西禪、西禪といふは「傳燈錄」第十卷に南泉禪師の法嗣十七人を擧げてある中に、蘇州の西山和尚とあつて、他の本には此人のことを西禪和尚と書いてある、今此僧は是れまで其の西禪和尚の坐下に參じて居たものと見えて、正直に西禪と答へた、けれどもこれでモウ脚下を明かに見すかされてしまつたのである、着語に果然として可憐實頭と冷かし、又當時好し本分の草料を與へて三十棒を食はせてしまへば好かつたにと言ふ、門云く西禪近日何の言句かあると更に第二の試験にかゝつた、着語に擧げんと欲すれども恐らくは和尚を驚かさん其の西禪近日の言句をお聞かせ申しても好いが、おほかた喫驚されるであらうと思ふと、斯う言へば好いにと重々に冷かす、深く來風を辨ずといふは雲門は飽くま

で此僧の臍の下までも見ぬいて居るぞと言ふのである、也た和尚に似て寐寤するに相似たり、イヤ西禪近日の言句は誠に能く貴方に似て而も寐ぼけて居るやうで御座ると、斯う答へても好かつたにと何處までも冷かす、然るに此僧中々に活機がある即ち僧兩手を展ぶ、西禪近日の言句で御座るかサア此の通りと云ふアンバイで、物をば言はずに兩手をグツト廣げた、圓悟は敗闕し了れり、これでモウ大失策よと抑へ又雲門に向つて賊を勾して家を破る斯のやうな僧を相手にして居ては、盜人に追錢で身代限りするやうなものぞと言ふ、妨げず人をして疑着せしむることを然りながら此の兩手を展べた所に何か一見識あるかのやうに思はれて、初心の者に疑ひを起させるだけの作用はあるぞと益々冷かす、門打つこと一掌と手の平でピシヤリ、圓悟は大賛成で令に據て而して行ずと言ひ、又好く打つたとほめ、更に快便逢ひ難しと重ねく、の讚敷ぢや、僧云く某甲話在イヤ其れに就てはお話がありますと言ふた調子は、中々に作家の納僧らしく見えるぞ、着語に備翻疑を要すること待つや、歎と云ふことは前にも在つたが、裁判所で罪人の白状した記録のことである、それを翻すといふは、豫審で言ふたことを公判の時に自ら取消すやうなことをするのである、此僧すでに雲門に一掌を食はせられたに就ては、ガラリと引くり返りて、イヤ某甲にお話があるなど、一筋の血路を開いたのであるかと言ふ、却て旗を擔き鼓を奪ふ底の手脚あるに似たり此僧の勢ひは殆んど雲門の陣中に切り込んで大勝利を得さうであるぞと擲論す、サスガの老作家たる雲門大師そこには抜けめのあるべきかは、早く己に機先を制して却て兩手を展ぶと、彼の僧が先刻やらかして却つて一掌を喫した通りのことを爲られた、この時に今度は彼の僧の方からピシヤリと雲門大師を打つことが出來てあ

つたら面白いが、リスガに此僧もマンザラの初心でもなければ勿論狂人でもないに依て、僧無語、何の言句も出なかつた、着語に喩とあるオヤ危険よと云ふたアンバイ、青龍に駕輿すれども騎ることを解せず、此僧せつかく此處まで漕ぎつけながら無語で退ぞくと哀れであると云ふので、更に惜むべしと着語した、門便ち打つ。そこで雲門は更に此僧をドシンと一棒の正令を行じた、着語に放過すべからず何うしても赦しては置けぬ所ぞと言ふ、又此棒まさに是れ雲門喫すべし何が故ぞ斷すべきに斷せざれば返つて其亂を招く其僧真に英靈の漢であつたならば、雲門が兩手を展べた時にビシヤリと雲門を打つてさへ置けば、今になつて雲門に打たれるはずは無いのであつたにと擲論し、更に闍黎多少をか喫すべし此れは雲門に向つて闍黎も何ほどか棒を喫せねば成らぬだけの過はあらうぞと言ふ、一着を放過す、多少の棒に止まらずモツと罰すべきであるけれども、先づ／＼此位で赦して置かう、若し放過せずんば合に作麼生これは坐下への擲着で、少しも赦さないとした時には何うするのであると思ふか、審細に研究して見るとの垂誡である。

頌 虎頭虎尾一時收殺一人刀活人劍 凛凛威風四百州須是這漢

却問不知何太嶮始得一千兵易得 師云放過一將難求

着天一人舌頭 却問不知何太嶮蓋天蓋地 師云放過一若不放過又作麼生

此頌は七言三句のみで第四句が無い、前の第三十六則の長沙遊山の頌は五言七句で第八句が無く、咄と云

ふ一字を以て結であつたが此頌は放過一着といふ四字で結んである、これも亦た頌の一體である、虎頭虎尾一時に收むるといふは、雲門大師の人を接する機鋒は、始めもあれば終りもあり頭尾照應圓滿してあることを稱賛したのである、先には僧が兩手を展べた所で一掌を與へ、後には僧の無語に乗じて又一掌を與へた調子、少しも隙間が無い、そこで圓悟は殺人刀活人劍と着語した、殺さうとも活かさうとも自在無礙である、須らく是れ這の漢にして始めて得ん是の如き機轉は雲門で無くてはと重々の讚歎、凛々たる威風四百州、それ故に雲門大師の威德風采は、支那四百餘州の道俗皆悉く景仰し、天下人の舌頭を坐斷す、誰一人も批難することは出来ぬ、嘗に四百州ばかりでは無い、蓋天蓋地で十方三世に獨尊ぞとほめあげた、却て問ふ知らず何ぞ太だ嶮なる、此句は古來よほど解しにくい句であると言ふことで、大燈國師やは却問といふ雲門が兩手を展べた所で、不知といふは僧の無語の所、太嶮といふは雲門が打つた所であるとも言はれたさうな、さう一々あてはめて見れば不思議も無いやうであるが、やはり詩句としては解しにくい、然るに風外老人は易々と之を辨じて、各々雲門を取り違へまいぞ、尋常に茶を喫するとき虎頭に騎て喫したか、飯を喫するとき虎尾を収めて喫したか、坐臥經行凛々たる威風に非ざるは無い、之を雪竇が諸人に自知自得せしめんが爲めに、却て問ふ知らず何ぞ太だ嶮なると廣くかけて、此様に閃機電轉するは何うしたものぞと問ひかけたのである、人々返照して看よと言はれてある、これで能く解つた、畢竟此の一句は吾々後學の者に參究の要路を指示せられたのである、そこで圓悟は盲枷瞎棒すべからず如何に本分の正令であるなどと云ふたからても、妄りに人を打つと云ふことが其れを謂れなく嶮峻とか孤危とか名ける

わけには往かぬ、しかし雪竇元來未だ知らざる、こと在り、雲門の喩の如何なるかを知らぬために、却て問ふ知らず何ぞ太だ喩なるなどと疑問らしいことを言ふたのであらう、關黍相次着也、關黍は雪竇をさし、相次は造次と同じで不注意の意味、または疎忽の義、即ち此の一句は雪竇が不注意疎忽に斯のやうなことを言ふたのでは無いかと、此れ亦た吾人に疑團を重ねさせて、其の結局は更に説明の路を開かせる、却て師云く一着を放過すと突き放した、師とは雪竇である、第三句まで知し來りて、まさに結句を置くべきに當りて、諸人試みに之を結んで見ると云ふたアンパイ、これが即ち雪竇の此の本則を拈起して吾人を提撕せられる活手段である、故に圓悟は若し放過せずんば又作麼生と拶着した、こゝに至つては盡大地の人一時に落節す誰ありて勝利を占め得る者はあるまいと言つて、禪床を撃つこと、一下とカチリ、此れが即ち圓悟の結句である。

第五十五則 道吾漸源弔孝

垂示穩密全眞當頭取證涉流轉物直下承當向擊石火
閃電光中坐斷誦訛於據虎頭收虎尾處壁立千仞則且
置放一線道還有爲人處也無試舉看

穩密全眞とは、謂ゆる把住底の境界、穩は安穩で密は綿密、天皇陛下が九重の大奥ふかく玉簾の中に在しますやうな姿、其穩密の處そのまゝに宇宙全體の眞相である、此に於て當頭に證を取る、當頭といふは俗に出合頭といふほどのことで、凡て見るにつけ聞くにつけ皆ことごとく悟りとなる、流れに涉りて物を轉ずとは謂ゆる放行底の作用で、彼の穩密全眞の光が都べての事物を照してゆく、流れに涉るといふは見れば見るに任せ聞けば聞くに随つて逆らはないこと、物を轉ずとは其の見るもの聞くものに逆はずに、其の事物を活かして働からせる様子、其の直下に承當す其場を去らず其時を移さず佛祖の大道に承當する、承當とはビタリと出合ふて隙間のない姿、君と喚ばれるれば應と答ふるやうに、スツクリ眞理に契ふ事を承當と謂ふ、擊石火閃電光中に向て誦訛を坐斷す、此れは前の流に涉りて物を轉ずる様子を説き明したので、如何ほど迅速鋭利なる間に於ても、快刀を以て亂麻を截るが如くに樂々に其誦訛を辨明する、誦訛といふは前には屢々あつたが贅牙といふも同じ意味で、物事の錯雜して辨明し難いことをいふのである、虎頭に據て虎尾を收むる處に於て壁立千仞、謂ゆる騎虎の勢ひで、縦かに躊躇すれば虎のためにワングリと咬みつかれる場合、こゝに至りて壁立千仞で何とも他から手のつけやうも口の出しやうも無いと云ふほどのことは則ち且らく置く、今は一線道を放して千軍萬馬の重圍の中から纔に一筋の血路を開いて、而して還て人の爲にする處ありや也た無しや、之を古人の中に求むれば道吾が漸源を接したやうなもので有る、試に擧す看よ。

本則 學道吾與漸源至一家弔慰源拍棺云。生邪死邪道一什

好不理程○這吾云。生也不道死也不道龍吟霧起虎嘯風生○老婆心切源云。爲

什麼不道果然錯會○吾云。不道不道箭猶輕後箭深○前回至中路太愧

源云。和尚快與某甲道。苦不道打和尚去也却較些子○罕逢人

便打好打○且道打他作什麼後道吾遷化源到石霜舉似前話知而

○不知是是霜云。生也不道死也不道飯却元來有人喫源云。爲什

麼不道語雖一般意無兩種○且霜云。不道不道天上天下○曹溪波浪如

於言下有省諸漢○且源一日將鋏子於法堂上。從東過西

從西過東也是苑中得活○好與先師出氣霜云。作什麼載也源云。覓

先師靈骨喪車背後懸藥袋○悔霜云。洪波浩渺白浪滔天覓什

麼先師靈骨也須還他作家始得雪竇着語云。蒼天蒼天太遲生○賊

源云。正好着力且道落在什麼處○先師曾向何處出身不得太原孚云。先

師靈骨猶在大衆見麼○閃電相似○是

道吾といふは石頭樂山道吾と相承して達磨大師十世の法孫である、潭州の道吾山に住して名は圓智と曰は

れた、漸源は其の道吾圓智禪師の法嗣で、後に同じく潭州の漸源に住した仲興禪師の事である、此時には

漸源が未だ修行の最中で、道吾山の典座を勤めて居たとも云へば侍者をして居たとも云ふことである、或

時師弟もろとも一家に至て弔慰す、檀家の葬式に往つた、然るに漸源は頻りに生死透脱の工夫を凝らし

て居る最中であるから、何事に就けても空しく看過しない、直に其の死人の棺を拍つて云く生か死か、此

の棺の中に入れて居る人は生きて居ますか死んで居ますかと道吾に問ふた、これは實に人生最終の大問題

である、現象から見れば確かに生死があるに依つて、此の棺の中は死んで居るに相違ない、然るに之を本

體の上から見れば謂ゆる物質不滅勢力保存で、其の身體も精神も死んだとは言はれない、しかし其の時に

は不生不滅であつて、元來生れたと云ふことを認めない上からでなければ、死なるといふことも認められ

ない、そこで吾々が生死の現象中に在つて生死の苦しみを脱しやうと云ふには、不生不滅の本體と一致す

ることが出来なければ成らぬ、已に不生不滅の本體と一致することが出来れば、此身此儘すなはち生死の

まゝに不生不滅であるから、更に生死を棄て、別に不生不滅の涅槃を求めるとは及ばぬのである、然るに道理を説明して見れば斯んなことであるけれども、實地に此の生死の身を以て不生不滅の本體に一致し、朝な夕なの都べての事は自然に不生不滅の眞理のあらはれた姿であると云ふやうになることは、中々に容易なことでは無いに依て、古人は二十年三十年の辛苦艱難をなめて修行をせられたのである、乃ち今漸源が生か死かと問ふたのも、とかく此の生死といふことが氣にかゝるからのことである、着語に什麼と道ふぞ、元來不生不滅であるに、生か死かとは何と言ふのぞと叱る、又好不惺々これは日本の俗語に好い馬鹿だといふやうな惡口、道の漢猶ほ兩頭に在り生と死との兩つに心を奪はれて居ることよと言ふ、吾云く生とも也た道はず死とも也た道はず實に生死に涉らないのであるから、生とも死とも言ふべきでは無い、花の咲くは生か死か、紅葉の散るは生か死か、咲くの散るのと云ふことは、煩悶せずには咲くべきには咲き散るべきには散る、山の高きは生か死か、水の長きは生か死か、生とも也た道はずには山は白から高い、死とも也た道はずには水は白から長い、然るに吾々人間に在つては何事に就ても煩悶苦惱を免がれない、畢竟妄想妄念に過ぎぬのである、圓悟が龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生すと、道吾の答を讚歎した、又帽を買ふに頭を相す、漸源の頭に相當して帽子を授けられたので、誠に老婆心切なる答であるに、漸源は只其の道はず道はずと云ふ言葉にばかり着き廻つて、什麼としてか道はさると突つ込んだのは、中々一所懸命の様子ではあるが、氣の毒な事には、睨過了也また果然として、錯て會すと云ふ着語を免がれない、漸源は道吾に於て言ふべき道理があるのを隠して言はないとも思つたものと見る、然るに道吾は更に道はず道はずと言ふ

た此の道はず道はずが八萬四千の法門も五千餘卷の經文も、皆此の一句に攝し盡してあるのである、故に圓悟は惡水驀頭に澆々と讚歎した、又前箭は猶ほ輕く後箭は深し、前の生とも也た道はず死とも也た道はずと言ふたのよりも、今度の單に道はず道はずと言はれた方が非常に強いと云ふ、然るに漸源は未だ時節因縁が到らぬものと見えて、回つて中路に至りとあるから、葬式のあつた家では十分に問答も出来なかつた爲めに途中に於て更に問答を始めた、着語に太だ惺々とある、如何にも其の參究に熱心には感服の外はない乃ち源云く和尙快に某甲が爲に道へ、若し道はざれば和尙を打ち去らん、快の字は疾速の義でスマヤカの訓に讀むが好いと云ふことである、何でも彼でも是非に言ふて聞かせてもらひたい、若し何うしても言はぬと云ふなら、モウ師匠とは思はぬから打ち擲るぞと云ふ實に命がけの掛合ひである、圓悟は却て些子に較れり此の打つぞと言ふた所が中々本分に契ふた様に見えるぞと冷かし、更に穿耳の客に逢ふこと罕なり多くは舟を刻む人に遇ふと評した、漸源の耳の孔は塞がつて居るから幾ら言ふて聞かせても聞えないで却つて舟を刻むの愚をなして居る、船舷を刻むの故事は辨ずるまでも無からう、這般不啣喙の漢に似ば地獄に入るこそ箭の如くならんと漸源の遲鈍を抑へて坐下を警誡せられたが、其の道のために熱心なる所は却つて千歳の龜鑑ともせねばなるまい、但これほどまでに眞面目に熱心でありながら、道吾の道はず道はずが會せられぬを見ても、生死の大事を決定することの容易ならぬを知らねばならぬのである、吾云く打つことは即ち打つに任ず道ふことは即ち道はず、言ふべきことを言はぬのでは無い、言ふべからざることであるから言はないのである、即ち此の道はず道はずの一言が其の眞理を言ひ盡して居るのであるから、洞山

大師は頭を要せば斬り持ち去れ道ふことは即ち道はずと言はれたこともある、況や打たれるほどのことは何でも無い、圓悟は再三に、須く事を重んずべし、道はず道はずがコレで三度に及んで御丁寧なことよと言ふ、就身打劫、これは前にあつたが盜賊が人の身體にビタリと就き添ふて而して其の懐中の物などを劫めることさうな、今は漸源が言ふて聞かせてもらひたいと迫るのに打ち任せて、どうぞ悟らせたいと思ふ大慈悲の方便を、其れに譬へたのである、故に更に道の漢滿身泥水と言ふてある、泥の中に陥入てる者を救ふには己れも滿身泥水にならなければならぬからである、又初心改めず最初から道はず道はずの一本鎗で、更に他の手段を用ひない、源便ち打つと到頭漸源は師匠の道吾を打ちなぐつた、圓悟が好打と冷かして、更に且く道へ他を打て、什麼をか作すと、これは此の漸源が打つたのが好いか悪いか、道理に契ふか契はぬかを審細に參究して見ると門下への一拶、さうして置いて更に屈棒、元來の人の喫する有ること、在りと言ふ、屈棒といふのは罪の無いものを打つ事である、世の中には斯のやうな屈棒を喫することも間々あることよと冷評ぞ、此時に道吾師匠は漸源を論して、其方が此の老僧を謂れなく打つたと云ふことが露顯したならば、他の多くの弟子どもが承知しまいに依つて、暫くの間は餘處へ往つて修行して來いと云ふて道吾山を去らせたと云ふことである、漸源は其後餘處で熱心に修行した効があつて、遂に大に悟る所があつて始めて師匠の道吾に遭ひたくもなり、且つ遭ふべき面目もあるやうになつたのであるけれども、残念なことには其間に道吾師匠は遷化せられてしまふたに依て、同じ道吾の弟子で自分のためには法兄である所の石霜慶諸禪師の處へ往つて印可を求めた、其事を本則に後に道吾遷化す源石霜に到て前話を舉似すと云ふてある乃ち

前の問答から師匠を打つた事まで陳述して、さうして石霜の意見を尋ねた様子である、着語に知て故らに犯すと言ひ、又知らず是か不是ならば、則ち也、太奇と言ふ、此時には漸源もモウ大體は知つて居るか、石霜に問ふたからでも、到底何とも言はぬであらうと知りつゝ、わざと試みに問ふたのである、又自分の今の境界が是であるが不是であるか、そこは先輩に勘検してもらはねばならぬが、確かに是であつたならば面白いと云ふほどの考へで居たらしいと云ふ圓悟の鑑定である、然るに霜云く生とも也、道はず、死とも也、道はず、全く先師そのまゝの答である、着語に可然新鮮、まことに珍らしい答で是れまで聞いたことが無いと言ふ、實に言葉は先師と少しも違はないけれども、漸源の聞き心地は實に新鮮であつたらう、しかし這般の茶飯却て元來人の喫するあり、道はず道はずが日用尋常の家具で、朝な夕なに誰も皆受用不盡であるべき道理ではあるが、其の日常の茶飯を眼前に置きながら飢渴に困しんで居るのが世の常態である、源云く什麼としてか道はざると之も昔のまゝに突つ込む、即ち知つて故らに犯す様子がアリくと見えるやうである、圓悟は語は一般なりと雖も、意は兩種と言ふ實に漸源も今昔の感に堪えぬであらう、且く道へ前來の間と是れ同か是れ別か能く辨別して見るとは坐下への注意、霜云く道はず道はず何處までも先師と同一轍である、着語に天上天下只この道はず道はずが十方法界に充滿して居ると言ふ、しかし曹溪の波浪若し相似たらば限りなき平人も陸沈せられん、コレは前の語雖も一般二意兩種と云ふのと語は別にして意は即ち同じなものも也、太奇である、源言下に省あり、始めて多年實參實究の効があらはれて先師廣大の慈恩に感泣する時節に至つた、省ありと云ふは大悟と云ふまでには往かないでも、頗る疑團を打破するこ

との出来た姿を、斯ういふのが禪宗の術語である、圓悟が瞎漢と罵る、眼前目下に歴々分明なることを今まで見えぬとは何といふ盲目ぞ、言下に省ありなどと云ふて此の圓悟を欺くまいぞ、元來省も不省もあるべきことでは無いぞとの意、源一日鉄子を將て法堂上に於て東京より西に過ぎ西より東に過ぐ、法堂のことは前にもあつたが禪宗の師家たる人が衆のために法を説く大講堂であるから、尤も神聖なる道場である、然るに漸源仲興和尚が鉄子を持つて法堂の中をあちらこちらと何が捜してあるく様子である、着語に也た是れ死中に活を得たり、今までは全く死人同様であつた漸源も、今度は非常に活潑なる機用を呈することになつた、好し先師のために氣を出だすに、これでこそ道吾圓智禪師の弟子らしくなつたぞとほめる、他に問ふこと莫れ且く這の一場の機用を看ん、これは漸源が斯のやうな妙なことをしても誰も相手になる者が無ければ、手持無沙汰で恥をかくだけのことであるから、誰も構なないが好いぞと圓悟の揶揄である、然るに石霜が之を見つけて什麼をか作すぞと咎めた、着語に隨後斐藪也これは何の分別もなく人の言葉に付き随つてゆくことの俗語であるさうな、そこで誰も相手にならぬが好いぞと言つて置いたに、今石霜が知らず／＼漸源の要求に應じたやうになつたのが無分別であると云ふのである、源云く先師の靈骨を覓むイヤ此邊に先師道吾の靈骨があらうと思ふから、それを掘り出さうと思つて鉄子を持つて來たと言ふ今に至つて先師の在世に此の活機を呈することの出来なかつたのを、千年後の吾々から見ても残念に堪えぬけれども、其實は先師の靈骨は石霜となつて働らき漸源となつて働らいて居る、然し圓悟は喪背脊後に藥袋を懸く、これは事既に及ばすと云ふ意味の俗語で、死人に藥を與へて何の役に立つぞと抑へたのであ

る又悔らくは當初を愼まざることを、會て生か死かと問ふた時に疎忽であつたから致し方が無いと言ひ、更に備、什麼と道ふぞ今頃になつて先師の靈骨を覓めるなどは何事ぞと叱る、霜云く洪波浩渺白浪滔天什麼の先師の靈骨をか覓めん今我が此の法堂は大海のはてなく底をも知らず一點の塵埃をも留めない處であるに、先師の靈骨など云ふは汚はしいものは幾ら覓めたからとても覓得られるものでは無いぞと言ふ着語に也た須く他の作家に還して始て得べし、他の作家とは石霜をさす、サスガ石霜でなくては此の本分の説法は出来ないと讃歎、群を成し隊を作すも什麼をか作さん石霜以外に幾千百人あつたからでも到底斯うは働けぬぞと重ね／＼の稱揚である、雪寶着語して云く蒼蒼天これは申すまでも無い天を仰いで歎き悲しむ姿であるが、此の着語は次の正に好し力を着くるとある漸源の語の次に在るべきを、誤つて此へ入れたのであると言ふことである、とにかく雪寶は何を其う悲しんだのであらうぞ、先師の靈骨を覓めることが出来ないと言ふのを貰ひ泣きしたのでも有らう、道吾の遷化を今更に悲しむのであらうか、又漸源が覓むべからざる靈骨を覓めるのを悲しむのであらうか、或は又蓋天盖地悲歎の一枚で呵々大笑と同一致でもあらうか、圓悟は太遲生と言ひ賊過後の張弓と言ふ、皆今になつては後の祭り六日の菖蒲、十日の菊ぞと抑へたのである、又好しのために一坑に埋却するに道吾も石霜も漸源も雪寶も今は皆同罪であるぞとの意であるが、圓悟も亦た免がれまい、源云く正に好し力を着くるに、先師の靈骨は覓められぬと言はれるなら、愈々これから更に一段の力を入れて働まねばならぬぞと言ふ、着語に且く道へ什麼の處にか落在す、此の漸源が力を着くると云ふは結局どうすると云ふことであるぞとの撻着、先師會て備に向つて什麼とか

道ひし、先師の言葉忘れはしまし、先師を打つた事も覚えて居らうがと言ひ、この漢頭より尾に到り直に如今に至るまで出身することを得ず、まだ力を着けるの着けないのと言ふて居るか抑へる、太原の孚云く先師の靈骨猶ほ在り、太原の孚上座と云ふ人は雪峰の法嗣で、亦た一方の大善知識である、曾て此の公案を評して道吾禪師の靈骨は確かに在るぞと言ふた、近くは石霜および漸源が今日此事あるを隨喜し、遠くは本源自性の法身舍利は普天率土に充滿して居るを證明したのである、着語に大衆見るや太原が猶ほ在ると云ふが、一同に見たかと注意し、イヤ其形は閃電に相似て蹤跡を見留められないと自ら答へ、又是れ什麼の破草鞋ぞ、其の靈骨とか云ふものは座塚へでも棄てるが好いぞ、結局太原の評は猶ほ些子に較れり、到底十分では無いぞと抑へた。

頌 兔馬有角斬○可煞奇特 牛羊無角斬○成什麼模樣 絕毫絕釐天上天

如山如嶽在什麼處○平地起 黃金靈骨今猶在却却舌頭寒

白浪滔天何處着放過一着○四跟下 無處着果然○却較

西歸曾失却祖不了累及兒孫 雙履打云爲什麼却在

兔馬に角あり、兎や馬には元來角の無いものと思ふたのには角があると云ふ、棺の中に入つて居る者は元來死人であると思ふたに、生とも也た道はす死とも也た道はすである、着語に斬とある、其の角を一

刀に斬り棄ててしまふた、又可煞奇特と言ひ可煞新鮮と言ふ、兎馬に角があるとは實に珍らしいでは無いか、遂に是れまで聞いたことのない話であるぞと言つて、佛法は凡情を以て解すべからざることを明かす、牛羊角なし牛や羊には元來角のある者と思ふたに、今は角が無いと云ふ、生とも也た道はす死とも也た道はすである、着語に又斬とある、其の無い角をもホキリと斬り落すぞと言ふ什麼の模樣をか成す、其の角のない牛や羊は如何なる姿のものであらうぞ、參究して見ると坐下への注意と見える、別人を瞞することは即ち得ん他人はイヤ知らず、此の圓悟は其のやうな言句に欺かれはせぬぞ、毫を絶し釐を絶すとは長空萬里一點の雲をも留めない無相無形の有様、毛ほどのものも見るべきは無いと本體の無限にして平等、元來生死に涉らない姿を示された、着語に其れが即ち天上天下唯我獨尊の境界で、第二人は無いぞ、然るに偏は什麼の處に向つてか摸索する若し此の絶對無限の處に於て、生だの死だのと摸索して居ることであつたならば、萬劫にも歸家穩座することは出来ぬぞと坐下へ警誡される、果して然らば終に一物の見るべき無きかと云ふに、山の如く嶽の如し、歴々分明に誰にも見える、此の峨々たる山嶽および彼の洋々たる江海、これ皆かの絶毫絶釐底の模樣であつて、絶毫絶釐が其儘に如山如嶽である、これは何の不思議も奇特もない、朝な夕なに誦で居る「般若心經」に色即是空々即是色と聞き飽きて居る道理であるけれども、それが實地に自己の生死問題になれば、幾んど別事の如くなるものであるから、生か死かの間に煩悶することになるのである、圓悟は其の山嶽が什麼の處に在ると言ふて坐下に注意し、平地に波瀾を起すやうな餘計なことを言ふたと雪竇の口を塞ぎ、更に其の山嶽が偏の鼻孔に壅着す、其れが見えぬかと重

ねて參學の者に擧示せらる、これで道吾の道はず道はずを頌し了りて、第五句以下は石霜と太原との語に就て語られた、太原は黄金の靈骨今猶ほ在りと云ふけれども、石霜は白浪滔天であると云ふ、其靈骨を何の處にか着けん、ヤツと堀り出した靈骨を何處へ置いたものであらうぞと言ふ、これを前の第三句第四句に照し合せて見れば、山の如く嶽の如きものを絶毫絶釐の處へ何う据え附けたものであらうぞと云ふたやうなものである、畢竟は滔天の白浪そのまゝが黄金の靈骨であつて、黄金の靈骨が白浪となつて滔天する、此間に着けるの着けないのと云ふ論量は無いのであるが、然るに之を言句に出せば早く已に第二第三に落ちるのであるから、圓悟は舌頭を截斷し、咽喉を塞却せよと叱り、一邊に拈向せよ、其の靈骨を何處ぞの隅へでも片つけて置けと言ひ、只恐らくは人の伊を識得すること無からんことを、到底其の靈骨を靈骨らしく始末をつける者はあるまいぞと吾人を警醒せらる、又次の句の着語に一着を放過す何の處にか着けん丸出しに言ひ放つたは少し放行に過ぎやうぞとの意、脚眼下に蹉過す脚下も頭上も悉く白浪滔天であるに、何の處にか着けんとは一步踏み違へたぞと抑へ、眼裏耳裏着ぐることを得ず、元來滔天の白浪は法界徧滿であるから眼見耳聞の及ぶべきでは無いと云ふ、そこで雪竇は例の如く疊み返して着ぐるに處なしと愈々本地の風光を示し、道はず道はずの眞景を一句に畫き出だした、圓悟が果然さうくるであらうと思ふて居たと言ひ、却て些子に較れり、之でこそ少しは價值があると言ひ、しかし雪竇も到頭身動きのなからぬ處へ陥つてしまふたぞと讚歎した、雪竇は更に其の着るに處なき様子を古人の例に求めて、隻履西に歸て曾て失却すと語ふた、これは言ふまでも無い達磨大師は支那に於て死なれたのを熊耳峰へ葬つたと思

ふて居たに、隻履すなはち片方の靴のみ壻の中に遺して置き、片方の靴を携さへて印度へ歸つたと云ふことであるが、然らば其の印度に達磨が居るか云ふに、誰あつて遭ふた者も無い、遂に其の行衛が分らない、結局生とも道はれなければ死とも道はれない、今も丁度其のやうなものよと故事を引いて結んだのは、文句の上の話である、要する所は宇宙の眞理實相は彼れの此れのと考へることも出来ねば云ふことも出来るものではない、謂ゆる言語道斷心行所滅である、其れを今は着くるに處なしと言ふたまでのことぞ、着語に祖彌了せざれば、累兒孫に及ぶ、元來初祖の達磨が死んだやら生きて居るやら分らないに依つて、其の兒孫の道吾も石霜も漸源も雪竇も、皆此の通り路頭に迷ふのであるぞと讚歎し盡した着語である、更に打て云く什麼としてか、這裏に在ると、圓悟は例の本分の正令を行つて雪竇は曾つて失却すと云ふが、其の失却したものが何ういふわけが我が手裡に在るのであらうか、これは只圓悟の手裡のみでは無い、人各自皆其その手裡に握つてあるはずであるに、何故に其れを自由に受用することが出来ないものであらうぞ。

第五十六則 欽山一鐵破三關

垂示 諸佛不曾出世亦無一法與人。祖師不曾西來未嘗以心傳授。自是時人不了向外馳求殊不知自己脚跟下。

一段大事因緣。千聖亦摸索不着。只如今見不見。聞不聞。說不說。知不知。從什麼處得來。若未能洞達。且向葛藤窟裏會取試舉看。

諸佛曾て出世せず。亦た一法の人に與る無し。世人は多く三千年前に印度に出世して、十九の時に出家し八十の時に入滅した釋迦其人の如き者のみを佛と思ひ、又其の釋迦が一代五十年間說法して謂ゆる五時八教の如きもののみを法と思ふて居ることであるが、それは佛法の影法師に過ぎぬ、眞の佛法は出世して説示するには及ばぬ、説示しないでも山は自から高く出世しないでも水は自から深い、譬へばニュートンが發見せんでも、引力は宇宙間に活動して何の不足も無いやうなものぞ祖師曾て西來せず。未だ嘗て心を以て傳授せず。世人は多く千三四百年前に天然から支那へ來た、碧眼の胡僧達磨其人の如き者のみを祖師と思ひ、其の達磨が直指人心見性成佛と言ふたやうな事ばかりを、禪宗とか佛心宗とか思ふて居るが、それは祖道の影法師に過ぎぬ、眞の祖道は西來して傳授するには及ばぬ、西來しないでも三年に一聞あり、傳授しないでも雞は五更に向つて鳴く、譬へばワットが發明しないでも蒸氣力は宇宙間に活動して居て何の不足も無いやうなものぞ、然るに自ら是れ時人了せず外に向つて馳求す、何ぞ別段に佛法とか祖道とか云ふものが外に有つて、それを釋迦とか達磨とか乃至師匠とか知識とか云ふ人たちから、説き聞かせてもら

はねば解らぬもの、傳授してもらはねば悟れぬもの、やうに思ふて、アレのコレのと煩悶して佛を求め祖を求め、殊に自己脚跟下一段の大事因緣は千聖も亦た摸索不着なることを知らず、一大事因緣といふことは「法華經」に釋迦如來が我は一大事因緣の爲めに世に出現すと言はれたのが本據であつて、其の一大事と云ふは一切衆生を佛の知見に開示悟入せしむると云ふことである、さて又其の開示悟入の結果はと云へば、謂ゆる生死即涅槃煩惱即菩提の家郷に歸り得て、自在無礙に各自の本分を盡すに在るのであるから、これは本より他人の事では無い、人々各自に寝たり起きたり食つたり被たり笑つたり泣いたりする上の事で、諸佛が出世して説示してくれないでも、お互ひに眼に色を見て耳に聲を聞くに不自由は無かつた、祖師に傳授してもらはなくても、手に在つて執捉し足に在つて運奔するに不便を感じたことは無い、然るに其の本源如何と顧みるに至つては茫然として自失する、そこで外に向つて馳求することにもなるのであるが、結局これは千聖も摸索不着で、如何に大慈悲の佛でも祖でも他人の鼻の孔へ呼吸を通じてやることは出来ぬ、亦た他人の舌を借りて己れの食物を味はふことも出来るわけのものでは無い、只如今見不見聞不聞説不知不知什麼の處よりか得來ると自己に反照して見るより外は無い、此の見不見聞不聞等の語を、古人が色々読んで居る、見れども見えずとも讀めば、不見を見ると讀み、又は見即不見の義にも見て居る、其他に種々の訓もあるけれども、今は見るとか見ないとか、聞くとか聞かぬとか、説くとか説かぬとか、知るとか知らぬとか云ふことは畢竟何處から來るのであるぞと、即ち摸索不着底の本源を參究せしめやうとの意であらうと思ふ、若し未だ洞達すること能はずんば已むを得ぬに依て且く葛藤窟裡に

向つて會取せよと本則を徴して試みに擧す看よ。

本則 擧良禪客問欽山。一鏃破三關時如何不驗○不妨奇特。山云。放出關中主看知○主山高按山低。良云。恁麼則知過必改機見。

而作○已落二頭。山云。更待何時有擒有縱。良云。好箭放不着所在便。

出果然○第二棒打人痛。山云。且來闍黎呼則易遣則難。良回首果然把不。

山把住云。一鏃破三關即且止。試與欽山發箭看虎口裏橫身。

爲無勇也。良擬議果然摸索不着。山打七棒云。且聽這漢疑三十年逆水之波。

命令○恁麼○有始有終○頭正尾正○這箇棒合是欽山喫

良禪客といふは巨良と曰ふ人で、一時は名を知られた作家であつたさうなが「傳燈錄」には其傳が見えぬ、尤も此の本則の因縁は「傳燈錄」にも「佛祖宗派圖」にも載せられてある。欽山といふは洞山悟本禪師の法嗣で、邊洲欽山の文遠禪師のことである、或時に巨良和尚が欽山禪師に見える因み一鏃に三關を破る時如何と問ふた、目的の處へ到達するまで三箇所の關門がある、其れを一筋の矢で一時に射破つてしまふには何うしたもので有らうぞとの問である、一念に三大阿僧祇劫を越ゆるとでも、一心に三觀を貫ぬく

とでも、一句に三句を透るとでも、一棒に三世諸佛を殺すとでも、いづれにしても階級を経ず本文の田地に到らうと云ふのである、圓悟が嶮と言ふ、其のやうな戦ひを欽山に挑みかけるのは誠に危險ぞ、然し其の志氣は防げず特持であるのみならず、これは中々に防げず是れ箇の猛將で、餘程舊參の作家と見えるとほめた、山云く關中の主を放出せよ看ん、三關を破るのが目的ではあるまい、先づ其の關中の主人公は誰であるぞサアこゝへ出して見る、着語に劈面來也。それ關中の主が眼の前にといふアンバイ、也た大家の知らんことを要す、大家とは參學の諸人をさす、これは良禪客ばかりのことでは無い、誰も彼れも關中の主を知らなければならぬぞとの注意、主山は高く按山は低し、主山按山は前の山と云ひ後の山といふも同じこと、高いもあれば低いもある、此れが即ち關中の主の寫眞であるぞと圓悟が出て見せたのである、良云く恁麼なるときは即ち過を知て必ず改めん、ハイ左様で御座るか、左様ならば拙者の射かたが悪いのでありましたから、追て復た射直しませうと戰場を退いた、着語に機を見て作すとある、欽山の機鋒の容易ならぬを見て取り、更に陣を立て直さうとする様子ぞ、けれどもモウ已に第二頭に落在して居るから、第一機に戻ることは出来ないぞと云ふ、山云く更に何の時をか待たんナニ過ちを改めると言ふて退ぞか、それは何時改めるのであるぞ、即今直下に何とか働けぬから逃げる敵を逐ひかける、着語に擒あり縦ありサスガ欽山の手兵を操縦する策略は巧みなものであるとほめ、更に風行けば草偃す、此の欽山の威風には誰でも屈伏せねばなるまいと言ふ、良云く好箭放つて所在に着せずと言ふて便ち出づ、惜しい一矢であるが思ふ的に中らないから止めやうと、惡まれ口をきながらサツサと出て往つてしまふた、着語に果然到頭

射損してしまつた、翻歎を待たんと擬するか、前には過ちを改めると云ふたでは無いか、然るに其様な失禮なことを言ふは、豫審の申し立を公判で翻覆しやうとするのか、第二棒は人を打てども痛からず其なこと何うして欽山を勦破することが出来るものか、果して山云く且く來れ關黎マア〜待て、チョット此へ來いと聲をかけた、着語に呼ぶことは則ち易く遣ふことは則ち難し、譬へば獅子や虎を狩るやうなもので、餌を以てなりとも餌を置いてなりとも呼び寄せることは容易に出来るが、若しも其の獅子や虎を擒り損つた時になつては、モリ何處へなりとも往つてくれと云ふても、中々先方で承知しまいぞと欽山からかつたのである、さて又良禪客を喚び得て彼れが首を回らしたとしても什麼を作すに堪へん、若しも彼れは眞の衲僧であつたならば、喚ばれたからと云つても戻るはずは無し、若し亦オメ〜と戻るやうなものであるならば、全く不啣喙の漢であるから、喚び戻した効もなからうぞと云ふのである、良首を回すも着語に果然として把不住、イヤハヤ良禪客は到頭關中の主人公を取り遁がしてしまふたぞと抑へ、中れりこれは欽山の喚び戻し策が上出来であつたとほめた、山把住して云く一鏃三關を破ることは即ち且く止く、試に欽山がために箭を發せよ看ん、欽山ヤヲ良禪客を引提へて一矢に三關を破るなどと云ふ空論よりもサア此の欽山を一矢射て見ろ、言句を吐くとも翻筋斗をするとも打つとも喝するとも、何とでも働いて見ると、誠に單刀直入の勢ひで迫られた、着語に虎口裏に身を横たふ良禪客の生命は一刹那の間に決することになつた、逆水の波で之を順流させることは到底むづかしいぞ、義を見て爲さざるは勇なきなり、斯くありてこそ欽山は眞に義勇の名將であるとの讚歎ぢや、良擬議す、サスガの巨良和尚も此に至つて窮し畢

つた、先刻いくら喚ばれても首を回らさず耳を掩ふて去れば好かつたに、果然として機索不着となつた、鬪悟は遂に本分の令を行じて打て云く可惜許實に惜しいことをと叱る、山打つこと七棒して云く聽す這の漢疑ふこと三十年ならんと、これが欽山自から關中の主となつて、敵軍を平定し、天下を一統して、再び叛旗を掲げる者のないやうにとの勅令を下したのである、着語に令まさに、無慮なるべし必ずソウなければならぬぞと言ふ實に欽山の作略は始めあり終りありと讚歎し、又頭も正しく尾も正しいと稱揚し遂に這箇の棒は合に是れ欽山の喫すべかりしと言ふ、若し彼の良禪客が眞實舊參の作家であつたならば、疾に欽山を打つべきはづであつたにと云ふのである、此の公案は畢竟關中の主權を争ふたのであるが、幾分衝天の志氣を逞くして高尚幽玄なる議論をしても、一鏃の三關のと二物を見て、破るの破らぬのと對待に滯つて居ては、實地に當つて大失敗を取ることこの如くに至らざるを得ぬのである、吾人お互ひに反省せねばならぬ所ぞ。

頌 與君放出關中主中也○當頭蹉後放箭之徒莫葬大○死不再活過丁
取箇眼兮耳必聾左○眼半斤右○放過一着捨箇耳兮目雙瞽右○眼八兩路○
進前則墮抗落墮退後則猛虎衝脚君不見打○見麼君不見打○見麼玄沙有言兮是玄沙不大丈夫先天路打○云還見麼

爲心祖

一句截流萬機寢削○鼻孔在我手裏○
 未有一天地世界已前在什麼處安身立命

君が爲めに放出す關中の主サア參學諸君の爲めに關中の主人公を出して見せるぞ、射損なはぬやうに矢を放つて見ろと言ふ、圓悟が先づ第一箭を放つて、ソレ中つたと云ふ、又當頭に蹠過す、關中の主は關中に在つてこそ貴きに、已に放出しては大間違ひぞと抑へた、退後退後これは警蹠の辭で昔し將軍または諸侯など通行の時に下に居れ下に居れなどと云ふて道路を警戒したものである、今も關中の主のお通りであるぞ近寄つて無禮をするなど圓悟のおしやれである、放箭の徒奔商なること莫れ參禪學道の人は荷且にも此の主人公を射はづしてはならぬに依て、慎重の上にも慎重に勇猛精進に實修實證せねばならぬぞと言ふ、着語に一死再活せず若しも一步を誤つたならば天地はるかに隔たることになるぞ、これは誠に大譎訛で容易に辨じにくい所である、と云ふて居るうちにハヤ過ぎ了り、關中の主は何處へか見えなく成つた、箇の眼を取れば耳必ず聾す其の箭の放ちかたの難しさは、眼を取らうとすれば耳が聞えなくなると云ふやうなわけで、一方へ片寄ればハヤ的が外れる着語に左眼半斤で一斤には半分足らない、一着過を放す雪寶餘りに説き立て、老婆心に過ぎて本分に契はぬぞと抑へた、一方へ片寄れぬに依つて左邊にも前まず右邊にも後れずでなければならぬ、箇の耳を取れば目双べ聾す、之は前と反對で前は眼を取れば耳が聾すとあつたが、此れは耳を取れば目が聾れると言ふ、要する所は取るも捨るも皆皆聾の原因である、三祖大師が「至道は難きなし唯揀擇を嫌ふ、只憎愛なければ洞然として明白」と言はれたのも、全くこの道理である、

鐵かに取捨に涉つて憎愛とか好惡とか云ふ心があつたならば、關中の主人公を見ることは決して出来ぬ、着語に右眼八兩前の左眼も半斤で半分、此の右眼も八兩すなはち半斤で一斤には半分足らない、けれども此に只一路を得たり已に耳も聾し眼も瞎すれば、始めて二邊に涉らず、取捨を離れたる所の一線路が開けたぞと云ふ、進前すれば坑に墮ち墮ち落つ退後すれば猛虎脚を銜む、此の兩邊を超過して始めて關中に入り主人公を見ることの出来る様子は、淨土門の二河白道の譬喩のやうである、憐むべし一鐵三關を破る良禪客の此の一間は誠に參玄の要路であるに依て、眞に愛すべきであるぞと言ふ、着語に全機恁麼に來る時如何、彼の良禪客の一間は未だ全機を呈し來つたとは思はれぬが、若しも此に満分の活機を全提し來つて斯う問ひかける者があつたならば、諸人は何と働くぞと坐下への拶着と見える、什麼と道ふぞ、是れは雪寶に向つて、何を愛憐すると言はれるか、圓悟は不審に思ふぞ、破や墮や其の三關は疾に破墮し了つたと言ふ、的々分明なり箭後の路ナゼ彼の一鐵破三關を愛すと云ふかといふに、彼の一矢で箭路が能く分つたに依て、後來飯宗だの同安だのが色々論評して、參玄の衲子に關中の主を射とめさせるやうに成つたと言ふ、着語に他人の箭路を尋ねて矢を放つやうな者は死漢であると罵しる、咄と此れも箭後の路を咄破する、打つて云く還て見るや此の打つたのは圓悟が一矢を放つたのである、諸人其の箭路が見えたかと言ふ、君見ずや着語に癩兒伴を牽くと雪寶が古人の語を引くのを賛し、又葛藤を打し去る餘計なことをと評す、言沙言へることあり此れは其實は飯宗禪師が先きに言はれたのを、後に玄沙和尚が擧揚したのであるさうな、着語に那箇が是れ玄沙ならざる、何も事々しく玄沙言へることありなどと言ふには及ばない、誰

でも好いでは無いが、大丈夫は天に先ちて心の祖と爲ると、世上の通例には天を以て萬物の始と爲し又心を以て萬法の源として居るのであるが、今は其の天に先ちて其の心の祖と爲ると言ふ、これが即ち關中の主の最尊無上なる所以である、着語に一句截流して萬機寢削す、之は只此の一句に都ての衆流を截断して其の本源に徴し、萬機すなはち凡聖も迷悟も善惡邪正も智愚貴賤も、皆悉く其の沙汰は止んでしまふと言ふ、ナゼかと云ふに衆流萬機は皆彼の天地ありての後のことであり、又心の子孫であるからである、鼻孔我が手裡に在り、しかし如何に大丈夫でも其鼻づらは此の圓悟が捉へて居るぞ、さうで無くては關中の主とは言はれないと、圓悟が關中の主を獨占してしまふたが、未だ天地世界あらざる以前に什麼として安身立命したものであらうぞ、それが出來さへすれば圓悟の鼻孔を各自の手に任せることも出來ると云ふものである、此の着語は學人に向つての拶着と見える。

第五十七則 趙州至道無難

垂示云。未透得已前一似銀山鐵壁。及乎透得了自己元來是鐵壁銀山。或有人問且作麼生。但向他道。若向箇裏露得一機。看得一境。坐斷要津。不通凡聖。未爲分外。苟或

未。然。看。取。古。人。樣。子。

未だ透得せざる已前は一に銀山鐵壁に似たり、宇宙の全眞を悟り得ない前に在つては、萬事萬物悉く疑團の種で、煩悶苦惱を免かれぬ有様、譬へば銀山鐵壁の攀ぢることも登ることも出來ないやうなもので、彼の宋の東坡が廬山烟雨浙江潮、未到千般恨不消と云ふたも、この様子を諷ふたのであるが、然るに透得し了るに及んでは自己元來是れ銀山鐵壁なり、已に宇宙の全眞を悟り得て見れば自己の當體この儘に宇宙の全眞であるに依つて、謂ゆる天上天下唯我獨尊、三世の諸佛も歴代の祖師も我に向つて手を着けることも口に出すこともならぬ、即ち我が身心直に是れ銀山鐵壁である、彼の東坡が前の二句に續けて到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮と諷ふたは此處の味ひである、或は人ありて其自己元來銀山鐵壁の様子は作麼生と問ふが者あつたならば但他に向て云はん、箇裡に向つて即ち此の本則に至道、更に通俗に言へば宇宙の眞理に於て、其の眞理を一機の上に露し得たは一境の上に看得する、即ち見るにつけ聞くにつけ寢るも起きるも語黙も動靜も、其儘に眞理を提さげ至道の妙用に契ふやうになりさへすれば、要津を坐斷して凡聖を通ぜず、生死を脱して涅槃に到るとか、煩悩を斷じて菩提を證するとか云ふ所の、此岸彼岸を二つに見る階級的の法門などは、皆悉く排ひ除いて、凡夫だの聖者だのと云ふ名もない處に到り得ることも容易であるから、未だ分外と爲さず、其れが決して身分不相應の事とは言はぬ、別に不思議のない當然のことと云ふものである、けれども苟し或は未だ然らずんば古人の様子を看取して、審細に參究せねばならぬぞ

と、其のお手本には尤も好い公案があると云ふので本則を引き出した。

本則 舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇如何是不揀擇道鐵
多少人吞不得○大有三州云天上天下唯我獨尊平地上起骨堆○衲僧鼻孔

僧云此猶是揀擇果然隨也轉了他州云田庫奴什麼處是揀擇

石崩僧無語放備三十棒

或る僧が趙州すなはち觀音院の從諗禪師に問ふた。至道無難唯嫌揀擇と云へり如何なるか是れ不揀擇、この至道無難唯嫌揀擇と云ふ語は、會て三祖鑑智僧璨大師の作られた「信心銘」の冒頭の二句である、それを趙州和尚が毎常拈提して人に示されたので、已に前の第二則に其示衆に就ての問答を擧げられてあつた、此僧もソレを知つて其の謂ゆる揀擇を嫌ふと云ふ言葉を捉へ、何故に揀擇しては悪いのかと突込み、趙州が何と答へてもヤハリ揀擇では無いかと突かゝる考へと見える、至道と云ふは至極の大道と云ふことで、即ち宇宙の眞理である、それを吾人の朝な夕なに實行すると云ふことは、無難、すなはち何も格別困難なことでは無い、實に容易なことである、火が物を焼くに何の困難がある、水が物を濡らすに何の難澁なことがあらうぞ、けれども若しも火が炭や薪に向つて其の木は好きだとか此の炭は悪いかか擇り嫌ひをしたならば、決して火の本分を全うすることは出来ない、水で物を洗ふときに其の衣服は美人の肌着であ

るから奇麗に洗つてやらうの、此の股引は監獄の囚徒が穿いたのであるから御免を蒙むると云ふやうなことは言はない、吾々お互ひも其通り縁に隨ひ法に任せて任運放曠に、何事にも揀擇する所さへ無かつたならば、天下泰平國土安穩で、何の苦勞も無いのである、然るに其の揀擇しないと云ふことを理窟では直に分るが、實地に就ては無難どころか中々困難であるから、此の如何なるか是れ不揀擇と云ふ問題が誠に大切なことになる、着語に這の鐵蒺藜多少の人吞むことを得ず之は容易な問題では無いぞと言ふ、大に人の疑着すること有る在り、此疑問は今に始めぬことで此僧のみには限らない、満口に霜を含むこれは中々誰にも容易に説き得ることが出来ぬ、州云天上天下唯我獨尊十方世界に充滿して都べて對待するものは無い、これが即ち無難の至道に揀擇を絶した姿である、着語に平地上に骨堆を起す其のやうなものを平地上に持ち出されては往來の邪魔になるぞと、抑へるやうな語を以て趙州古佛の機鋒英邁を讚歎した、衲僧の鼻孔一時に穿却す垂示に謂ゆる要律を坐斷して凡聖を通ぜざる處であるから、誰ありて手も口も出しやうは無い、金剛もて鐵券を鑄るこれは開不得と云ふ意味の俗諺であるさうな、一體に鐵券と云ふは確實なる證據と云ふことであるに、しかもソレを金剛で作つたとしては、固いが上にも更に堅いと云ふことである、僧云く此れ猶ほ是れ揀擇この僧は最初からコレが言ひたいので、此の問答を始めたのであるから、ここぞと思ふて突かゝつた、着語に果然として他に隨て轉じ了れり、此の僧は最初より言葉咎めを得意として居るのであるから、唯我の字も我他彼此の我の字と見え、獨尊の尊の字も貴賤尊卑の尊の字に見えるので、斯のやうなことを得意らしく言ふのである、しかし這の趙州老漢を揶揄したつもりであらうが、州云く

田原奴[○]什麼[○]の處[○]か是[○]れ揀[○]擇[○]ぞと叱[○]りつけられた、田原の原の字は舍の誤りで、即ち田舎奴と云ふは讀んで字の如く、東京の人などが輒もすればコノ田舎ものメがと人を罵るのと同じことで、無智蒙昧の人を叱る言葉である、即ち今も趙州が江戸ツ子のペラボーメ調子で何だ此の田舎ツボーめ何處が揀擇だとぬかしやがるんだと言ふやうなアンパイ、着語に山崩れ石裂く實に恐ろしい勢ひぞとほめた、僧無語サスガに言葉咎め博士先生も、到頭こゝで閉口してしまふた、圓語が備に三十棒を放す、と誠に有り難い御賞典である直に得たり目瞪し口吐すること、之は僧が吃驚して一言も出し得なかつた有様の形容である、然るに風外老人は此の田舎奴と唯我獨尊と、是れ同か是れ別か、田舎奴と言ふたのは褒めたのか誇つたのか、之を兩極となし去る者が多いであらうが、若し此僧が眞の作家であるならば、此の田舎奴と言はれた言下に、眞に天上天下唯我獨尊と言ふて禮拜せねばならぬ所ぞと言はれた實に審細に參究すべき點である。

頌 似海之濶 是什麼度量 淵源難 如山之固 什麼人堪得 蚊蟲弄空

裏 猛風 也有怎麼底 果然不 蠟蟻撼於鐵柱 同坑無異土 且得沒 揀兮

擇兮 什麼河頭賣 趙州來也 當軒布鼓 已在言前 一坑埋却 如

初めの二句は趙州古佛の定慧圓明にして機轉宛轉無礙自在なること、到底窺ひ知るべからざる様子を讚歎した、即ち其の深きことは海の深きに似たりとある、着語に是れ什麼の度量ぞ淺いの深いのと比量するは

何事ぞと咎め、其實は淵源測り難し、海に喩へたも未だしぞと言ひ也、た一半を得ざる、こと在り、繼かに半分ほどにしか當らないと言ふ、これ等の着語は皆無難の至道を標準として言ふのであると云ふことを忘れないやうにせんければならぬ、其の固きことは山の固きが如し、八風吹けども動ぜず巍然として雲間に聳ゆるやうなものぞと言ふ、着語に什麼人が撼かし得ん、如何なる衲僧であつたからとて、此の趙州老を動かすことが出来るものか、故に今山の如しと稱したのも猶ほ半途に在り、到底十分の讚歎には當らないと言ふ、次の二句は彼の僧が此の趙州を勘驗しやうと謀つた愚かさを誡しめる、蚊蟲空裏の猛風を弄す、蛇や蚊は風のないに時こそ蠢々と飛び廻ることも出来やうが、空裏の猛風に出會ふたならば、何處の梵天國へ吹き飛ばされてしまふか知れたものではない、着語に也た怎麼底あり彼の僧の如き實に其通りである果然として力を料らず己れの分量を知らないにも程があるぞと誡める、可煞自ら量らず異本には可煞を可笑にしてある、それならば彼の僧が己れの力を量らない大敗北したのが可笑と云ふのであるが、さもなければ前の着語を別語を以て重ねたまでのことで無くても好いと思ふ、蠟蟻鐵柱を撼かす、之は只蚊蟲を蠟蟻に改め、猛風を鐵柱にしただけのこと、全く同じ意味のことを對句にしたまでのこと、螻蛄の龍車と云ふも同じで、字句の意も亦た辨するまでも無い、故に着語にも同坑に異土なしと言ふた、且得沒交渉かの田舎奴が蠟蟻の身を以て趙州を撼かさうとしたのは實に沒交渉で、木に竹を接がうとしたやうなものよ、閻黎他と同參閻黎とは雪齋をさしたので、今お前が海に似たとか山の如くだとか言ふて居るのも、大抵彼の僧の道づれらしいぞと、雪齋を抑へたやうに言ふて吾々に語句を離れさせやうとの慈悲である、さて次に結

末の二句は雪竇餘才を弄して活句を呈した、揀たり擇たり軒に當る布鼓、彼の僧の重荷らしく擔ひあるく所の揀擇、其の揀と云ひ擇と云ふ其れが其の儘に至道の當體で、言語道斷心行處滅の布鼓であるぞと言ふ、布鼓といふのは布で張つた太鼓といふことで、幾ら打つても鳴らないものと定つて居る、今此の無難の至道も其の通り、幾ら擔ぎ廻つても言詮を以て落着することの出来るものでは無い、畢竟揀擇だの不揀擇だのと云ふは皆其の人に在るので、第二則の所で現に趙州老が事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了りて退けと言ひ、それを雪竇が頌して揀擇明白君自ら看よと言ふのである、又此の次の第五十八則をも參考して審細に工夫すべきである、着語に水を擔ふて河頭に賣る、之は言はずも知れたことよと云ふ意味、河端へ水を賣りに往つたからても誰が買ふものか、什麼と道ふぞ元來言句を雜れたことを、揀たり擇たりなどと言ふは何事ぞと抑へ、趙州來也其の揀擇即至道を唱へる調子は、趙州老人ソツクリだとほめ、布鼓の下に己に言前に在り、之も疾から知れきつたことよといふ意味、一坑に埋却せん趙州も雪竇も色々面倒なことを言ふて人に迷惑をかける、二人とも一坑へ活埋にしてしまはふぞ、麻の如く粟に似たり此の着語はこゝに用がない、現に異本には書いて無いのであるから刪るが好いと云ふ説がある、打て云く爾が咽喉を塞却す、これで誰も何とも言へない、即ち布鼓の當體があらはれた。

第五十八則 趙州時人窠窟

本則 學僧問趙州至道無難唯嫌揀擇。是時人窠窟否兩重公案。州云曾有人問我直得五年分踈不

○也是疑人處踏秤硬似
○猶有這箇在○莫以己妨人

下 ○面赤不語直胡孫
○喫毛蟲○蚊子咬鐵牛

これは垂示が無くて直に本則ぢや、雪竇が趙州の至道無難に關する公案を拈提することこれで三回である、餘程此話に興味を持つて居られたものと見える、僧あり趙州に問ふ至道無難唯嫌揀擇と是れ時人の窠窟なりや否や、此僧は中々の舊參であつて、常に趙州和尚が動もすれば此の至道は難きこと無し唯揀擇を嫌ふと云へる、此の三祖大師の語を拈提して人に示される所を捉へ、さう屢々同じことを言はれるのを見れば、或ひは和尚が此の窠窟に陥つて居るのでは無いかと突き込んだのであるが、サスがに和尚がとも言へぬからワザと餘處くしく時人すなはち當時の世の人たちがとは言ふたけれども、其實は直に趙州和尚の攻撃に掛つたのである、窠窟といふことは今さら申すまでも無いが、すべて何事でも一方に片寄つて住着する處があれば、菩提も涅槃も佛界も悟道も皆窠窟である、苟くも窠窟に落ち入れれば其のために束縛されて自由を得られぬことは、煩惱生死に束縛されたのも菩提涅槃に束縛されたのも、溺死と焚死との違ひほどのことで、命の無いと同じことである、然るに若しも趙州和尚が幾ら三祖大師の金言であるからと云ふても、至道無難の窠窟に陥入て居るとあつては七百甲子の老古佛の金箔が剝けてしまふ、趙州が之に

對して何と答へられるか、誠に天下人の耳を傾けて聞かんと欲する所である、着語に兩重の公案これは已に前則で済んで居るぞ、けれども也、是れ人を疑はしむる處それが窠窟であるか無いかは別疑の間である、秤鎚に踏着すれば硬きこと、鐵に似たり、秤鎚は物の輕重を量るものであるから、いづれか一方に片寄らぬばならぬ、今若し佛法の參究が其の秤鎚のやうに孰れなりとも、一方に片寄つたとすれば即ち窠窟になるのであるから、硬きこと鐵に似て如何とも手が着けられない、不自由千萬なことになると云ふのである、猶ほ這箇の在る有り、たとへ三祖が何と言はうとも趙州が何ほど其れを拈提しやうとも要する所は這箇に在る、然るに這箇の何たるを忘れて他人の言句にばかり付き廻るから、斯のやうなことを氣に掛けて人に問ふてあるくのぞと此の僧を抑へた、已を以て人に方らぶること、莫れ已れが既に窠窟に陥つて居るに依て、老趙州をまでも疑ふといふは怪しからぬ奴ぞと叱る、州云く會て人あり我に問ふ、直に得たり五分疏不可まことにハヤ平氣な答でサスが質問の僧も呆氣にとられて二度と口が開けなかつたと見える、答話を通俗に言ひ換えて見れば、ハア其事かい先頃ソソなことを問ふた人があつたがナ、それから五年このかた未だ何とも返事が出来ないよ……といふ意味である、分疎といふは俗に申し譯といふことでソレが不下であるから申し譯が出来ないといふことである、これは唯五年十年のことでは無い、唯に趙州古佛一人の事では無い、無始劫來未來永劫言詮を以て申し開きのつくべきことでは無い、唯に趙州古佛一人のことは無い、三世の諸佛も歴代の祖師も口壁上に懸けて言語道斷心行處滅である、但これが若し徳山や臨濟または雲門のやうな人であつたならば、或は棒喝を行じ或は謂ゆる一句に三句を具すると云ふやうな鐵饅頭

を食はせるのであらうけれども、此の趙州老人はいつでも斯ういふアンバイに、猫撫聲で俗談平話のうち佛祖の頂顛を驚過することを言ふ、これが即ち此老特得の家風である、圓悟が面の赤きは語の直なるに知かず問ひ詰められた時に赤面して引込むよりは正直に白状した方が好いと擲論したやうに言ふて、趙州の本分を開示せられた所を證明したのである、胡孫毛蟲を喫す、之は猿が毛蟲を食つたやうであるといふ俗語で、呑むことも吐くことも出来ないといふ惡口を以て分疎不下を賛したのである、蚊子鐵牛を咬む、之も前と語は異つただけで、此の分疎不下の一句には誰も喙を容れることは出来ぬぞと稱賛したのである。

頌象王嘔呻 富貴中之富貴 **獅子哮吼** 作家中作家 **無味之**

談 相罵饒你接劣 **南北東西** 有麼有麼 **鳥飛兔走** 自古自今

黎道其麼 **南北東西** 天下 **鳥飛兔走** 一時活埋

象王嘔呻これは趙州老人の度量廣大なる姿を頌したのである、嘔呻は欠伸といふも同じやうなことで「あくび」をすることらしい、けれども、今は象王がブー〜と大鼻息を吹き出す意味と見える、彼の恐ろしい見あげるばかりの大象が太い足を踏み舒ばし、長い鼻を動かして大息を吹き出す様子、誠に能く趙州老人の平氣な面をしてシャ〜と、直に得たり五分分疎不下などと言ふて居る様子に似てると云ふのである、圓悟が富貴中の富貴であるとほめ、又誰人か悚然たらざらん此の象王の嘔呻には誰でも驚き怖れ

るであらうぞと言ひ、更に好箇の消息いかにも言ふに言はれぬ面白い話では無いかとの讚歎ぢや、獅子哮
吼す、之は同じく趙州老人の風采を稱揚しながらも、象王の如く度量廣大なばかりでなく、其の機鋒峻峻
の怖ろしさ加減を頌したのである、實に獅子は百獸の王であつて、三歳にして能く哮吼すと云ふ、其聲を
聞けば百獸皆畏服すると云ふ所から、如來の説法を獅子吼と言ひ、涅槃經には獅子吼品といふ一段があつ
て、其事を色々説かれてある、今趙州の孤危峻峭なるも亦たソレよと稱揚したのである、着語に作家中
の作家とほめ、又百百獸、腦裂すと言ふ、獅子の聲を聞けば如何なる猛獸でも皆其腦が破裂するほどに怖れ
ると云ふことである、好箇の入路、今此祖道に參學する者も、是非一度は頭腦裂破の場合に至らなければ
到底本統の修行は成就せぬのであるから、此の獅子哮吼を聞くのが誠に好い人門の要路であるぞと言ふ、
無味の談サテ其の象王の嘖呻の如く獅子の哮吼するに似たる趙州の一言一句は固より俗談平話であつて何
の趣味も無いやうであるが、其の無趣味の處に即ち絶待の妙味があるのである、着語に相罵しることは偏
に饒す猪を接げ、無味とでも無趣とでも何とでも罵しれと雪竇に抗するやうに言ふて實は大賛成の意を表
するのであるから、更に鐵櫃子に相似たり此の無味の妙味を味はひ得る者は無からうと言ひ、又什麼の咬
嚼の處があらん能く咬みしめると味が出るといふ俗諺もあるが、これは元來咬むことが出来ない分疎下不
五年強、一葉舟中載大唐、渺々兀然波浪起、誰知別有好思量、之は白雲守端禪師が此の本則を頌した偈で
あるから圓悟の着語では無い、それをコ、へ書き入れたのは後人の備忘でも有つたらうと思ふ、之を講
釋して居ては長くなるからお預りとして置き、人口を塞斷すサテ其の無味の談が其儘に鐵櫃子であるに依

て、如何なる作家の衲僧も之に喙を容れることは出来ぬ、着語に相唾することは、偏に饒す水を潑げ、これ
は前の相罵の着語と對句で、唾を吐きかけるなら幾らでも吐きかけろ足らずば水でも潑げと例の如く雪竇
を抑へるやうに言ふての大讚歎である、啖これも前に何處かにあつたが、フ、ンと冷笑つた姿で即ち圓悟
が此の句に對しての機鋒である、關黎甚麼とか道ふ既に人口を塞斷したならば、雪竇お前も何とも言へぬ
はずであるが、何を言ふて居るぞと云ふ、南北東西これは空間的に無難の至道は無限であることを言ふ、着
語に有りや有りやナニ東西だの南北だのと云ふ方向があるのかと咎めた天上天下イヤ天上も天下もあるぞ
と言ふ、蒼天蒼天イヤ何うも限りなく廣大なことよと長空を仰ぎ見る姿、鳥飛び兎走るこれは時間的に無
難の至道は無限であることを言ふ、着語に古へより今に謂ゆる久遠劫來未來永劫に無始無終である一時に
活埋せん趙州も雪竇も餘りに至道の安賣りをする、二人とも活きながら埋め殺してしまへと、例の勳絶で
ある。

第五十九則 趙州唯嫌揀擇

垂示 該天括地越聖超凡百草頭上指出涅槃妙心干戈
叢裏點定衲僧命脉且道承箇什麼人恩力使得恁麼試
舉看

天を該ね地を括り聖を越え凡を超ゆ、これは至道の本體が無限の空間に充塞し無限の時間を通貫して、前則の頌に雪竇が東西南北鳥飛び兎走ると言はれたやうな姿であることを、語を換えて天を該ね地を括ると言ふた、此の至道の本體は佛に在つても増さず衆生に在つても減らず、一切平等一相であるに依つて至道の上には聖者だの凡夫だのと云ふ名さへ無い、さて其の至道の妙用を實地に運轉し得る本分の衲僧であつたならば、百草頭上に涅槃妙心を指出し干戈叢裡に衲僧の命脈を點定す、百草と云へば野や山にモサくと生繁つて居て馬や牛の飼秣より外に何の用にも立たない誠につまらぬものと思ひ、又涅槃妙心と聞けば佛祖の親しく面授相承したまへる尊きものゝやうに思ふのが即ち凡夫の妄見である、然るに今至道の妙用を自由に働かせる上に於ては、其の何の價値も無いと思ふて居る百草が直に是れ涅槃妙心であることを自由の開示して、モサ／＼した馬糞から大光明を放たせて見せる、又干戈と云へば戦争の時に人を殺す兇器であると思ひ、命脈と聞けば泰平無事の間にはかり保てるものと思ふのが凡夫の妄見である、然るに今至道の妙用を自由に働かせる上に於ては、其の人を殺す兇器を以て直に衲僧の命脈を點定して、息災延命の境に安住せしむる活機用がある、點定といふは何事にも其れを確かに是れと推し定めることである、且く道へ箇の什麼人の恩力を承けて便ち無難なることを得たる、サテさういふ具合に自由の働かけると云ふは、一體それは誰のお蔭であるぞ、其の事は本則の公案に參じて見れば解らうぞといふので、試みに舉す看よと言ふ。

本則 學僧問趙州至道無難唯嫌揀擇再運前來○道計 纔有語言是揀擇含霜口和尚如何爲人漢抄道老 州云何不引盡這語是 這至道無難唯嫌揀擇畢竟山道老漢○被也 州云只

雪竇が趙州の至道無難を拈提するのは、これで四回である、僧あり趙州に問ふ至道無難唯嫌揀擇、纔かに語言あれば是れ揀擇、和尚如何してか人の爲めにせん、これは前にも屢々申した通り、趙州老人は動もすれば三祖大師の至道無難唯嫌揀擇と云ふ語を拈提し更に語言あれば、是れ揀擇と言ふて學人に示されたに因り、學人の中の稍や氣力ある者が、代り代りに色々な疑問を呈出して、或は老人の脚下を勘檢しやうと思ふ野心の者もあれば、又は眞面目に疑問の解決を求める者もあつたと見える、今此の僧の如きも一大難問を提出して、老人を閉口させやうと思ふ野心があつたらしい、そこで其の間端が中々面白い、あなたは毎常に至道は難きこと無し唯嫌揀擇を嫌ふと仰せられ、且つ少しでも何とか言へばハヤそれが孰れかに揀擇したことになるぞと仰せられるが、然し何とも言はず人の爲めに法を説くことも出来まいが、あなたは何うなさるお考へでありますぞと突込んだ、着語に再運前來しば／＼同じことを言ふなと抑へ、什麼と道ふぞ無難だの揀擇だのと言ふ必要は無いと拂ひ、三重の公案つゞいて三回に及ぶは餘りに五月蠅と罵る

又満口に霜を含む、纔に語言あれば是れ揀擇であるから、何とも物は言へぬはず、此僧の言ふ所尤も千萬である。と抑捺し、更に這の老漢を撈着す能く趙州を問ひ詰めたぞと冷かし固。これは前にもあつたが、日本俗に何なりとも始めて其れと氣が附いて驚いたやうな時にハツと言ふたやうなアンパイの聲であるさうな、州云く何ぞ這の語を引き盡さざる貴公は只揀擇を嫌ふと云ふだけ言ふて居るが、三祖大師の言はれたのは至道無難唯嫌揀擇の次に但憎愛なければ洞然として明白と云ふ語があり、又老僧がソレを貴公たちに拈提して聞かせるにも、纔に語言あれば是れ揀擇、是れ明白、老僧は明白裏に在らず是れ汝等還つて護惜すべきや、はた無しやとまで言ふて置いたに其れを貴公は揀擇だけを將てきて彼れ此れ言ふて居るのでは無いか、ナゼ老僧が言ふ通りの全文を皆擧げてきて問はないぞと言ふたのである、着語に賊は是れ小人智は君子に過ぐ、趙州は實に老賊である、此僧の懷中物をスツカリ取りあげてしまふたぞ、一體に賊といふものは小人のはずであるに、其智慧は中々君子も及ばぬぞとの讃歎である、白拈賊イヤ賊も賊、夜中の窃盜ではなくて眞晝間の大賊ぞ、賊馬に騎て賊を趁ふ此僧元來趙州の懷中をねらふて來た賊であるに、其の騎てきた馬すなはち是れ揀擇云々の語を以て、直に此僧の口を塞いでしまふた、けれども此僧も亦サル者で僧云く某甲只念すること這裡に到る、イヤ拙僧は後の處までは氣がつかまへないので、先づ氣のついた所は此處までありますと言ふ、其のやうなことで何うして此の七百甲子の老趙州を勘破することが出來やうぞ、着語に兩箇泥團を弄する漢、どれもこれも子供戯れのやうであるぞと罵しる、しかし僧の財産は悉く趙州に奪はれてしまふたと云ふので箇の賊に逢着すと言ひ、塚根敵手し難し塚根といふは進まざ

る貌とあつて、自由に歩けない姿、州云く只這の至道無難唯嫌揀擇、サウか後に用が無いと言ふか其れが本統ならば其れで好い、只此の至道無難唯嫌揀擇だけのことよ、其外に彼れの此れのと妄想分別するには及ばぬ、只この二句に向つて實參實究するが好いと教誡せられた、着語に畢竟這の老漢に由る、かやうな爲人の作略は趙州老人に限ると贊し、他に眼睛を換却せらる此僧もこれで眼が覺めたか、捉敗了到頭趙州老人に捕虜にされてしまふたぞと笑ふ。

頌 水灑不着 風吹不入 虎步龍行

○他家得自在 鬼號神泣 大衆掩耳 草偃風行 頭長三尺 知是誰方 聖者見何
○不レ奴奇特 黎莫是與他同 參頭長三尺 知是誰方 聖者見何

水灑けども着かず、趙州の答話の如何にも出格なる姿を、彼の蓮の葉に泥水が飛びかゝつても、直にハラリと撥きのけるやうなアンパイであると言ふ、着語に什麼をか説く雪竇のソウ言はれるはソレは何で御座るか、太深遠生イヤ大層に深遠なことで解りかねる、什麼の共に語る處かあらん何も其のやうにむづかしく相談するほどの事でもあるまいにと、すべて趙州の機鋒に寄せて無難の至道を拈弄するのである、風吹けども入らずこれは趙州爲人の作略に風の透る隙間も無いと云ふことである、而し其實はヤハリ至道の法界徧滿を頌するのである、故に着語にも虚空の如く相似たりと言ひ、又硬剝々地と言ふ、唯虚空の如く無

礙であるばかりでなく又鐵石の如くに堅い、何とも形容のしやうが無い有様、空に望んで啓告す何とも手が着かんに依て嗚呼蒼天と天を仰いで悲しむの外は無いと讚歎の極である、偕又此の趙州老人の風采と云へば虎の歩み龍の行くが如くで風を起して走り雲を蹴て躍る其の威勢凛々として近寄ることの出来ないう有様、着語に他家自在を得と褒め、妨げず奇特なりと讚歎した、他家といふは即ち趙州をさす、此に至りて彼の僧が閉口して退ぞいたばかりでは無い、鬼も號び神も泣くイヤ鬼神ばかりでは無い、三世の諸佛も歴代の祖師も悉く倒退三千里の外は無い、それは其のほすである、無難の至道より尊いものも無ければ、強いものも無いからである、着語に大衆耳を掩へ鬼神に泣き號ばれては大變であらうぞ、一同に耳を塞いで聞かないやうにしろと座下への提撕、草偃し風行く鬼神ばかりでは無い、草も偃すぞと算し、闍黎是れ他と同參なることなし、ヤソウ言はれる雪竇お前もヤハリ鬼神と諸共に泣き號ぶのでは無いかと揶揄す、頭長きこと三尺知んぬ是れ誰ぞコレは趙州老人の寫眞の説明、イヤ至道無難如來のお姿である、昔し或る大徳の禪師が人の佛を問ふに答へて、頭長きこと三尺頸短きこと二寸と言ふたことがある、それを雪竇が引いてきて其のやうな妖怪は何であるぞと言ふた、これは三十二相八十隨好形を頭長三尺の一相に販して、其の一相の更に無相なることを示し、到底無難の至道を形容や議論で、見ることも考へることも出来るもので無いことを明かされたのである、着語に怪底の物妙な化物であるぞと言ひ何の方の聖者ぞ西方の彌陀如來も東方の藥師如來も其のやうなお姿とは承はらぬが、其れは何處の何佛であるかと言ふ、これは無方の無相如來と云ふ佛である、近う寄つて拜禮をとげられましやうと云ふので見るや見るやと言ふ、

さて此の無方無相如來は如何なる法を如何なる體裁で説かれるかと云ふに、相對して言なく獨足にして立つ此の如來は晝は日ねもす夜は夜もすがら、一切衆生と相對するぐらゐのことでは無い、其實は朝々佛を抱いて起き夜々佛を抱いて眠るで、つかの間も離るゝと云ふことは無いのであるが、終に一言の迷とも悟とも法の説くべきは無い、儒者さへが天何をか言ふや四時おこなはれ萬物育すと云ふて居る、無相佛の無言に何の不審もあるべきでは無い、而も一本足で立つて居る、他の力を假らず、勿論杖などつかないで自由自在である、雪竇は之を知んぬ是れ誰ぞと言ひ、圓悟は山僧も亦た識らずと言ふ、吾人お互ひに何とか雪竇に向つて答へねばならぬのである、圓悟も更に諸人須らく子細に眼を着けて看るべしと言はれてある、着語に咄と化物を叱り、頸を縮めて去れりソレ見ろ圓悟の一咄で化物が逃げたぞ、一着を放過す其實は一棒に打ち殺すのであつたが放してやつた、イヤ彼れは山僧であらう獨足にして立つと云ふやうな山鬼を放過せば即ち不可ゆるして置いては後の害になる、便ち打つと其跡を拂つてしまつた、これ等の着語はみな悉く吾人をして言句につきまはらしめぬやうにとの、圓悟禪師の大慈悲懇歎の所を感謝せねばならぬのである。

第六十則 雲門挂杖子

垂示 諸佛衆生本來無異。山河自己寧有等差。爲什麼却

渾成兩邊去也。若能撥轉話頭。坐斷要津。放過即不可。若不
放過盡大地不消一捏。且作麼生是撥轉話頭處。試舉
看。

諸佛と衆生と本來異なること無く山河と自己と寧ろ等差あらんやとは、本體平等無差別の境、すなはち本分の上から、直に法性眞如の當體を示された、畢竟同じことを二句にわけて文を巧みにしたまでのことであるけれども、強いて分けて言ふて見れば、諸佛衆生と云ふた方は、精神の上から迷だの悟だのと云ふ差別の無いことを明かしたので聞覺經には「始めて知る衆生本來成佛生死涅槃猶ほ昨夢の如し」と説かれてある、又山河自己と云ふた方は、形體の上から動物だの植物だのと云ふ差別の無いことを明かしたので、吾人類の四大、すなはち地水火風も、山河艸木の四大も本より同一のもので、且らく因縁果報の結合如何に依て、假りに形を異にして居るまでのことであると云ふのは、佛教普通の常談で、何も別段に珍らしい話では無い、但その平等一相なるものが什麼としてか却て渾べて兩邊となり去るや現に艸木と吾々人類との如きは、目前の事實に於て吾々人類の日々の食料を山河艸木に取て生活して居るでは無いか、吾々の此身が二三歳までは母の乳で育てられたのであるから、母の血肉と吾が血肉と全く同一であるに相違ない、それ故に母と吾と他人でないと云ふなら吾々が母の乳房を離れてから以來、米や豆や大根や午房、乃至魚

鳥や牛豚の肉で此の身體を作つて居るとして見れば、彼の艸木や畜類と吾々との關係は全たく母と吾との關係に少しも異なつては居らぬのである、況んや釋迦と云ふも彌陀と云ふも、皆唯吾々と何の異りも無き人類である、然るに其れと根本から異なつた物のやうに思ひ、甚しきは何のやうにしても凡夫が佛には成れない者のやうに思ふものもあると云ふは、一體どうしたわけであらうぞ、要する所は一念の轉處に於て千里萬里の隔たりとなるのである、然らば更に其の一念心上に向つて、若し能く話頭を撥轉し要津を坐斷すると云ふことが、先づ第一肝要のことである、話頭を撥轉すると云ふは、前に言ふた平等一相の本體がナゼ兩邊になつたかと云ふ話、それを撥轉と排ひのけて一點の疑ひも無くなつた姿、要津を坐斷すと云ふは前にもあつたが、迷の此岸から悟の彼岸へ渡る渡し場を打ち破りて、此岸の衆生だの彼岸の佛だのと云ふ兩邊を見ないやうになることである、ソウさへなれば自己も山河も此儘に法性眞如の當體で、別に求むべきの法もなければ又厭ふべきの法も無い、さりながらソレも纔かに放過すれば即ち不可である、放過といふは、其事を打ち棄て、緩み怠ることである、たとへ一旦如何ほどの悟が開けたにもせよ、悟後の修行が十分に相續しないでは決して實地に自由を得ることは出来ない、然るに若し放過せず、既に晝夜不斷願沛にも、不退の三昧に住することが出来れば盡大地一捏をも消せず宇宙と吾と一體一致して居るのであるから、如何に、天地が廣大であつても一捏にも足らないぞと、言ふ、且く作麼生か是れ話頭を撥轉する處、從前その例も多くあるが、今は別して雲門拄杖子の話を試みに擧す看よと垂示せられた。

本則 舉雲門以拄杖示衆云 點化在臨時○換却你眼睛了也 拄杖子化爲龍何川周○ 吞却乾坤了也天下下納僧性命不存○還得着明 山河大地用化作什麼 甚處得來十方無壁落四非亦無門○東西南北四維上下○爭奈這箇何

雲門の文偃大師、ある時拄杖を拈起して以て座下の大衆に示して云く、着語に點化は時に臨むに在り、點化と云ふは龍門に於て魚が龍に化することを云ふので、それが時に臨むと云ふは、此の拄杖が龍に化するやら蛇に化するやら、それは臨機應變で何うなるか分らぬと云ふのである、殺人刀活人劍又此の拄杖が人を殺す刀となるやら人を活かす劍となるやら、其れも雲門の自由である、偏が眼睛を換却し了れりモウ此の拄杖を拈起して見せたばかりで、未だ何とも一言も發せぬうちに、諸人の眼はスツカリ味まされて居るぞと言ふ、拄杖子化して龍となり之れは敢て龍にならないでも拄杖子その儘で好いのであるが、且らく諸人の人情に隨つて化して龍となると言ふたのもハヤ落帥の手段である、故に闍黎は何ぞ周遮を用ひんと言ふ、周遮といふは色々と手数をかけて廻り遠いことである、化するを用ひて什麼か作さん化してしまふては拄杖の用はなさんぞ、衆生は衆生で好い、佛とか云ふものに成る必要は無いと云ふ意味である、乾坤を吞却し了れりこれで十方法界唯一條の拄杖子となり了つた、これは何も拄杖に限つたことでは無い、如意でも拂子でも喝でも咄でも、天龍や俱胝は一指頭を以て乾坤を吞却せしめたのである、着語に天下の納僧

性命存せず既に吞却せられたのであるから、拄杖子の性命の外に納僧の性命といふものゝ存在すべきはずは無い、還て咽喉を碍着すや乾坤などを吞却して喉に支へはせぬかと弄し、闍黎什麼の處に向て安身立命せん、雲門自分の安身立命の地は何うなさるかと擲論するやうに言ふて、吾々參學の者に研究の要路を示すのである、山河大地其の處より得來る、サア此の通り拄杖の龍に乾坤を吞却されてしまふた時に、山河大地だのと云ふものが何處に在るぞ、乃至佛だの衆生だの地獄だの極樂だのと云ふものが何處に在るぞ、着語に十方壁落なく四面亦た門なし其れで無限の空間あけはなしになつた、東西南北四維上下いくら吞却しても、やはり東は東で西は西よ、四維といふは東南の間と南西の間と西北の間と北東の間との四つである、即ち四方と四維と上下とで十方、これが我が佛教中に於て空間の無限なることを言ひ詮はす術語になつて居る、サテすべて吞却したとて、這箇を奈何せん、這箇とは何である、今は拄杖子と名けられである、拄杖子は拄杖子を吞却するであらうか有るまいか、こゝが參究の要點ぞと言ふ。

頌 拄杖子吞乾坤 徒說桃花浪奔擲開向上一竅千聖齊立二下 燒尾者不在拏雲攫霧左之右之老僧只管看 曝腮者說得千遍萬遍不如手腳羅籠一偏 何必衷膽亡魂人人氣字如王○自是備 拈了也謝慈悲心切 聞不聞草○用 直須灑灑落落大地甚處得來 休更紛紛紜紜到備頭上○打云放

過則不可七十一棒且、輕、恕山僧不會行此令一百五十難放君正令當行豈可
只懸打了八百堪作什麼師驀拈拄杖下座大衆一時走散雪寶龍頭
千暮打了八百堪作什麼師驀拈拄杖下座大衆一時走散尾作什麼

拄杖子乾坤を呑むと先づ本則の全體を擧げ、殊に直に拄杖子と云ふて龍と化したとは言はぬ、圓悟は什麼と道ふぞと耳立てた、只用て狗を打たん、乾坤を呑むなど、奇怪なことを言はずとも其の拄杖で狗でも打つが好いぞと抑へる、徒らに説く桃花の浪に奔ると、これは支那の禹門といふ處に三級の浪と云ふて、例へば日光中禪寺の湖水が、華嚴の瀧となつて落ちるやうな處があつて、其水が三段になつて落ちる、毎年三月其浪に桃の花が散り落ちて漲ぎるころ、魚が其の水に廻りて三段の浪を超えることが出来れば、化して龍となりて天に昇る、そこで之を登龍門といふのである、然るに今此の拄杖子が乾坤を呑むといふ話に就いても、それは拄杖子が桃花の浪に奔りて龍門に登り、龍と化した上でなければ働けないやうに言ふものが多いが、何も其用な面倒な世話は無、拄杖は拄杖で何の不足でもないと言ふのが雪竇の意で、即ち一切衆生其の儘に本來成佛で、何の不足もない、何も事新らしく修行して悟りを開いてから初めて成佛するのでは無いぞと云ふ本分の上の景況を示されたのである、着語に向上の一竅を撥開すれば千聖も齊しく下風に立つ、桃花の浪に奔るやうなことでは無く、本分の上から斯うもつてこれらでは三世の諸佛も平身低頭するより外は無、雲を拏らひ霧を攫むの處に在らず、桃花の浪に奔りて點化した龍は、拏雲攫霧の技倆を逞しくするであらうけれども、本分の拄杖子は其やうな小細工はしないと云ふ、説き得て千徧萬徧

するも手脚羅籠、徧するには如かず、桃花の浪に奔ると云ふやうなことを徒らに千萬繰りかへして説いて居ても直に一度乾坤を呑却するには及ぶまい、尾を焼く者は拏雲攫霧に在らず、これは彼の魚が禹門三級の浪を超えて龍となる時には、必ず天火があつて、其魚の尾を焼くと云ふことであるが、其のやうなことをして龍になつても、其れは未だ拏雲攫霧の眞龍では無い、眞の天龍は浪を超えたり尾を焼いたりする必要は無い、本源自性天真佛で、妄想も除かず眞をも求めず、其儘で何の面倒もないと言ふ、着語に左之右之老僧只管に看る、われ圓悟も常に其通りに見て居るぞと賛成した、也た是れ一箇の乾柴片、尾を焼くと云へば枯柴のやうであるぞと抑へる、要する所は皆坐禪觀法の力を假りて成佛得道するのであると思ふやうな、鄙劣な根性を打破しやうとの婆心片々である、腮を曝す者も何ぞ必ずしも膽を喪し魂を亡せん、さて尾を焼いて龍になつても、それが眞龍でないとして見れば、三級の浪を超え得ないで後へ戻り、龍門の下の死水沙磧の中に其腮を曝して居る魚のやうな鈍根の衆生でも、本來成佛であると悟れた上には、智愚賢不肖の差別は無い、一味平等の無等々であるに依て何も膽を喪し魂を亡じて歎き悲しむには及ばないぞと言ふ、着語に人々氣宇王の如し、それでこそ箇々各自に獨立獨尊である、自らはれ徧千里萬里、然るに己れと己れを自から卑みて二乘外道の見に沈むは憐れむべきである、さりながら獨立自尊の氣象を失ふて居る者が、遽に斯やうな本分の話を聞けば、大概は驚き怖れて信じ得ない姿を爭、奈せん、悚然たるをと言ふた、雪竇は諱つて此に至り、一轉して拈了也モウこれでおしまいぞと言つて、從上の葛藤を一言に打ち拂ふてしまふた、着語に慈悲を謝すと言ひ老婆心切と言ひ、これでヤツと助かります、今までのやうに色々なことを並

べられては參學も研究も出來たものでは無い、聞くや開かずや、これで拈じ了つたのであるが、諸人は能く解つたか解らないかと念を推した、着語に免かれず落草なることを、ソナなことを言ふては何うも本筋路では無いぞと抑へ、聞くを用ひて什麼をか作さん、聞くや聞かずやと言はれるけれども、聞いて何の役に立つぞと何處までも圓悟は本分の大道を行く、直に須らく灑々落々たるべし、胸中に一點の滯ふりなきこと萬里の青天に一片の雲もないやうになれと言ふ、着語に其のやうなことは殘羹餽飯で、乞食でも無ければ食はないぞ、今さら珍しくも無いと罵る、しかし此の何の珍しくも無い所が、即ち乾坤大地甚の處にか得來ると云ふべき十方廓落の境界ぞ、更に紛々紜々たることを休めよ、迷ひだの悟りだの修行だの證果だの、其他すべての雜想雜念に使はれないやうにしると言ふ、着語に令を擧する者先づ犯す、雪竇お前が其のやうなことを心配するのが、其れが即ち紛々紜々であらうぞと咎める、相次に彌が頭上に到る、相次は造次と云ふも同じことで、朝な夕な之都べての事が紛々紜々を免かれまいぞと警醒し、打て云く放過せば不可なり、少しでも油斷してはならぬぞと注意する、七十二棒且く輕恕す、若しも灑々落々たることが出來ないで、紛々紜々たるやうであつたならば、軽く恕しても七十二棒の罰を與へるぞとの嚴令である、圓悟は山僧は會て、此令を行ぜず、七十二棒で輕恕するなどと云ふ手緩いことは圓悟は嫌ひであるぞ、令に據て行はん、息の根の止まるまで打つてく打ちすゑてやらうぞと云ふ、頼ひに山僧を得るに遭ふ、此の圓悟が居て正令を行するから好いやうなもの、雪竇だけに任せて置いたら大罪人を取り遁がすであらうに、一百五十君を放し難し、到頭雪竇も圓悟に譲らず本式になつてきた、着語に正令當行ならば豈

恁麼に了るべけんや、圓悟は一百五十でもまだ本統では無いと云ふ、直徳朝打三千幕打八百するも什麼を作すにか堪えん、時々刻々に警醒して三昧正受到安住するやうにならねばならぬぞと云ふのである、師霧に拄杖を拈じて下座す、大衆一時に走り散す、雪竇は拄杖を拈起して、何とも言はずに直に下座してしまふた、此際已に乾坤を吞却し了つたのである、大衆は之を見て皆走り遁げてしまふたとある、圓悟は雪竇龍頭蛇尾にして什麼をか作さんと着語した、拄杖を拈起した所は龍頭であるが、打ちもせず下座したは蛇尾であると云ふ意が、例の抑へたやうに云ふて其の作略の異常出格なることを讚歎したのである。

第六十一則 風穴若立一塵

垂示 建法幢立宗旨。還他本分宗師定龍蛇別緇素。須是作家知識。劔刃上論殺活。棒頭上別機宜。則且置。且道。獨據寰中事。一句作麼。生商量。試舉看。

法幢を建てることとは、前にもあつたが、凡そ人の師となつて法を説く者は、幢旛を其の門庭に建てて今日の學校や會堂などに、其の學校や會堂の徽章を旗はした旗を建てるやうなものである、宗旨を立すと云ふは、同じ佛法の上に於ても其の師家の作略に依つて、或は念佛と勸めるもあれば、或は題目を勸

めるもあるやうなもので、同じ達磨門下に於ても、臨濟大師の四料簡とか、洞山大師の五位とか云ふやうな、亦たそれ／＼の主義を定め家風を興すことである、宗の字は本は家系の上に於ての本家といふ字であるが、今日では漠然と一般に宗教とか宗門とか宗乘とか云ふて、孰れの門下にも使ふやうになり、耶蘇教にまで應用されて居るけれども、昔は宗と教とに差別があつて、宗と云へば禪家のことに限り、教といふは禪家以外の天台とか華嚴とか法相とか三論とか云ふ類のことを、單に教家と稱したものである、其の典據は楞伽經に本づいて、六祖大師の壇經などに、禪家のことを宗とばかり云ひ、教家のことを説と稱し、宗も通じ説も通ずると云ふやうな語が、永嘉大師の證道歌などにも見えるのであるから、たしかに唐朝の頃から其の差別があつたやうに思はれる、旨の字は食物の味の好い俗に謂ゆるウマイとかオイシイとかいふ意味の字で、宗と旨との二字あはせて、一番の本源根元であつて此上も無き妙味のある所と云ふことになる、偕て其の法幡を建て、宗旨を立し、人の師となつて法を説くことは、他の本分の宗師に還へず、其れは到底凡庸なる者の企て及ぶべきことでは無いに依て、本分すなはち三世諸佛の頂額をも踏みこえて、自から十方法界の主宰となるほどの大宗師の職分であるから、其人にお還し致す、偕又其の大宗師たるべき人が、多くの參學の徒を接し得て、龍蛇を定め縮素を別つ、此の者は九天に翱翔して雲を起し風に乗るの眞龍である、彼れは茫茫たる草の中にニヨロ／＼と匍匐まはつてゐるに過ぎざる蛇でしか無いと云ふ事を明かに鑑定して、印可證明すべきことは之を印可證明し、三十棒を喫せしめて息の根を止めてしまふべきは決して之を放過しては置かないと云ふやうに決斷する、又縮素といふは黑白と云ふも同じこと

であるから、言葉が異つただけで前と同じ意味、すなはち學人の機根と其の修行の分齊とを能く判決することである、それ等のことは須らく是れ作家の知識なるべし、これも前の他の本分の宗師に還へすと云ふたのと、言葉を換えたまでのことで意味に違ひは無い、劍刃上に殺活を論じ棒頭上に機宜を別つ、前の龍蛇を定め縮素を分つと云ふのは、師家たる人が學徒の機根を鑑定する方であり、此の殺活を論じ機宜を別つと云ふのは、其の機根次第に之を接化する作略を言ふのであるから、けれどもそれ等の事は、譬へば元帥や將軍が、四隣の敵を征服して武威を振ふやうなものであるから、今は則ち且く置く、と取り除いて置いて、更に日く道へ獨り竇中に據るの事、一句作麼生か商量せん、竇中といふは機内といふも同じことで、天子の宮城の在る處のことである、しかも天子が其の竇中に獨り據ると云ふのであるから、大臣や將軍に心配させたり戦争させたりするやうな厄介もなく、九重の雲深き處に御簾たれこめて手を拱して天下治まると云ふ、神聖幽玄なる境界に就ての一句、それは何と相談したものであらうぞと言ふて、試みに擧す看よと本則を喚び出した。

本則 擧風穴垂語云 興盛致雨也 若立一塵 我爲法王於法自在 家國

興盛 不立一塵 家國喪亡 作一切處光明 全是他家國

事 雪竇拈拄杖云 還 有 同 生 同 死 納 僧 麼 來 我 話 頭

如^レ是^レ要^レ平^ニ不^レ平^之事^〇須^下於^二雪^寶商^量始^得〇還^知麼^〇
 〇若^知許^備自^由自^在〇若^不知^朝打^三千^暮打^八百

風穴といふは汝州風穴の延沼禪師と申し、臨濟大師の孫で南嶽下の第七世、すなはち達磨十三代の法孫である、或る時その門下の衆僧に垂語して示された、此の垂語の全文はモット長いので、委くは禪林類聚に出ている、それを今は雪寶禪師が抄録して語を着け且つ頌を附せられたのである、圓悟の着語に雲を興し雨を致す此の垂示は餘程天下の潤ひになるぞとほめた、也た主となり賓とならんことを要す是の如き垂示は誰が賓客といふことは無いに依つて、自分主ともなれば賓ともなるぞ、若し一塵を立すれば家國興盛す、平等一相の本體の上には、空々寂々として一物も見ざるべきものは無い、然るに若し一塵、すなはち毫釐ほども動き出せば、直に千差萬別の現相歴然として羅列し、山もあれば川もあり花もあれば紅葉もあり、地獄もあれば極樂もあり衆生もあれば佛陀もあり、苦もあれば樂もあり迷ひもあれば悟りもある、譬へば此に一つの國家があつて、王侯相將百官羅列して、政治だの法律だの經濟だの教育だのと云ふて、文明開化の隆盛を見るやうなものであると云ふ、これは全く宇宙萬物の現相其の儘の姿である、圓悟が我は法王たり法に於て自在と言ふ、一往は風穴禪師の此の垂語に一塵を立しやうとも立せざらうとも、家國を興さうとも止ばさうとも自由自在の力があると云ふのであるけれども、其實は風穴に限つたことは無い、吾吾お互ひが誰でも一念の轉じやう如何に依つて、地獄極樂を建立することも出来れば、娑婆も淨土も一時に掃蕩してしまふことも出来るのである、又花簇々錦簇々とある、これは天地萬物森々として羅列し、皆

ことごとくソレソレの光明を放ち、各自の本分を盡して居る姿である、然るに又是れ他の屋裡の事に非ずと奪ふた、他といふは風穴をさすので、風穴は臨濟の嫡嗣たる南院の弟子であるが、臨濟の家風は此の一塵を立して家國を興盛せしむると云ふ主義では無い、都べて此の反對の方で、次の垂語に言はれた方の側であること云ふのである、即ち次の垂語に一塵を立せざれば家國喪亡すと、これは全たく前とは反對で、平等一相の本體の上から、苦もなければ樂も無い、迷ひもなければ悟りもない、佛もなければ衆生もない、地獄も極樂も十方も三世も、皆ことごとく見とめない境界、譬へば家も國も喪亡して、王もなければ民もない、治もなければ亂もないやうなものであると云ふのである、着語に蹤を掃ひ跡を滅すとある、都べて何事にも痕迹の見えるやうなことでは本統のものでは無い、俗に味噌の味噌臭きは上味噌に非ずと云ふて居る、忠孝の忠孝臭き、仁義の仁義臭き、皆本統のものでは無い、次に着語に眼睛を失却すとある、眼さへ開かなければ都べての色は皆喪亡してしまふ、唯に眼睛ばかりでは無い、鼻孔に和して失す鼻も亦一時に無くなつた、そこで一切處光明で盡十方法界たゞ一道の大光明となつて、花は花のまゝ紅葉は紅葉のまゝに無礙の光明たらざるものは無い、家國を用ひて什麼にかせん此の着語は今さら言ふには及ばないやうである、全く是れ他家屋裡の事これでこそ臨濟門下の風穴らしいぞと云ふ、さて風穴禪師が斯う二様に垂語せられた、即ち一塵を立すると立せざるとの二様、家國が興盛すると喪亡するとの二様であるが、どちらが好いとも悪いとも言はない、凡俗の人情から見たならば、興盛と聞けば愛たいやうに思ひ喪亡と云へば悲しいやうにも思ふであらうが、今は其のやうな度合の話では無い、こゝで即ち垂示に謂ゆる獨り賓中に據るの

一句を、何とか道はねばならぬ所であるが、風穴の門下には此時に進み出て一言の領解を呈した者もなかつたと見えて、後世の雪竇が拄杖を拈じて云く「サア此の拄杖を拈じた所、即ち十方法界たゞ此の一條の拄杖となつた、これは一塵を立したと云ふもので有らうか、將た一塵を立せずと云ふもので有らうか、圓悟は須く是れ壁立千仞にして始て得べし何とも手の着けやうも足の踏み處もないぞと言ふ、達磨來也碧眼の胡僧が出て來たやうぞと擲擄する、還て同生死の衲僧ありや何うちや諸人この拄杖子と同生死の契りを結んで居る者が居るかと擗問せられた、其の實は誰も彼も皆ことごとく此の拄杖と同生死のはずであるけれども、はずであると云ふ理想だけになつて居て、其の同生死底の活用が實地に現成せぬに依て、斯くの如く雪竇にたしなめられても一言の返す言葉もない仕末である、圓悟は我に話頭を還へし來いと言ふ、拄杖子と同生死のものを求めて何にするぞ、其やうな不用の話頭は我に還せと奪ふたのである、然も是の如くなりと雖も不平の事を平げんを要す、これは前の着語を承けて拄杖と同生死の者を求めるには及ばぬけれども、立の不立の興盛の喪亡のと兩端に涉つたやうなことを言ふて人に疑惑させるのであるから、其れを拄杖で打ち拂つて不平の事を平げるのも好からうと言ふ、又須く雪竇に於て商量して始て得べしと言ひ、還て知るやと言ひ若し知らば偏に許す自由自在なることと言ひ、若し知らずんば朝打三千暮打八百と言ふ、いづれも皆蛇足のやうで、圓悟の着語とは思はれない、況や古寫本には無いさうであるから、削つた方が好からう。

頌 野老從教不展眉美三千里外有箇人且圖家國立雄基太平一
要行即行要住即住 大地是箇解脫門偈作麼生立 謀臣猛將今何在有麼有麼 清風只自知旁若無人 萬里地也 是雲居羅漢

此の頌は一塵を立せず家國喪亡すと云ふ掃蕩門の方は捨て、置いて、一塵を立すれば家國興盛すと云ふ建立門の方を取つて誦はれたのである、萬事を掃蕩して平等の眞際を彰はすことは、固より衲僧の本分ではあるけれども、それだけでは衆生濟度が出來ない、淨土眞宗に於てさへ往相すなはち極樂往生ばかりでは無く、必ず還相と娑婆へ還りて濁世を救ふことを大切にす、況や祖師門下、却來退歩して庵に入り細に入り、被毛截角を以て一段の風流とする宗風に於ては勿論のことである、そこで野老は從教あれ眉を展べざるを、これは家國興盛で王侯相將の威權さかんに法律制度の規定などが嚴重であつたならば、天然自然の安穩無事ばかり楽しんで居る所の鼓腹擊壤の野老等は、面倒なことである厄介なことであると云ふて眉を擧めて爵陶しがるであらうけれども、そんなことは儘よ厭がる者には厭がらせて置いて、且く圖る家國に雄基を立ることを、一般多數の人民のために安全の策を講ずるには、是非ともに家國に英雄の基業を立て、其の政治法律の恩恵に依らせるやうに、己むを得ず第二義門に下りて衆生濟度の方便をめぐらさなければならぬのである、着語に三千里外に箇の人あり此れは遠方に知音があると云ふ意味の語で、即ち雪

寶和尚は風穴禪師の好い知音であると云ふのである、しかし美食も他人の喫に中らず、寶が斯やうに御馳走を持ち出されても、滿腹して居る圓悟などは食ふ氣にならぬぞと云ふ、太平の一曲大家知る、家國に雄基を立てると云ふことは實に太平の一曲であるから、誰でも之を喜ばない者はなからう、行かんとせば即ち行き住らんとせば即ち作る、雪寶は法を取扱ふ上に於て自由自在なものであるとほめ、又盡乾坤大地是れ箇の解脫門作麼生か立せん、元來解脫ならざる處は無いに、今さら雄基を立てるとは餘計なことぞと抑へる、謀臣猛將今何くにか在る雪寶が先きに拄杖を拈じて還て同生同死の衲僧ありやと言ふたのを、今は家國の雄基を立てるに就て天子の補佐となり、内に在つて嘉謀をめぐらす大臣、又は外に出で、猛威を振ふべき大將、即ち拄杖子と同生同死底の衲僧が現に今何處に居るぞ、圓悟は有りや有りやと言ふ、吾々お互ひも雪寶の拄杖下に、犬馬の勞に服すべき輻重輪卒なりとも勤めなければならぬのである、土曠人稀にして相逢ふ者少し、土曠といふは土地曠漠といふことで、餘りに土地が廣いのに人が少いから片腕になつて働く者は容易に無い、と言へば雪寶自分一人のみ風穴の知音で、拄杖子と同生同死底らしく聞えるが且つ點胸すること莫れ點胸といふは自慢自負の姿である、萬里の清風只自ら知る人間界には到底謀臣も猛將も無いけれども、萬里の清風のみが雪寶の知音であるぞと言ふ、着語に旁若無人それは雪寶あまりに自慢すぎはせぬかと抑へ、誰をして掃地せしめん其のやうに獨りぎりになつては掃地させる奴僕も無くて困らうぞと弄し、也た是れ雲居の羅漢で大層なお天狗ぞと抑へる。

第六十二則 雲門中有一審

垂示以無師智發無作妙用。以無緣慈作不請勝友。向一句下有殺有活。於一機中有縱有擒。且道什麼人曾恁麼來。試舉看。

無師智を以て無作の妙用を發す、無師智と云ふは教家の説く所に依れば、法華經に一切智と佛智と自然智と無師智との四つを説いてあり、其中で他縁を待たざるを無師智と名くと釋してあつて、禪語では門より入る者は家珍に非ずと謂ふ如く、見性悟道の智は即ち無師智である、偕て此の無師智を得たもの、即ち見性悟道の人であれば無作の妙用を發する、無作といふは造作を假らぬと云ふことで、即ち天然自然に活潑自由なる作用のあらはれるのを無作の妙用と云ふ、さて又無緣の慈を以て不請の勝友と作る、これも教家では色々むづかしく言ふことで、慈悲に衆生縁の慈悲と法縁の慈悲と無緣の慈悲との三つを説く、其中で無緣といふは、無邊とか無限とか云ふも同じことで、自他を忘れ能所を見ずに天眞爛漫たる絕對の慈悲の彰はれることである、不請の勝友と云ふことは、華嚴經にも維摩經にも説かれてある、人から請待されな

ふ事である、さて又之を禪宗の言葉で言ふて見れば、一句下に向て殺あり活ありと無作の妙用を發し、一機中に於て縱あり擒ありと不請の友になつて濟度の方便をめぐらすことである、且く道へ什麼人が曾て恁麼にし來る、之を古人の中に求むれば、雲門大師の如き即ち其人ぞと云ふので、試みに擧ず看よと本則をあげる。

本則 擧雲門示衆云。乾坤之内、土曠人稀、宇宙之間、活計向鬼窟裏作也。

中有一寶、在什麼處、光生也。祕在形山、拈燈籠向佛殿裏。

獨可量將三門來燈籠上 雲門大師是即是不妨諸說。猶較一些。

あるとき雲門文偃大師が衆に示して云はるゝには乾坤の内、宇宙の間、中に一寶あり形山に秘在す、これは僧肇法師の寶藏論に在る語を借りてきたのである、此の寶藏論のことは前にも言ふたと思ふが、僧肇が冤罪のために秦王の刑に遭ふて殺された、其時に七日の暇を請ふて寶藏論を著述し、いよ／＼殺される時になつて四大元無主、五陰本來空、將頭臨白刃、猶似斬春風といふ偈を唱へて刑刃を受けたと云ふことである、偈こゝへ引いた語の意味は、無限の空間に充塞し無限の時間を通貫して十方三世に徧滿常住せる一つの寶物がある、其れが形の山、すなはち人間の肉體の中に秘藏されて居ると云ふ、即ち宇宙の本體が吾々お互ひの本心本心であると云ふ事を形容したのである、宇宙といふ語は、平生つかひつけて分

つたやうではあるが、上天下地を宇と曰ひ、古往今來を宙と曰ふとあつて、宇宙の二字に空間時間の共に無限なる事を含んで居る、圓悟が第一句の著語に土曠人稀と此の垂示を會する者の少きを歎き六合收不得と、此の一寶は乾坤の内ぐらゐることでは無い、上下四方の六合にも收りきらぬぞと言ふ、第二句に鬼窟裡に向て活計を作すことを休めよ、さらに又宇宙の間などと云ふ様子がチト恠しいぞと咎め、蹉過了也そのやうに乾坤の内だの宇宙の間だのと仕切をつけては大間違ひであらうぞと云ふ、第三句に什麼の處に在る其の一寶とか云ふものが何處に在るぞ、情識の分別を認めて其れが本心本性であるかのやうに誤つてはならぬぞとの警誡である、光生せり眞實に其の一寶が合點出來れば、盡十方無礙の大光明を放つてあらう、切に忌む鬼窟裡に向て覓むることを、かりそめにも情識の分別に涉つたならば、取り返しつかない誤りになるぞと云ふ、第四句に撈と云ひ點と云ふ、こゝの撈は破なり墮なりと註して、其の一寶を秘在してある形山を破し、點も點破であつて其の秘在をあばき破るのである、これ皆吾人をして一寶とか秘在とか云ふことに滞ふらせぬやうにとの慈悲の注意ぞ、然るに雲門大師の撈破點破は更に甚だしい燈籠を拈じて佛殿裡に向ふと言ふ、一寶が形山に秘在すと聞けば、何となく有り難さうにも聞えて、やゝもすれば情識にも涉りたがるが、燈籠が佛殿に這入つたと言へば有難くも聞えず情識にも涉れない、そうして畢竟は同じことである、畢竟同じことでありながら、一は情識に涉り一は情識に涉らないと云ふは何故であらうぞ、燈籠も佛殿も共に無心にして清淨無礙であるからである、要する所は五尺の肉體を見ることが佛殿の如く、心性を見ること燈籠の如くに、其實徹底することが出來れば、雲門大師の洪恩の萬一を報謝することが出來るであ

らう、しかし此れは理論でも領解し易い所であるから、着語にも猶ほ商量すべしとあるが、次の三門を將て燈籠上に來たと、更に雲門大師が那一寶を活轉せしめて見せられた、京都知恩院の三門の如き間口十幾間高さ何丈といふやうなものを、眞宗の佛壇に釣つてある輪燈のやうなものゝ上に將て來たと云ふのである、大小廣狹を分別したり迷悟苦樂を思量したりして居ては、到底何のこととも合點のゆくべきことで無い、若し能く此に於てセメては信得及する所があつたならば、始めて方に聊か雲門大師垂示の慈悲に答ふる事が出来るであらう、着語に雲門大師是は即ち是なれども妨げず、誦訛なることを、此の雲門の垂示は面白けれども、艱澁くて合點がゆきかねるぞと門下へ注意、猶ほ些子に較れり何うも未だ十分とは思はれなると抑へ、更に若し子細に檢點し將ち來れば未だ尿臭氣を免かれず三門を燈籠の上へ將てくるとか、燈籠を佛殿に入れるとか、何やら手品つかひのするやうなことを言ふて、禪宗くさい所が鼻つまみであるぞ、三門は自からは是れ三門にして燈籠は自からは是れ燈籠たるに、何の不足があつて其のやうに轉換を要するぞと云ふので、要する所は參學の徒に住著させまいとの慈誨である。

頌 看 看

高着眼 用看作 古岸何人把釣竿 孤危甚孤危 壁立甚壁立 賊

雲冉冉

打斷始得 炙脂帽子 鶻臭布衫 水漫漫 左之右之 明月蘆花君自看 着

則語 見雪寶末後句

此頌の長短句は亦た一種特別の體である、第一句が着々と只二字、雲門が三門を燈籠の上に將ち來たと云ふ、諸人よく看るが好いぞと言ふ、着語に高く眼を着けよ一通りの眼のつけやうでは見えないからであるけれども看を用ひて什麼をか作さん、其れを見て何するぞと咎めた、即ち是れが圓悟の高く眼を着けた所よ、驪龍珠を遊ぶと、これは雪寶が雲門の垂語を珍玩する姿、第二句に古岸何人が釣竿を把る、雲門が斯く僧肇の語を拈弄し、更に轉換して見せられたのは、畢竟學海の金鱗を釣り出さうと云ふ接衆の作略であるぞと言ふ、着語に孤危甚だ孤危、壁立甚だ壁立と此れは雲門の釣竿が餘りに高尙で、其の釣針にかゝるものが無いと云ふのである、其れを亦た雪寶が彼れ此れと云ふても、賊過後の張弓で、何の役にも立たぬと抑へ、又賊後に腮を見るは與に往來すること莫れ、若し復たヒョット其の釣針にかゝらうものならば、如何なる憂き目に遭ふかも知れんで、メツタに近寄らぬが好いぞと言ふ、三四の句に雲冉冉と云ひ水漫々と云ふ、此れは釣竿を把り居る所の古岸の景色、即ち人々各自の本地の風光、いかにも浩渺として瀟灑なる姿である、着語に打斷じて始て得ん其の冉冉たる雲や漫々たる水を都べて打斷したならば、彼の雲門大師垂示の本意が見えるであらう、けれども其雲や水が百匝千重で十方法界冉冉漫々と窺ひ難からしめて、更に炙脂の帽子鶻臭の布衫イヤハヤ穢なくて臭くて手もつけられぬは、鼻もちもならぬぞと奪ふ、皆吾人を導いて語脈裡に轉ぜられぬやう指導せられるのである、炙脂と云ふは汗や油が灸りつけたやうになつてるといふこと、鶻といふは鷹の類で肉食する禽であるから、非常に悪い匂ひのするものやうな、其のやうな穢い帽子や布衫では被るわけにも着るわけにもゆかね、其れと同様に、本分向上の處に腰を据え

てはならぬぞと奪ふたのである。左之右之此れは右も左も皆其儘にと云ふ意味で、再々たる雲も漫々たる水も、孰れを孰れと取ることもならぬば捨つることもならぬと、一旦奪ふたものを更に皆ことごとく與へられた、前に遮り後に擁す此れも左之右之と同じ意味で、何處も彼處も悉く本來の解脱の風景ぞと云ふのである、いよ／＼結句に明月蘆花君自ら看よ、再々たる雪や漫々たる水で未だ其の風光が見えぬならば、明月蘆花の邊で諸人各自に能く看るが好いぞと言ふ、明月の光は白いもの、蘆の花も白いもの、其の白い蘆花を白い明月が照す、皓々たる一色の上に同異の論量は容れられない、寶鏡三昧歌には此の光景を「銀盤に雪を盛り明月に驚を藏す」と謡ふてある、此の風光が能く分れば、彼の三門を將て燈籠上に來往すると云ふ事も明かに合點が出来るぞと云ふのである、けれども此の風光は看やうとして見えぬのであるから、着語に看若すれば、見えぬのみならず眼がつぶれると言ふ、若し雲門の語を識得すれば、便ち雪寶末後の句を見ん、此の着語は蛇足のやうである、處々に斯のやうな註釋的の着語の雜つてゐるのは、後人の書添と見えて毎にうるさく思ふことである。

第六十三則 南泉兩堂爭貓

垂示意路不到正好提撕言詮不及宜急着眼若也電轉星飛便可傾湫倒嶽衆中莫有辨得底麼試舉看

意路不到と云ふは心行處滅と云ふも同じことで、意識を以て考へ到れない所の境界、そこが即ち、正に好し提撕するにと、作家の宗師が學入を導いて往くべき所ぞと云ひ、更に言詮不及すなはち言語道斷で、是とも非とも言葉をして説き説はすことの出来ない場合、そこが即ち學入たる者の宜く急に眼を着けて實參實究すべき所ぞと云ふ、さて是の如くに提撕せられ、是の如くに參究して、已に其の本分の田地に到り得たる者であつたならば、其の活動の神機妙用は、亦た別段のものぞと云ふことを示して、若し也た電轉し星飛ば、便ち傾湫倒嶽すべしと言ふ、湫は潭湫と云て水の尤も深いところ、嶽は即ち山の最も高いところ、其の湫をも傾むけ嶽をも倒すと云ふので、眞箇衲僧の活作略には天地山川をも碎破するが如くに、都べての思議も言論も泯絶すると云ふことを示された、さて今此の衆中すなはち圓悟の門下に、其の傾湫倒嶽の活機輪を辨じ得る底の者あることなしや、昔は南泉禪師の如き即ち其人であるぞと云ふので、試みに舉す看よと本則を拈出せられた。

本則 舉南泉一日東西兩堂爭貓兒

提起云道得即不斬衆無對

泉斬貓兒爲兩段

堂と云ふは、僧堂の内の東單で坐禪して居る僧たちと、西單で坐禪して居る僧たちとのことであると云ふ説もあり、又經藏に東藏と西藏との二つあつたと云ふ説もあり、又は前堂と後堂とのことであると云ふ説もある、いづれにしても其の兩堂の首座と首座とが争ふたのである、然し其の様なことは、湘南でも潭北でも西洋人でも東洋人でも宜い、とにかく甲乙が集まつた猫の兒を一匹とらへて何か争つてゐたと見える、これは赤猫であるイヤ三毛猫であると争つたので有らうか、又は牝猫であるイヤ牡猫であると争ふたのであらうか、マサカに其様なことを争つたのではあるまい、然らば何を争つたので有らうぞ、此の猫が佛に成れるか成れぬかと争つたので有らうか、此猫が地獄へ落ちるか落ちないかと争つたので有らうか、孰れ其邊のことで、猫に事寄せた佛法の上の争ひで有つたらうと思はれる、其れならば昔の南泉門下の坊さんには限らない、佛在世の頃から今の世に至るまで、諸宗各派で念佛だの題目だの、坐禪だの觀法だのと、争ひの絶えたことが無い、畢竟皆本源を忘れて支派に走つた妄想分別ばかりである、そこで圓悟も是れ今日の合關のみにあらずと着語し、又一場の漏逗と兩堂の坊さんたちを叱つた、漏逗と云ふことは前にもあつたが、器物に疵がついたり塞がつたりして用に立たないことである、然し其實は三世の諸佛も歴代の祖師も皆此の猫の争ひから、發心もすれば修行もして、菩提涅槃を證得せられたのであるから、輕卒に思ふては相ならぬけれども、今わが祖師門下に於ては其の謂ゆる菩提も涅槃も超過した處を立場とするのであるから、南泉禪師が其争ひを見て遂に其猫を奪ひ取り、高く其れを提起して云く、道ひ得ば即ち斬らじ、一體に貴公等は何をゴタゴタと本分に背いたことを議論して居るぞ、サア一言此の南泉の心に契ふたことを道

ふて見る、其の一言一句が能く本分の事に適當すれば、此の猫を斬り殺さずに命を助けてやるが、若しも其うで無かつたならば一刀に此の猫を斬つてしまふぞと、謂ゆる電轉じ星飛ぶの勢ひである、着語に正令當行十方坐斷、是の如く法王宣戰の詔勅を發せられては、四海九州みな降伏の外はあるまいと言ひ、又這の南泉老漢には龍蛇を定むる手脚ありとあるが、此の着語なども無くても好いように思ふ、衆無對はたして誰一人として何とも道ひ得るものが無い、妄想分別の議論は彼れの此れのと騒々しくせに、いよく決死の際になつては此の通り一言もない、惜む可し放過することを其時にグツと南泉老漢の利腕を抑へて、猫を斬らうとする刀を奪ひ取れば好かつたに殘念なことよと圓悟は悔やむ、一隊の漆桶什麼をか作すに堪えんと抑へ、杜撰の禪和麻の如く粟に似たりと罵しる、遂に泉は猫兒を斬て兩段と爲す、猫こそ甚だ迷惑千萬なわけ有るが、到頭サツクリ二つに斬り下げられてしまふた、これが即ち垂示に謂ゆる意路不到言詮不及の處で、決して彼れの此れのと理窟を求め議論をさしはむべき所では無い、然るに南泉は殺生罪を犯したとか、イヤ本統に斬り殺したのでは無くて、只斬るやうな貌をして見せただけのことであるのと、色々に妄想分別する者もあるが、既に是れ意路不到の處である、何の罪とか罪でないとか云ふ論量があらうぞ、此場に於て斬る眞似をするの爲ぬのと云ふ程度の沙汰では無い、圓悟は快哉快哉と拍手大喝茶で、更に若し此の如くならずんば盡く是れ泥團を弄する漢、即ち南泉も亦やはり子供仲間オカマに過ぎぬであらう、けれども更にモ一步進んで言へば、彼の猫を奪ひ取るやイナや直にサツクリと斬り下げてしまへば好かつたに、道ひ得れば斬られじなどと云ふて、遂に斬らねばならぬやうなことに成つたのは、賊過後の張

弓で、甚だつまらぬと悔み、又已に是れ第二頭と抑へ、己れ圓悟であつたならば未だ舉起せざる時好し打つであつたにと自家の作略を示された、果して然らば猫も亦た災難を免かれたであつたらう。

頌 兩堂俱是杜禪和 道言出親口 撥動煙塵不奈何 看備作什

現成公案 也 賴得南泉能舉令 子好箇金剛王寶釵 一刀兩

段任偏頗 百雜碎 有忽人按住刀看他

兩堂俱に是れ杜禪和、杜は例の杜撰と云ふことで、昔し杜默といふ男か頻りに多くの詩文を作るが、少しも法にも律にも合はぬので、世間の人が都べて不合格な詩文のことを杜撰と曰ふたと云ふことである、それを今は禪僧の不合格者に應用して杜禪和と云ふた、禪和子といふは單に禪僧といふも同じことであるか今は韻字の都合で子の字を省いた、着語に親言は親口より出づ、此の雪竇の一言は實に大慈悲の訓誡ぞ、一句に道斷すモウ二言と云ふには及ばない、款に據て案を結す此れで裁判は決定した、烟塵を撥動して奈何ともせず、杜撰なる禪和子等が狼烟馬塵を撥動しての大戦争を始め、太平無事の天下を修羅の巷にして、如何とも始末のつかないやうに騒動を仕出かしたぞと叱られた、此れは都て古今の教相だの判釋だの比較だの批評だのと、名相の分別にばかり妄動して居る者の頂顛の一针である、着語に看よ備什麼の折合をか作さん、其のやうに戦つて何時どう落着させるつもりであるぞと言ひ、イヤ其の奈何ともし難き所が

現成公案で即ち意路不到の境界ぞと擲論し、更に其の奈何ともせざる所に也た些子ありマンザラ棄てたもでも無い、其れが即ち言詮不及の處よと弄す、頼ひに南泉の能く令を擧ぐるを得て、令は謂ゆる正令で納僧本分の號令、即ち棒を用ひ喝を用ひ、都べての意路も言詮も皆勦絶して痕迹なからしむる所の作用、若しも南泉禪師が此際に當りて此の正令を舉行せられなかつたで有らうならば、兩堂の首座は相抱いて無間地獄へ眞逆さまに、矢を射る如くに落ちるであつたらうと言ふ、圓悟は拂子を擧して云く一へに這箇に似たり、どうぢや南泉が刀を揮つて猫兒をサツクリ斬つた機合は、今わが此の拂子を斯う擧げたやうなアンバイぞと示された、力を揮つて猫を斬ると拂子を以て虚空を拂ふのと同じ姿であると云ふのぞ、けれども、王老師猶ほ些子に較れり、マダ南泉の令は十分とは言へぬ、なぜかと云ふに好箇の金剛王寶劍用て泥を切り去れり南泉の名劍も杜禪和の爲めに猫を斬つたのでは劍徳の光を失ふであらうぞと抑へる、一刀兩斷偏頗に任かす一刀兩斷は辨するまでも無い、偏頗と云ふは不正の貌と註して一方に片よることであるが、今は世人が彼れの此れのと色々いふても、其のやうなことは一向に構はないと云ふ意味で、偏頗に任すと言はれたものと見える、古人にも色々説があるけれども、これこそ妥當と思はれる註脚も見あたらない、着語に百雜碎と一刀兩斷の様子を評し、忽ち人あり刀を按住せば看よ他は什麼をか作さん、この按の字は抑なり止なりと云ふ義で、南泉が將に猫を斬らうとする刹那に、若しも傍から遽かに其刀を抑へ住めて斬らせないやうにする人が有つたならば、南泉は何うするつもりで有つたらうぞと云ふのである、放過すべからず此に於て南泉が設ひ一刀兩段にしたとしてもマダ許せぬ所があるぞと言つて、便ち打つと上

來の葛藤を悉く泯絶してしまふた。

第六十四則 南泉問趙州

本則 舉南泉復舉前話問趙州也須是同心同意始州便脫草鞋於頭上戴出泥帶水南泉云子若在恰救得貓兒唱拍相隨者少將錯就錯

趙州觀音院の從諷禪師は前にも屢々あつた通り、前則の主人公たる南泉和尚の弟子である、然るに彼の猫を斬つた時には他出して不在であつた、そこで後に趙州が歸つたのを見て、南泉が前話を舉げて趙州の意見を問ふた、若し其時に貴公が兩堂の内に居てあつたならば、何うするつもりであつたか言ふて見ろと云ふたやうなアンパイであつたらう、着語に也た須らく是れ同心同意にして始めて得べし、他人では到底相談にならぬ、同道の者まさに知る此の着語も重複であるから刪りたい、そうすると州すなはち草鞋を脱して頭上に戴いて出づ、これが即ち趙州老漢の意路不到言詮不及なる所を表明せられたる轉處であつて、彼の南泉の一刀兩段に猫を斬却したのと、全く同道唱和のところ、木佛が歌へば石佛が舞ふたやうなもので、到底人情凡智を以て彼れの此れのと測り知るべき事では無い、けれども圓悟は更に一步を進めて其の足に穿くべき草鞋を帽子のやうに頭に戴くと云ふやうな、餘計なことをするだけハヤつまらぬぞといふので、免れず泥を拖き水を帶ぶ畢竟子供だまかしよと抑へた、前の六十二則の三門を將て燈籠上に來たすの

著語に、尿臭氣を免かれずと言ふたのと同じ味ひである、南泉云く子若し在りなば恰かも猫兒を救ひ得たらんに、あの時に貴公が居合せてあつたならば、猫を斬らずに濟むのであつたものを、惜いことをしたと云ふたやうなアンパイ、これ亦た若しも語路を逐ふて妄想分別したならば、種々様々なる疑團に疑團が重なつて何とも解決のつかないことになるのみであらう、ナゼかと云ふに、南泉の言葉をして考へて見れば猫兒を救ひ得たらんと云ふうちに、何となく殺したのは悪かつたが、已むを得ない場合であつたと悔やむ意味が含んで居るやうに聞える、若しも其の様な人情を容れ得る話であるならば、南泉が猫を斬つたのは殺生戒を犯したのであると云はなければならぬことになる、其他に此れと同様の疑問が幾等も起つてくるが、結局その様な人情凡智を以て彼れ此れと論量すべきことでは無い、只これ鐵櫃子と參究するより外は無、着語に唱拍相隨ふ唱と云ふは歌を誦ふこと、拍と云ふは手を拍て調子を取ることを、即ち南泉の唱に趙州の拍、さて／＼面白い曲であると言ひ、知音の者少し斯う好く調子の合ふ相手は多く得がたいとほめて置いて、更に錯を將て錯に就くと抑へる、趙州が草鞋を戴いたのが既に錯であるに、其れを南泉が斯のやうなことを言ふのは錯の上の上塗りぞと斥ける。

頌 公案圓來問趙州言猶在耳○喪車背後懸藥袋不消更斬長安城裏任閑遊得慙快
活得不慙麼自在信手拈來草鞋頭戴無人會風也○有箇半箇別是一家歸到不

家山即便休

脚跟下好與三十棒○且道過在什麼處○只爲備無
風起浪○彼此放下○只恐不恁麼○恁麼也太奇

公案間かにし來て趙州に問ふ、兩堂の首座が猫兒を争ふて居るのを、一刀兩斷に其猫を斬り棄て、争ひの根源を斷ち切つた有様を、公案を問かしたと言ひ、其の既に問かして畢つた公案を更に拈じて趙州に問ふて、一重の公案にせられた、圓悟は、言猶ほ耳に在り其のお話ならばモウ聞き飽きましたと排ひ、更に斬ることを消せず、コ、の消せずといふ言葉は、須るすとか要せずとか云ふのと同じ意味で、其のやうに一疋の猫を幾たびも斬るには及ぶまいと抑へ喪車背後に藥袋を懸く死人に藥を飲ませて何の効があるかと罵る、さて又趙州は南泉から厄介を持ち込まれたのを知らぬ顔して長安城裏閑遊に任す頭に草鞋を穿いてノコノコと出かけて往つた、いかにも太平無事の民で、義皇以上の人も謂ふべき風采である故に、着語にも恁麼に快活なるを得たり又恁麼に自由なるを得たりと言ふ、何故に斯く快活自由なることを得たるかは、吾人の尤も參究すべき所ぞ、手に信せて草を拈じ來る備をして恁麼にし去らしめざる可からず、マダ南泉が前話を舉し終らぬに、ハヤ草鞋を頭にのせたと云ふ調子が、少しも分別に涉らずに手に任せて路傍の草でも引きぬいたやうな工合、それが即ち恁麼に快活自由にならねばならぬ所ぞと云ふのである、然るに其の草鞋を頭に戴ける趙州活機輪の轉處を人の會する無しと雪竇が言ふ、それは其のはず斯くの如き意路不到の處は元來人の會すべき事では無い、不會すなはち蓋天蓋地である、着語に也た一箇半箇の會する底もあらうぞ、此の圓悟の居ることを忘れるなど云ふたやうなアンバイ、けれども別に是れ一家風で趙州

の左右は亦た別段ぢやとほめ、明頭も也た合し暗頭も也た合す謂ゆる左右逢原で、ドチラからでも自由自在と踏敷する、歸て家山に到つて即便ち休す元來此人は途中の人では無い、十方法界の大安樂窩たる家郷の山房に歸臥して居るのであるから何事にも聊かも滞ふる所なく斯く快活自由に働けるのである、譬へて見れば己れの家の便處へは夜半に燈火なしでも間違ひなく往けるやうなものである、始めて泊つた道中の宿屋で、夜中にマゴノノするやうなものでは無い、圓悟が脚跟下好し三十棒を與ふるにと言ふ、家山とは何處のことぢや、別に家山に歸るには及ぶまい、十方法界をらぶべき處は無いに、其れを擇ぶと云ふので、三十棒を與へると云ふ其の説明を次に且く道へ過は什麼の處にか在る只備が風なきに浪を起すが爲めなり、ニヤーニヤーと自由にさせて置けば好いのに、猫を斬つたり、足に穿くべき草鞋を頭にかぶつたり、其れを又珍らしさうに持ち出して謔ひ囃したり、南泉も趙州も雪竇も皆これ風なきに浪を起すの罪人である、彼此放下彼れも此れも只放下して打ち棄て、置けば好いに、只恐らくは恁麼ならさらん然し本統に家山に飯臥することが出来まい、若し恁麼ならば也太奇、それが本統に出来れば随分おもしろいぞと吾人參學の者に對して色々と參究の要路を指示せられた。

第六十五則 外道問佛有無

垂示 無相而形充十虛而方廣無心而應徧刹海而不煩。

舉一明三。目機銖兩。直得棒如雨點。喝似雷莽也。未當得
向。上。人。行。履。在。且。道。作。麼。生。是。向。上。人。事。試。舉。

宇宙萬象の本體は如何なる形相と云ふ定りは無く、而して如何なる姿にでも顯はれる、其の様子を無相にして、形はれ十虚に充ちて、而して方廣なりと言はれた、十虚といふは十方虚空を省略したので、謂ゆる無限の空間といふこと、方廣の方は方正だの方等だのと續いて少しも誤りの無いこと、廣は讀んで字の如く限りなく、謂ゆる十虚に充滿して一切萬物に悉く行き涉つてゐること、偕又それは宇宙萬象の本體が物質となつての姿であるが更に精神的の作用となつては無心にして應ず本より本體に知慮分別のあるべきでは無いに依て無心である、無心そのまゝに一切諸法に應じて千萬無量の心的作用を發し、自由自在の活動をする、而も刹海に徧くして、而も煩はしからず、コ、で刹といふは世界のこと、刹海と云へば十萬虚空の間に無量無邊の多くの世界のあることを、大海に多くの島のあるに譬へたのである、さて、其の限りなき多くの世界に在る所の限りなき一切衆生に、善ねく充滿瀾論して千萬無量の作用を爲しつゝ、少しも其の本體に於て煩悶も惱苦も無いのが宇宙の大精神の妙處であるぞと云ふ、此の大精神を本來具有して居る吾々人類が、其れを實用し得ずして煩悶惱苦して居るのを煩惱生死の凡夫と云ひ、其れを實地に應用し得て自在無碍なるを菩提涅槃の聖者とも云ふのであるが、其の實地應用自在無碍の人であつたならば、三目機銖兩直に得たり棒は雨點の如く喝は雷奔に似たるの活作略をも爲し得るであらうけれども、更に

モウ一段すなはち百尺竿頭更に一步を進めて、其の實地應用自在無碍の聖者と云ふやうな、有り難そうな名稱も、快活らしい作用をも超過した本體其儘の妙處には及ばぬぞと云ふことを、也た未だ向上人の行に當得せざること、在りと云はれた、舉一明三目機銖兩と云ふことは第一則の垂示にもあつたので、非常に俊發伶俐であるといふこと、向上人の行履といふは今は本則の世尊良久を謂ふのである、そこで且らく道へ作麼生か是れ向上人の事試みに舉すと本則を提起せられた。

本則 舉外道問佛。不問有言。不問無言。雖然不是屋裏人也。有這些子香

世尊良久。莫誘世尊。其聲如雷。外道讚歎云。世尊大慈大悲。開

我迷雲。令我得入。憐憫漢一撥便。外道去後。阿難問佛。外道有

何所證。而言得入。不助令人疑着。也。要佛云。如世良馬見鞭影

而行。且道喚什麼。影打拂子。棒頭有眼。

支那に於ては佛教の書籍を内典と稱し、其他の儒教道教および諸子百家の書籍を都べて外典と謂ふが如く、印度に於ては佛教をのみ内道とも内明とも謂ふて、其の他の婆羅門種族等の信奉して居る都ての哲學とか宗教とか云ふべき種類を、悉く外道と稱するのが佛教を信奉する者の常である、今も其の或る外道の

一人が佛すなはち釋尊に問ふ有言を問はず無言を問はず、とこれは實に妙な問ひやうではある、此の外道中々一筋繩では縛られない奴で、若しも釋尊が何とでも言はれたならばイヤ其れは有言で御座る、拙者は其れを問ひませんと詰り、若しも何んとも言はれなかつたならば其れは無言であるから、拙者の問ふ所で御座らぬとやりこめて、いづれにしても釋尊に閉口頓首させやうといふ野心と見える、かやうな難問に出あふては如何なる者でも當惑するであらう、そこで圓悟は然も不是なりと雖も屋裏の人たり也た些子の呑氣あり、未だ本統のものとは謂はれなけれども、モウ我が佛法中の人になつて居るので、やはり聊か香ばしい所があるぞと褒めた、又双劍空に倚て飛ぶ有言も問はず無言も問はずと兩刃を左右に振りかざしての間であるぞと言ひ、更に頼ひに是れ不問これが有言をも問ひ無言をも問ふのであつたならば、問ふ者も問はれる者も更に厄介なことであつたらうが、好いアンバイに問はずと云ふのでおめでたいと弄した、然るにサガは三界の大導師ぢや、世尊良久とすましたものである、是れは他の書には世尊默然としたのもあり、又は世尊據座となつてゐるものもある、然るに雪竇は良久を探られたものと見える、默然ならば無言に似て居る、據座といふはチョイト坐り直すやうなことそやうな、然るに良久といふは將に何か言はんとするが如くであつて言はず、言はぬけれども唯の默然でも無い様子である、即ち有言にも落ちず無言に落ちず、唯是れ良久である故に雪竇の弟子の天衣和尚は之を頌して、吹毛匣裏冷光寒しと言はれてゐる、實に匣の中に正宗の寶劍を容れてあるやうなもので、抜き放つて振りかざさないでも觸ればザクリと斬れる有様が、見たばかりでも身の毛がよだつ、今この世尊の良久は無言とも謂はれねば有言とも謂はれないで、垂示に謂

ゆる無相にして形はれ、無心にして應ずる當體まことに歴々分明である、圓悟は、世尊を誘する莫れと著語した、若し萬一にも世尊の良久を彼れの此れのと凡情を以て測量分別したることならば、謗佛の大罪に落ちるであらうぞと學人への注意、又其聲雷の如しとある、良久と云へば無言默然のやうに思ふもあらうが、其聲の轟くことは雷の震ふが如くぞと云ふ風外老人は此著語は後人の妄添として斥けられた、ナゼならば其聲が聞えては有言に屬するからであらう、座者立者皆他を動じ得ず此の良久の確固不拔さ加減は坐つて動かしても立つて揺がしても到底一厘一毛も動かすことの出来るものには無い、外道讚歎して云く世尊大慈大悲我が迷雲を開きて我をして得入せしむ、さすがに圓悟が最初から屋裏の人と鑑定しただけであつて、時節因縁の純熟した宿善開發の人であつたと見えて、世尊の良久を讚歎して、お底で入ることが出来ましたと言ふた、これは一體に如何なる處を如何やうに讚歎したのであらうぞ、又如何なる處へ何の爲めに入つたのであらうぞ、そこが即ち人々各自に實參實究すべき所であらう、統大智が斧頭元是鐵と著語して居るのも面白い、圓悟は伶俐の漢一撥すれば轉ずと其の頓悟の速かさをほめ、更に其の轉がりがけんを盤纏の明珠お盆の上で珠をころがす様であると讚歎した、先づこれで本則は済んだので、あとは阿難の質問に釋尊のお慈悲である、外道去て後に阿難俄に問ふ外道何の所證ありて得入と言ふ、阿難陀尊者は釋尊の從弟であつてお弟子になり、三十年間常隨眠近して日々のお説法を悉く聽聞し、且つ皆語記して居たと云ふほどの人であるけれども、釋尊御在世の間には遂に悟りが開けず、後に法兄の摩訶迦葉尊者に提撕せられて、やつと印度に於ける第二祖になられた人である、乃ち平生のお説法で聽聞する所の道理に涉り言詮に表は

れたことであらうならば、解りもすれば記憶も出来るのもあらうけれども、今日の外道と世尊との問答になつては全たく盲目の垣のぞきと云ふ有様で、さすがの阿難にも何の事とも合點がゆかぬ、第一外道が有言を問はず無言を問はずと云ふ問ひやうも合點のゆかぬ問ひかたであれば、其れに對して世尊の良久も何の事やら少しも分らぬ、かてゝ加へて其の合點のゆかない良久を有り難そうに、大慈大悲我が迷雲を開きて得入せしむと御禮を言ふた外道の様子、實に狂人と狂人との出會のやうで、何の事とも愈々分らない、そこで到頭この質問と出かけたのである、抑もこれは阿難尊者の昔話では無い、吾々お互ひ皆悉く此に於て一大疑團を起さねばならぬので、若しも又其の疑ひも起らぬほどのことであつたならば、此の碧巖の參究などは實に何の詮もない暇つぶしに過ぎぬのである、そこで圓悟も妨げず人をして疑着せしむと云ひ、也た大家の知らんことを要すと云ふて學人を勸誡し、更に鋼鑊に生鐵を着くと阿難を抑へた、鋼鑊といふは鑄物師が鍋や釜などの穴を塞ぐために鑄掛をすることである、鑄掛をするには鐵を煮立て、湯にしてからで無くては穴を塞ぐことは出来ないのであるに、今阿難が己れの力で分りもせぬことを質問するのは生な鐵を鍋釜の穴へ着けたやうなもので、到底何の役にも立つまいぞと云ふのである、吾々お互ひ人々各自に我は果して熱鐵なりや將た生鐵なりやと反省せねばなるまい、佛云く世の良馬の脚影を見て而して行くが如し、誠にお慈悲の深い御教訓である、これは阿含經の中に四種の馬と云ふ喩があつて、學人の機根に四段の階級があると云ふ事を示された、其の第一が即ち鞭影を見て直に驚くとあり、次が鞭が毛に觸れ始めて驚く、其次は鞭が肉に觸れて乃ち驚き、最下等に至ては鞭が骨に徹して方に驚くとある、然る

に今この外道は實に最上俊發の機根であるに依て、わづかに鞭の影をチラリと見たばかりで、己に是の如く大悟の境に達することが出来たのであるぞとの御論しである、圓悟は且らく道へ什麼を喚んでか鞭影と作すと撻着せられ更に打つこと一拂子とある、此れが即ち圓悟老漢が鞭影を吾々に示されたのであるが、吾人は如何に其の鞭影を見るべきであらうか、棒頭に眼あり明なること日の如し、此の着語も採らぬと風外師は言はれた、いかにも御尤なことと思ふ、眞金を識らんと要せば火裡に看よ時節因縁純熟したら眞金の如き外道が、世尊の智火の炎々たる爐中に投じて、始めて其の木色をあらはすことが出来たぞと云ふ、此の語意は差支ないけれども、今さら茲へ斯のやうな着語の入るは無用かと思ふ、これも大かた後人の書き入れてゝもあらう、口を拾得して飯を喫せよ此れは餘計なことを言はずに其口で飯でも食へと云ふ惡口で、釋尊が阿難に向つて解りもせぬことを諍々と婆々談義して居られるのを抑へたのである、しかしながら釋尊が伶俐なる外道に對しては良久の活作略あり、遲鈍なる阿難に對しては亦た此の諍々たる教訓ある所、すなはち世尊の世尊たる所以をも知らなければならぬ。

頌 機輪曾未轉 在道裏一絲毫 果然轉必兩頭走 不左眼半斤右眼八兩明鏡
忽臨臺 見釋迦老子一撥便 當下分妍醜 盡大地是箇解脫門 好與妍
醜分兮迷雲開 放身處一線道 許備有箇轉 慈門何處生塵埃 偏界不與藏

○達磨 因憶良馬窺鞭影我有拄杖子不消爾與我○且道什千里追風喚
來也得回即錯○放過即不可○便打喚得回鳴指三下前不構村後不造店○拗折
雷聲其大雨點全無

機輪會て未だ轉ぜず、機輪の二字を圓悟が解釋して、機は乃ち千聖の靈機、輪は是れ從本已來諸人の命脈
 と言はれてある、要する所は諸佛も衆生も俱に本來具有してある所の本心本性のことである、其の本性の
 事である、其の本心本性が縁に隨ひ感に赴いて自在無碍に活動する姿、即ち垂示に謂ゆる無相にして形は
 れ、無心にして應ずる様子を機輪と名けたのである、さて其の機輪は本より無相無心であるに依て、如何
 に形はるゝとも如何に應ずるとも、會て未だ本位を動轉すると云ふことは無い、それを言説の上で云へば
 終日饒舌つゞけに饒舌しても、其儘に有言でも無ければ無言でも無いと云ふことにならねばならぬ、要す
 る所は轉の一字に在る、即ち今謂ふ所の轉の字は轉變の轉の字で遷り變る事である、遷り變るといふにも
 様々あるが、今は其の根源の本分に背いて枝葉の末に移り走る事である、譬へば花は咲きもすれば散り
 もする、其の咲くと云ひ散ると云ふは遷り變るやうであるけれども、咲くは咲くまゝに花の本分であり、
 散るは散るまゝに花の本分であるから、其の本分その儘の作用は會て未だ轉ぜずである、然るに若しも其
 の咲くと云ひ散ると云ふ反對の姿に付き廻つて、咲くは好いとか散るが悪いとか云ふやうな揀擇があつた

ならば、それが即ち動轉したと云ふもので、ハヤ花の本分に遠くして遠くなるのである、雪竇和尚今只此の
 機輪會て未だ轉ぜずと云ふ一句を以て外道が有無を離れて問ひ、釋尊が本分を全提して示された様子を頌
 し盡された、圓悟は、這裡に在りイヤ其處で御座ると受けたアンパイ、又果然として一絲毫をも動せず貧乏插
 ぎでもすることでは無いと大賛成を表した、第二句に轉すれば必ず兩頭に走る若しも此れが一絲毫をも動
 轉すれば、忽ち必ず有言とか無言とか迷とか悟とか苦とか樂とか生死とか涅槃とか、いづれ兩頭に走つて
 本分に背いて了ふことになるぞと警誡せられた、着語に有に落ちざれば無に落つと云ひ東せざれば西すと
 云ひ、皆經論の註解を見るやうな言ひ草で、圓悟の下語とは思はれない、終りに左眼半斤右眼八兩と云ふだ
 けが着語らしいが、兩頭は何れに走りても本分に背くの罪過は同じであるぞと云ふのである、明鏡忽ち臺に
 臨むと此れは世尊の照鑑に十方三世の一切諸法歴々分明、別して現に外道の肝膽を臍の下まで明かに照破
 せられた様子を頌したのである、着語に還て釋迦老子を見るや、どうちや釋迦牟尼佛の釋迦牟尼佛たる所が
 能く見えたかと學人への拶着、一撥すれば便ち轉ず釋迦老子がチヨイと手を掛ければ外道邪見の車輪も忽
 ち一轉して入正定聚の佛乘となるぞ、と云へば又其臺に臨める明鏡に付き廻るであらう、破也破也敗也敗
 也打ち毀してしまへ叩き破つてしまへと明皎々たる鏡を粉微塵に碎いてしまふた、當下に妍醜を分つ、釋
 迦老子の明鏡に照されては如何なる妍と美しくいのも醜と見悪いのも歴々分明毫も味まますことが出来ぬと
 云ふ、着語に盡大地是れ箇の解脫門の妍醜分明にして盡大地の一切諸法毫も味まます所それが即ち直に
 解脫の姿である、花の咲くは咲くまゝに他の束縛は受けぬ紅葉の散るは散るがまゝに誰も繫留することが

出来ぬ、盡大地何物か解脱ならざらんと意、然しながら其の妍醜といふ言葉に付き廻つて、妍と聞けば好いやうに思ひ醜と聞けば悪いやうに思ふものが有つたならば放さぬぞ、一體に雪竇が妍醜を分つなどと言ふのが宜くないと云ふので好し三十棒を與ふるにと奪ふた、還て釋迦老子を見るや釋迦老子は妍か醜か能く見分けられるか何うぢやと門下に一拶、妍醜分れ迷雲開く已に外道は世界の明鏡に妍醜を照らし分けられて、從來の迷雲は忽ちに掃ひ盡して本分に歸入することが出来た、着語に一線道を放つと外道の得入をほめ、又僧に箇の轉身の處あることを許すと賛成した、けれども尙ほ爭奈せん只是れ箇の外道あるを奪ふた、ナゼ奪ふたぞ元の外道に何の不足ありて迷雲を開いたとか得入したとか東奔西走するのであるぞと、本分の上から吾人に參究せしめんとの警策であらう、慈門何の處にか塵埃を生ぜん外道の迷雲を開いて得入せしめられた世尊の大慈大悲、即ち有無を離れて良久せられた當體には、只に有言無言の沙汰が無いばかりで無い、六祖の謂ゆる本來一物で何の處にか塵埃を牽かん、杳渺なる長空一點の雲影を留めざるの風光である、圓悟が徧界會て藏さす何處も彼處も開け放して宇宙萬象丸出しぢや、退後退後これは前にも有つた天子の行幸に警蹕する言葉で、下に居れ下に居れとか又は下がれ下がれとか云ふやうなこと只今唯我獨尊の主人公お通りであるぞ、森羅萬象みな下に居れ下に居れと云ふアンパイ、唯我獨尊の主人公とは誰様かと思ふたら達磨來也イヤ碧眼紫髯の達磨殿であつた、因て憶ふ良馬の鞭影を窺ふを其れに就て憶ひ出すのは良馬が鞭影を見て走ると云ふことである、世尊が阿難に諭されたお言葉を諺ふて置いて而して次の結句を喚び起すのである、着語に我に拄杖子あり僧が我に與ふるを消ひず、自分に必要な道具は

自分に持つて居るから、他人の道具を貸してもらふに及ばないと云ふ、即ち人々おのづから光明の在るありの意で、釋迦や達磨の御厄介にはならぬぞとの見識、とは云ふものゝ且く道へ什麼の處か是れ鞭影の處、什麼の處か是れ良馬の處、空想に走つて實地を踏み誤まらぬやうにせよと學人への警誡、千里の追風喚び得て回す、外道の俊發なるを千里の追風に比して（追風といふは秦の始皇が七頭の良馬を飼つてあつた中の隨一の名馬である）それが一日に千里も走るといふので千里の追風と謂ふたのである、それほど俊發の外道であるから、若しも邪路に向つて走り去つたことならば、どこまでも深く惡道に入るかも知れぬのを、如來の大慈悲方便を以て、一良久のもとに忽ち喚び得て頭を回らさしめられた、圓悟が佛殿に騎つて三門を出で去ると言ふ、千里の馬などを用ひずとも、佛殿に騎つて三門を出で去ることも自由なものぞと、更に一轉して示された、とかく良馬と聞けば直に良馬に付き廻るのが學人の常習であるに依て、かくも深切に轉處を聞いて指導せられるのである、更に身を轉せば即ち錯まる喚び得て回すと雪竇は言ふけれども、喚ばれて回るやうではモウ役には立たぬと抑へた、放過せば即ち不可如何に良馬であるなどと云ふても、少しも油斷は出来ぬぞと言ひつゝ、ビシリ鞭打つ、これが圓悟の馬の御しかたである、人々各自に斯く油斷なく意馬を御せよと云ふことぞ、喚び得て回らば指を鳴らすこと三下、これは亦た雪竇が彼の千里の追風に向つての最後の御しやうである、若しも彼れ外道が本分の衲子であつたならば、如何に喚び戻されたかと云ふても頭を回すべきでは無い、元來諸法住法位世間相常住である、花は紅に何の不足がある、柳は緑に何の不滿がある、然るに若しも花が緑に喚び得て回され柳が紅に喚び得て回されると云ふならば、それ

は天地の大變では無いか、今も亦た其の通り外道に何の不足があつてか佛道に得入するぞ、若しも外道の捨つべきありて更に佛道の取るべきありと言はゞ、業く已に第二第三に落在したことぞ、故に雪竇は三度爪弾きして斥ぞけやうぞと言ふたのである、指を鳴らすと云ふことは、常に彈指と謂ふ、李長者の華嚴合論に彈指に去穢と驚覺との二義あると云ふてある、驚覺といふは他人の内などへ入るときには、必ず其室外に於て先づ彈指三下して入ると云ふのが禮である、便處に入るときなどにも彈指するが好いと云ふことである、去穢の方は何なりとも穢らはしい物など見たり聞いたりしたときに、彈指して其の穢氣に浸されないやうに氣を轉ずるためである、今の鳴指三下も其の種類で、外道が世尊の良久に動かされて悟りを開いたなどとはイヤハヤ餘計なことをしたもので、吾人元來何の不足も無い無垢清淨の獨尊であるにと、本分の姿を示して第一句の機輪會未轉に結歸させたのである、着語に前は村に構せず後は店に迭せず、喚び得て回すと云ふから、前村に進ませず、更に彈斥するのを見れば後店にも迭せず、さては往くも復るも都べて皆本位を棄てるのであるから、いづれにもウロ／＼すべきでは無いぞ、拄杖子を拗折して什麼の處に向つて去る、之は雪竇が指を鳴らすと云ふた手ぬるさを抑へて、お前は拄杖を折つてしまふたのであるか、ナゼ三十棒を與へず指などを鳴らすぞと責め、更に雷聲甚大にして雨點全く無し雪竇は掛聲ばかり大きくて實地ぬるい、虚雷鳴で雨が降らない様であるぞと重ねて抑へる。

第六十六則 巖頭什麼處來

垂示 當機觀面。提陷虎之機。正按傍提。布擒賊之略。明合暗合。雙放雙收。解弄死蛇。還佗作者。

當機觀面とは對手の顔を見るやいなや、チラリと視線が出會ふた途端に、間に髪を容れる隙もなく直に陷虎の機を提さぐ、虎を捕へる機合といふものは實に怖ろしいもので、少しでも、隙間があれば忽ち虎にワングリと噛み附かれる、眞に命がけのものであるさうな、今や宗門の師家たる者が實參實究の學徒を接する手段も亦た其の通りでなければならぬ、正按といふは正面から向つてゆくことで、劍術ならば眞向に振りかざすといふアンバイ、傍提といふは正按の反對に、横の方から突ツ込んでゆく、劍術ならば刀を斜めに構へて横ツ腹へ斬り込むか足を薙ぎ倒すやうな機合、かやうに正奇出沒いろ／＼の手段を以て、擒賊の略を布く、その機に臨み變に應じて濟度衆生の方便をめぐらすことは、戰場に於て百萬の軍勢と奮闘するも同様である。さて又明合暗合双放双收と明と誰にも見える所から正々堂々と押し掛けることもあれば、暗と馬に枚を卿ませて鞭聲肅々夜過河とヒソ／＼攻め寄せることもある、また双放と何も彼も開放して自由任せるともあれば双收と都べて拘束して手も脚も動かさせぬやうにすることもある、かやうに衲僧作家の作略は千變萬化であるが、其中で今死蛇を弄することを解するは他の作者に還す、これは全く虎を陥しいるとか賊を擒ふるとか云ふのとは大に様子の違ふただけのことで、已に死せる蛇を活かして龍に化せしむることが出来ればまた一入のお慰みといふものちや、併し其ういふ藝當は巖頭や雪峯の如き人に

お任せ申すが好いと云ふて、本則を拵起した。

本則 舉巖頭問僧什麼處來過開口時納取了也僧云西京

來果然頭云黃巢過後還收得劍麼平生不曾做草賊僧

云收得敗也巖頭引頸近前云因須識機宜始得上僧

云師頭落也只見巖頭利不見巖頭呵呵大笑

僧後到雪峰依前顯預撥僧問什麼處來不可不說僧

云巖頭來果然峰云有何言句舉得僧舉前話便好雪峰打

三十棒趕出雖然斬釘截鐵何故朝打三千暮打八百若非不是

巖頭落
在什麼處

巖頭和尚と雪峰和尚とのことは、前の第五十一則の處で大略申して置いた通りのことである、さて或時一人の納僧が巖頭和尚の處へ參禪のため相見に來た、巖頭が直に其僧に向つて什麼の處よりか來ると例の如くに其の僧の脚下を點檢にかゝつた、着語に未だ口を開かざる時に收缺を納れり、とある、其の僧がま

だ何とも答へをせぬうちにハヤ腹の底まで見透されて、とうに收缺了つて居るやうに見えるとの豫言である、然るに巖頭が斯やうな擗問を起されたのは、髑髏を穿過す、魂のぬけた枯骨を斬つて見るやうなものよと冷かし、又來處を知らんと要するも亦た難からず、問ふて見るまでも無いことよと抑へた、僧云く西京より來る、着語に果然、それ見る西京から參りましたなどと正直は正直であらうけれども、撥草瞻風の納僧たる處は少しも無い、一個の小賊に過ぎないに依て、陷虎の機も擒賊の術も必要は無さそうであるけれども、巖頭の慈悲の深さ更に黃巢過ぎて後に還て劍を收め得たりやと問ふた、コレには故事がある、昔し曹州に黃巢といふ者があつて、最初は鹽を賣る商人であつたが任俠氣のあるもので、遂に土匪の頭になり、王仙芝といふ友人と黨を結んで處々方々を荒し廻つて居たが、或時途中で劍を拾ふた、取上げて見れば「天賜黃巢」といふ銘が刻んである、其れから一段と自信が強くなつて、自から衝天大將軍と名乗り出し、長安を陥落させて自ら皇帝と稱し、國號を大齊と名け、年號を大統と建てるに至つた。けれども其の運は長く保てないで、程なく李克用に破られて滅亡してしまふた、今この僧が西京から來たといふに就て、其の西京は昔し黃巢が一旦占領してあつた長安であるが、たとへ黄巢が滅亡しても、其の天より賜はつたといふ劍は遺つたであらうに、其の劍を貴公が持つて來たかと云ふの間である、サア此の劍は只一時皇天から黃巢に賜はつたのみでは無い、無始劫來未來永劫、人々具足箇々圓成、殺活自在の那一劍であるから、今さらに收得の不收得のといふ沙汰のものでは無い、然し曾つて承陽大師が「此法は人々分上ゆたかに備はれりと雖も、修せざるには現はれず證せざるには得ること無し」と言はれてある通り、いかに先

祖傳來の正宗の名刀を身を放さず佩びて居ても、遂に劍術の稽古をしたことが無く、抜くことさへも知らないものには、插木ほどの用にも立たないばかりでは無く、却つて其のために大怪我をすることがあるやうもので、身を衛るべき道具が中々に身の禍となるのである、偕て圓悟の着語に平生曾つて草賊を做さずとある、巖頭は餘程の大賊であるに依て、斯やうな問を起したのは中々油斷がならぬぞと言ひ、又好大膽と評した、又此の二つの着語の間に頭の落るを顧りみず便ち恚麼に問ふとあるのは、恐らくは、草賊を做さずと云ひ、好大膽と云ふ、二つの着語を注解的に後人の書き加へたのでは無からうかと思はれる、僧云く收得す、其の天から賜はつた寶劍は確かに拙者が持つて居りますと立派に答へた、本より人々の具足で持つて居るには相違なからうけれども、それが謂ゆる大怪我の種にならねば好いが、圓悟が敗也、モウそれで大失敗してしまふたぞ、ナゼかと云ふに未だ轉身の處を識らず巖頭に收得すやと釣られたのを外すことが出来ないで、直に其の收得といふ言葉に喰ひ附いて、ハイ收得して居りますと云ふやうなことは、モウ早や已に大怪我をしてしまふたのである、けれども此の僧のやうな茅廣の漢が世間には麻の如く衆の如くに多くある、誠になさけない事ぞと圓悟が歎いて吾々を警省せられた、茅廣といふは疎荒といふも同じことで疎漫荒涼の意味、他の本には謀廣と書いたのもあるが謀廣と云へば虚言妄語することである、そうな、巖頭頭を引て近前して云く固、然らばお前が其の劍を掛けて居るか、それならば此の老僧の頭を斬り落して見ると云ふので、ヅカ／＼と其の僧の側へ近寄つてエイと聲を掛けた、此時の固の字は重い物などを持ちあげたりする時に力を入れるためにヤツとかエイとか掛聲をする姿である、大智和尚は

此處へ毒氣射人と着語した、實に恐ろしい機會である、圓悟は也た須らく機會を得て始めて得べし、斯の如き作略は巖頭のやうな能く機宜を得た人でなくては出来ないことであると言ひ、實に是れが謂ゆる陷虎の機と云ふものであると評し、更に是れ什麼の心行ぞと巖頭の所爲を咎めるやうに言ふて、學人に參究の要點を指示せられた、僧云く師の頭落ちぬ、ソレお望み通り和尚の頭を斬り落しましたと、此の僧なかなか豪氣な勢ひのやうではあるが、結局空砲を放つたのに過ぎないのであるから、圓悟は只、錐頭の利を見て鑿頭の方を見ず、コレは錐の尖は鋭いものであると云ふことばかり知つて居ても、鑿の先は四角であると云ふことを知らないと言ふ俗語で、つまり向ふ見すと云ふ意味である、此の僧が巖頭の頸を引いて斬れと云ふたのに釣り込まれて、直に頭が落ちたと云ふた調子が全く出たらめを言ふので、其の好惡をか識らん、其の愚には及ぶべからずである、此次に着也とある、着語を風外和尚は上の着語に附けて一句に讀むが好いと言はれてあるが、イツソのことに削除してしまふた方がよからうと思ふ、巖頭呵々大笑す、此の呵々大笑が實に恐ろしい、圓悟は盡天下の衲僧も奈何ともせず何故に巖頭が呵々大笑せられたのであるか、只此の僧の愚を笑はれたとばかり上滑りして見過ごすわけには往くまい、或る場合に於ては對手の作略又は機鋒を讚歎し、又は印可する爲めに呵々大笑することも往々にあるのである、今は果して何の爲めの呵々大笑であらうぞ、圓悟は更に天下人を欺殺すと言ふた、更に這の老僧が師の頭の落處を尋ぬるに得ずとある、彼の僧が師の頭落ちぬと言ふたが、其の落ちた頭は何處へ往つた、其の落ちたと云ふた頭が呵々大笑して居る、これは彼の僧だけの責任では無い、吾々お互もろともに巖頭の頭の探索と、呵々大笑の

聲が何處から何の爲めに發したのであるか取り調べて見ねばなるまい、圓悟が此公案を評唱するために此れと同じやうな他の一則の公案を擧げられてある、それは龍牙和尚がまだ若い時のことで、或時徳山禪師の處へ往つて學人莫耶の劍に仗て師の頭を取らんと擬する時如何と問ひかけた、其時に徳山が今の巖頭と同じやうに頸を引いて近前し固と云ふた、龍牙も亦た師の頭落ちぬと答へたが、此時に徳山は呵々大笑では無くて便ち方丈に歸るとある、何も言はずに笑ひもせず黙して方丈へ引込んでしまはれた、龍牙は其れで大勝利を得たつもり、立派に徳山の頭を斬り落したつもりで居たものと見えて、其後に洞山大師の處へ往つて其の話を自慢らしく言ふた時に、洞山が我に徳山の頭を借し來れ、お前が徳山の頭を落したと云ふなら其頭を私に見せてくれと言はれた、此時龍牙は言下に於て大悟し、遂に香を焚いて遙に徳山を望んで禮拜懺悔したと云ふことである、又此の巖頭に向つて師の頭落ちぬと言ひつゝ巖頭に呵々大笑せられた僧も、彼の龍牙の若い時と全く同じ程度であつたものと見えて、大笑されたのを、却て印可でも受けたやうに思ふて居たことであらう、果して僧後に雪峰に到る、雪峰和尚は前の第五十一則でも申した如く、巖頭の兄弟弟子で同牀に生死する親しい中である、着語に依然として顛預憶と彼の僧の相變らず迂路／＼と呻吟あるく有様を叱り、更に這の僧往々十分に收缺を納れ去るとある、此の着語も亦た前の顛預憶を注解したので後人の書入かと思はれる、峰問ふ什麼の處より來る、例の如く從前の行履を點檢される、着語に來處を説かずんばある可からずと言ひ、也た勘過を要すと言ふ、語意は辨するまでも無い、僧云く巖頭より來る、いつでも正直なことは正直に相違ないが果然として、收缺を納る、モウ斯れで第一歩から失敗

である峰云く何の言句か有る巖頭の處で何のやうな話があつたぞ、ハヤこれが擒賊の機であると云ふことも合點のゆかない謂ゆる茅廣の漢であるから、擧げ得るも免かれず棒を喫すること、たとへ如何なることを擧揚し得たからと云ふても、到底雪峰に出あふては三十棒を食ふより外に致しかたはあるまいと云ふ、果して僧前話を擧す巖頭の頭を打ち落しましたと云ふ話をした、着語に便ち好し起ひ出すに、果して雪峰打つこと三十棒この間抜け坊主め、何をぬかして迂路つきあるくぞと云ふので、打つて打つて打ちすゑた上に起ひ出してしまふた、前に類則に擧げた洞山は我に徳山の頭を借し來れと眞綿で頸をしめるやうなのであつたが、雪峰の機は全たく武斷的で彼の僧ひどい目にあふたが、他の龍牙はコ、で言下に大悟して徳山の之恩を感謝したけれども、此僧はコ、で大悟したやら打たれ損になつたやら、ソコの結局は分らない、要する所は平素眞實に工夫參究の功を積んで居なければ、如何なる名師の接化にあふても其効が無いことになる、吾々お互でも大に反省せねばならぬ次第である、着語に然も斬釘截鐵なりと雖も甚に困てか、只打つこと三十棒のみなるやと、圓悟は檢事の申告と云ふ調子で、中々其の罪科は三十棒ぐらゐの軽いことでは無いと云ふ、更に拄杖子也た未だ折るゝに至らざる、此の着語も前の註釋のやうで蛇足かと思はれる、又其の次の且つ未だ是れ本分にあらず何が故ぞ朝打三千暮打八百モット／＼打つて打つて打ちすゑよと云ふのであるが斯んな着語も無くもがなと思はれる、其次の若し是れ同參にあらずんば争でか端的を辨ぜんコレは巖頭と同參の雪峰でなくては斯うは往かないと云ふのであるから、有つても邪魔にはならないが、其實これもどうでも好い、然るに最後の然も是の如くなりと雖も且く道へ雪峰巖頭什麼の

處に、落在すと云ふ一語は、たとへ眞に圓悟の着語でないにしても、此の公案に參究するものゝ尤も注意を要する所である。

頌 黄巢過後曾收劍○孟八郎漢有什麼用處 大笑還應作者知○一子親

宜是落便宜○據款結案○悔不恨 得便○當初○也有些子

黄巢過後曾て劍を收むと云ふは、彼の僧の茅廣に答へた有様を知したので、其の故事は已に本則で申した通りのことである、着語に孟八郎の漢、什麼の用處か有らんと抑へた、たとへ如何なる名劍を收得したからと云ふても、抜くことも知らない孟八郎では何の用にも立たないぞ、況んや只是れ錫刀、子一口、子供の玩具に錫で作つた小刀よ、それで何うして巖頭が斬れるものか、大笑は還て應に作者知るべし然るに巖頭が頭を引いて圓と言ふた時に、已れの頭が落ちて了ふとも知らずに却つて師の頭落ちぬなどとたわごとを言ふて居るから、巖頭は氣の毒で堪らぬので呵々大笑されたのを、まだ何のために笑はれたかも分らずに居たのであるが、其の笑はれたことは同參の雪峰が能く知つて居るぞと云ふのである、作者と云ふことは前にもあつたが、唐宋の時代は詩文の作爲が盛んであつたから、何でもエライ人のことを作家とか作者とか稱したものであるそなた、着語に一子親く得たり一子と云へば雪峰が巖頭の弟子のやうにも聞えるが、今

は只同胞といふほどに見れば好い、能く幾人かある、此語も前の一子の注解のやうである、是れ渠儂にあらずんば、争でか自由を得んこれも注解ぢや、有つても無くても好いやうに思はれる、三十山藤且らく輕恕す。山藤と云ふは、即ち山から伐り出したばかりの藤の拄杖と云ふこと、其の拄杖で三十棒を與へたのは、且らく情狀酌量の上の輕罪處分で、誠に御仁恕の御沙汰と申すもの、其實は曾て巖頭が呵々大笑の時に彼の僧の命はハヤ無かつたのであるが、それを今雪峰が代つて打つたのであるから着語に同條に生じ同條に死す、巖頭と雪峰とは異體同心であると云ふ、朝打三千幕八百と云ふは雪寶が三十山藤の輕恕であると云ふたのを賛成して、本分の令であつたならば三千も百もよと承けたのである、又巖頭の呵々大笑と雪峰の三十棒とは恰かも東家の死すれば西家の死すれば西家を助くるやうなものよと評し、却て與めに救ひ得て活せしむ、若し此の三十棒が無かつたならば、彼の僧は遂に出身の活路が無かつたのであるが、此の三十棒で目が醒めて正氣になれば彼の僧の幸福である、便宜を得る是れ便宜に落つ、此の便宜と云ふことも前にあつたかと思ふが、これは商人が商賣上に於て言ふことで、得便宜と云へば利益のあつたこと、落便宜と云へば損耗したことであるそなた、今は彼の僧が劍を收得して師の頭落ちぬと言ふた處は得便宜のやうであつたが、それが却つて笑はれたり擲られたりすることになつては是れ落便宜である、又巖頭や雪峰も笑つたり打つたりした處は得便宜のやうであつたが、彼の僧が其れで龍牙のやうに言下に於て大悟とも往かなんだのでは、笑つた効もなく三十棒も疲勞もうけと云ふ落便宜になつたぞと、雪寶が揚げたり抑けたり批評である、着語に欸に據て案を結す、コレで裁判が濟んだ、悔らくは當初を慎まざりしことを、結局落便

宜となつたのは、互ひに最初に注意しなかつたからのことであると云つて、後學のものを啓誠せられた、也。た些子ありと云ふ着語に就ては、古人も色々と言ふては居るが、結局コゝに必要が無い、イツソ削つてしまふが好いと思ふ。

第六十七則 梁武帝請講經

本則 舉梁武帝脅傳大士講金剛經達磨兄弟來也○魚行酒肆知不無衲僧門下即不可○遺老漢老

武帝愕然也兩回三度被三人瞞○志公問陛下還會麼直得火星迸散○似則似 志公云也教他摸索不着 大士便於座上揮案一下便下座是則未是○不煩打稿藤

帝云不會許可惜 誌公云大士講經竟與起逐出國始是作家○當時和誌公一小時

此の一則是垂示が無くて直に本則である、梁の武帝のことは第一則の下で委しく申して置いた通りのこと、傳大士と云ふは婺州と云ふ處の在家の居士で、名を翁と曰ひ、齊の建武四年の生れで劉氏の妙光といふ婦を娶り、普建と普成との二子を生み、雲黃山と云ふ處に手づから二本の樹を栽て双林と名け、自から

善慧大士と稱して大乘佛法の中に就ても禪宗の宗乘を達磨大師と同時に唱へた人で、遺著には「傳大士語錄」といふのがあり、別して「心王銘」と題せる一篇の如きは廣く世に流布せられてあり、傳記は傳燈錄の第二十七に委しく載せられ、又編年通論や佛祖通載などにも載せられてある、即ち印度に於ては維摩居士、支那に於ては此の傳大士、我日本に於ては聖德太子、これが先づ在家居士の三國傳燈の祖師と申しても好からうと思ふのである、此人が或時梁の武帝に書翰を差出したが、其の冒頭に「双林樹下當來解脫善慧大士、白國王救世菩薩」と書いてあつたのを、梁朝の官員たちが無禮であると云つて武帝に進達しなかつたと云ふことである。然るに武帝は常に信仰して居る所の寶誌和尚に向つて、金剛經の講釋を聞きたいと言はれた、寶誌和尚すなはち誌公のことはコレも前の第一則の處で申して置いた通りのこと、當時無双の碩徳であつた、然るに誌公が武帝に申したには、金剛經と云ふものは、中々拙僧などに講釋の出來るものでは御座らぬ、幸ひに市中に傳大士と云ふ人が居ります、此人ならば確かに金剛經を講釋することが出来ましやうと言ふた、然らば其の人をと云ふので傳大士に勅命が下つて、愈々大士が參内して金剛經を講釋することになつたのである、ソコの様子を本則に梁の武帝、傳大士を請して金剛經を講ぜしむとある、一體に此の金剛經と稱するものは、大般若經六百卷の中の第五百七十六卷目の能斷金剛分と題する所を、別譯單行して金剛般若波羅蜜多經と名け、禪宗に於ては朝夕に讀誦して居るのであるが、それは釋迦老人の説法の糟粕を、支那の三藏法師が漢字に翻譯した文章に過ぎないのである、然るに眞の金剛經といふものは釋迦老人に説いてもらはないでも、三藏法師に譯してもらはないでも、人々具足個々圓成、決

して他人の講釋などを聞くべきものではない、謂ゆる冷煖自知して獨り莞爾と笑ふ時節が無くては、幾ら講釋を聞いたからとて何の効もあるべきではない、然るに今梁の武帝は誌公に聞きたいと言ふて斷はられたにも驚りず、其の誌公の口車に載せられて今度は傳大士の講釋を聞かうと云ふのである、本分の上から見れば實に一場の滑稽に過ぎぬ、ソコで圓悟が大士を揶揄して達磨の兄弟來也と着語した、達磨が武帝の處へ往つた話は第一期の通りであるが、傳大士も亦た其の轍を踏むかと冷かしたのである、更に魚行酒肆は即ち無きにしもあらず、衲僧門下のことは即ち不可ならんと抑へた、これは在家居士の傳大士のことであるから、魚店へでも酒屋へでも自由自在に大乘佛教を説くことは出来るであらうが、我が衲僧門下の事は亦た別段であるに依て、いかに傳大士でも到底うまくは働けまいぞと言ふて、後の大士の働きを案外に思はせる稱揚の作略である、ソコで次の着語にも這の老漢老々大々として這般の去就を作す、自ら當來解脱善慧大士などと名のるくせに、武帝の召に應じて講經の座に昇るなど、は何といふ醜態ぞと罵しつて、傳大士を全く普通の經師論師のやうに抑へて置くのが、後に大に揚げるの伏案である大士便ち座上に於て案を揮つこと一下して便ち下座、さて愈々大士が金剛經を講釋すると云ふことになつたから、武帝を始め百官臣僚みな耳を澄して居たことであつたらうが、大士はカチリと案を一つ撃つたばかりで直に講座を下つてしまふた、これは現に文字に書いた金剛經にも無法可說是名說法とあるので、金剛不壞の正體は到底言説を以て彼れの此れのと談論すべきものではない、圓悟が直に得たり火星迸散することを、揮案一下便下座といふ機合寸分の隙間も無い有様を、星の飛ぶのに譬へたのである、斯う稱賛すれば亦た之に取附

ものゝあるのを恐れて、似たることは、則ち似たり、是なることは、則ち未だ是ならずと抑へて見せる、尙ほ葛藤を打するを煩さず、能くも言説を用ひずに金剛經を講じ畢られたことよと稱揚する、武帝愕然まことに無理の無いことで愕然されたのが當然である、着語に兩回三度人に瞞せらるイヤハヤ武帝はお氣の毒なこと、達磨には無功德だの無聖だの不識だのと幾たびも驚かされて、又々傳大士に愕然させられる、サテも／＼とのお悔みである、也た他をして、模索不着ならしむ、これは到底武帝に合點のゆくはずは無い、然るに又横合から誌公が口を出して陛下還て會すや、如何で御座る御合點がゆきましましたがなと泣面を蜂がチクリと刺した、實は此事に就て歴史上の研究になれば大疑問があるので、武帝が傳大士に金剛經を講じさせたこと云ふのは大同年間の事であり、誌公は天監十三年すなはち傳大士が十八歳の時に遷化されたと云ふことであるから、此の講經は誌公歿後凡そ二十年も経つてからのことであると云ふことである、然し今は歴史上の研究などには必要でない、着語に理に當せず道理の前には人情を容れないに依て、天子であるからと云ふて遠慮するには及ばないとけしかける、肱膊は外に向はず如何ほど誌公が氣を揉んでも肱膊が外へ向はないと同様に、武帝に此の事が會せられるものではないと抑へた、肱は胸骨なりと註し膊は股又は臑の骨といふ字である、どのやうにしても股や臑を外へ向けることは出来ないことと云ふことである、也た好し三十棒を興ふるに、若しも本分の上ならば、直に武帝に三十棒を興ふべきであるのにと息ま、帝云く不會、今更のことでは無い、着語に可憐許サテ／＼致し方もない次第、誌公云く大士講經竟れり御丁寧なるお斷りではある、圓悟が也た須らく國を逐ひ出して始めて得べし曾て達磨を逐ひ出した時に

も誌公を諸共に逐ひ出すが好いと言ふてあつたが、今も亦た大士も誌公も逐ひ出してしまへば好かつたに、ナゼかと云ふに本分の上から見れば揮案一下も已に是れ第二第三、況んや講經竟れりなど、何の贅言を費して居るのぞと益々宗乘を托上し、結局此の博大士と誌公との兩箇の漢は同坑に異土なし全く一つ穴の狐よと言ふ、コ、に又更に歴史上の疑問のあるのは此の博大士も實誌和尚も皆達磨大師に遭はぬかと疑問である、たとへ遭ふたとして達磨に遭ふた後に其薰陶を受けたものとは思はれない、然るに博大士の心王銘を始め他の詩偈などを見ても、全く六祖以後の禪祖の口吻がたしかにあつて、彼の誰も能く知つて居る「橋は流れて水は流れず」と云ふ句の如き、臨濟洞山あたりよりも少し後の人の調子である、これは暇のある人たちに委しく研究して置いてもらひたいものである。

頌 不向雙林寄此身只爲他却於梁土惹埃塵若不入草
也風流當時不得誌公老 有作不須本 也是栖栖去國人正好一狀領

双林に向つて此身を寄せずと云ふは、博大士が自己の住處と定めてある双林樹下に落ち着いて居たら好からうに、ノソノソと天子の居る都などへ何しに出て来たものかと云ふて、大士が自家本分の地を去つて衆生濟度のために身をやつす有様を頌したのである、着語に「只他の把不住なるが爲めなり、他とは大士をさし把不住とは取り留らないこと、今は其の自家本分のに落ち着いて居らず、利他の境界に出かけたを云ふ、けれども囊裏豈錫を藏す可けんや囊の中へ錐を入れて置けば知らず」の間に尖が出るやうに、濟

度衆生の慈悲心を抑へ附けて置かれるものではない、却て梁土に於て埃塵を惹く、兒を怒んで醜を忘るゝ有様、頌し得て誠に分明である、着語にも若し草に入らずんば争でか端的を見ん、釋尊が華嚴自證の座を起つて鹿苑阿含の境に下り、小乘方便の教を説かれたやうなもので、若し此の草裡に混ずるの方便がなかつたならば、孤峯頂上に獨り自ら尊しとするのみで、遂に宗乘の端的を擧揚するの機會が無からう、埃塵を惹くと云へば何となく殺風景のやうにも聞えるが、其の風流ならざる處也た風流で、坂上、田村將軍が百萬の醜虜を皆殺しにする手腕を以て、幼ない子供の相手になつて、無我無心に遊んで居るやうなものが、其のあどけない所に却て將軍の英風颯として艸木も靡く氣象が一段と奥ゆかしいやうなものである、これは何事の上にも吾人の學ばなければならぬ大切なことである、當時誌公老を得ずんば也た是れ栖々として國を去るの人なりしならん、切角と博大士が手を垂れて導びかれたにも拘はらず、武帝は不會で畢つたのであるが、若しも其の時に誌公が口を出して、これで本統の金剛經の講釋が済んだので御座るぞと言ふてくれなかつたならば、又彼の達磨のやうにスゴ／＼と手持ち無沙汰に江を渡りて魏の國へでも往かなければならんだかも知れなかつたに、先づ／＼博大士は御無事でおめでたかつたと雪寶の冷かしてあゝる、着語に賊と作つて本を須ひず誌公の此處の働きかたは、盜賊が資本いらすに金を贏けるやうなもの、博大士に揮案一下の資本を出させて置いて、傍から講經竟ると利益を占めた、實に此の講經竟るの一言に千萬無量の力がある、彼の從容錄に出て居る世尊陞座の話や、東印請祖の話などを引いて參考すれば、餘程おもしろいけれども、長くなるからお預りにして置く、さて又次に伴を牽く底の瘤兒あり大士と誌公ま

ことに好いカツタイ仲間である、正に好し一狀に領過せん皆同罪であるから同じ刑罰に處するぞと云ふて
便ち打つとコレが圓悟の此の公案に對する斷案である、碧巖百則中にも此頌の如きは誠に解しよくて、着
語も亦た一つも餘計なものが無い、他の諸則の着語も餘暇のある時に悉く能く撰擇して、煩はしくないや
うにしたいものである。

第六十八則 仰山問三聖

垂示 掀天關、翻地軸、擒虎兕、辨龍蛇、須是箇活鱗鱖、漢始
得句句相投、機機相應、且從上來、什麼人合恁麼請舉看、

此の垂示は相契ふ處を論ぜられたのである、先づ天關を掀け地軸を翻すと云ふは主人たる人の自行の立ち
場で、宇宙萬象を自由自在に寝かさうとも起さうとも勝手にすると云ふのである、次に虎兕を擒へ龍蛇を
辨ずると云ふは、其の天關を掀倒し地軸を翻覆する底の大力量ある主人公が、如何なる賓客を接待しても
灑々落落として力を弊せず其功を實にする様子を示された、悟て又是の如き主人に對して賓客となり、賓
客たるの資格を全うするには、須らく之れ活潑々の漢にして始めて句句相投機々相應するを得べ
し、尋常容易の手段では到庭お相手になれるわけのものでは無い、譬へば碁を打つて見ても將碁を指
すにして見ても、二段も三段も段の違ふ者が何うして對等の手合せ出来やうぞ、今も全く其の通りのこと

で、天關を掀け地軸を翻する底の主人には、同じく天關を掀け地軸を翻する底の賓客でなくては、呵々大
笑して歡を竭すわけにはゆかぬ且らく從上來什麼人が合に恁麼なるべき、之を古人の賓主應酬に求むれ
ば、仰山と三聖との商量であらうぞと本則に結歸した。

本則 舉仰山問三聖。汝名什麼。聖云。慧寂。仰山呵呵。

仰山云。慧寂是我。聖云。我名慧然。仰山呵呵。

大笑。可謂是箇時節。○錦上鋪花。○天下人不知落處。何故土曠人稀相逢者少。○
一似巖頭笑。又非巖頭笑。○一等是笑。爲什麼却作兩段。○具眼者試定當看。

仰山、三聖に問ふ、仰山慧寂禪師のことは、前の第三十四則にあつた通り、禪宗五家のうち一番に古い滂
仰宗の第二祖勅賜智通大師である、三聖慧然師は前の第四十九則にもあつた如く、臨濟大師の高足の弟子
である、いづれも當時の横綱力士で、兄たり難く弟たり難き作家の衲僧であるが、年輩から云へば仰山は
先輩であり、法系から見ても仰山は百丈の孫であり三聖は百丈の曾孫であるから、其の位地が多少相違し
てゐたらしい、乃ち三聖は前の第四十九則にあつた通り、雪峰にも參學せられたが其後に仰山の處へ往つ
たものと見える、而も此の本則の問答は初めて仰山に相見した時の事と見えるが、仰山は疾に三聖の名は
慧然と云ふことも知つて居るに相違なく、又一見して直に此れは餘程出来て居ることも、謂ゆる龍蛇を辨
するの眼を以て見留めて居るが、其の出来加減を點檢するために、汝の名は什麼と問ひ掛けた、コ、で汝

と斥したものは抑も何物であらうぞ、今現に此處へ来て仰山和尚に相見して居る慧然和尚の肉體のことは有るまい、謂ゆる父母未生以前の面目を暫らく假りに汝と謂ふたとすれば、其の謂ゆる父母未生前の本來の面目は名を何と謂ふであらうぞ、或は眞如とも法性とも、又は菩提とも、涅槃とも、色々の名は附けられてあるが、其のやうな古くさい名では仰山老人なかく承知しない、のみならずソレから後の商量が尋常容易のことでは済むまい、即ち垂示に謂ゆる活潑々の漢でなくては、句々相ひ投じ機々相應することが出来ぬぞと圓悟が言ふて置いた所以である、着語に名實相奪ふ世の諺には名は實の賓といふこともあるが、今仰山が、名は何ぞと問ふた一言に、自然に其實は何ぞと云ふ意味も含まれてあるから、其名の答へ一つで其實の價値も定まるのである、然し賊を勾して家を破る、仰山はトンだ盜賊を引きずり込んで身代限りをしなければ好いと言ふた、果して聖云く慧寂ハイ拙僧の名は慧寂と申します、コレは驚いた、慧寂といふは主人たる仰山禪師の名で、然るに賓客たる三聖が主人の名を奪ふて、拙僧が慧寂で御座ると言ふ、元來天地萬物コレは月であるコレは花である、イヤ山である河であると色々の名をつけてあるが、それは無始劫來月花が自ら月花と名のつたのであらうか、山河が自から山河と稱したのであらうか、其名ばかりでは無い元來月花は徹底月花で、山河はどこまでも山河であらうか、正眼に見來れば了々として一物も無い、何の月花と名け山河と稱すものあらんや、故に般若心經には色即是空と説かれ、祖師は身心脱落と言はれてある、然しそれは理窟である、今や三聖が仰山に汝の名は何と問はれた途端、拙僧の名は慧寂と、賓主を泯絶して雪月蘆花宇宙一色の風光を咄嗟に現出せしめた働きは、實に古今の奇觀であ

る、着語に舌頭を坐斷すコレには誰でも口は出せまい、其の働きの敏活さは敵の旗を撻き鼓を奪ふたやうなものぞと圓悟老人大喝采である、こゝで仰山は之に對して何と出るかと思ふにさすがは天下の名將である、一向平氣で仰山云く慧寂は是れ我、ウム慧寂ならば其れは老僧ぢや、着語に各自封疆を守る豈唯一色邊に留まらんや、仰山は自づから仰山で三聖は自づから三聖よ、コレの様子を寶篋三昧歌には「類して齊しからず混すれども處を知る」と諺はれてある、そこで三聖も亦た云く我名は慧然と更に名乗り出した、般若心經にはコレの處を空即是色と説かれ、祖師は脱落身心と言ひ、東坡居士は「到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮」と言ひ、法華經には「諸法住法位世間相常住」と示されてある、着語の閑市裡に奪ひ去るとあるは三聖の機合を拙僧のやうであると評したので、彼此却て本分を守るとあるはモハヤ言ふまでも無い、そこで仰山呵々大笑す是れ此の呵々大笑は宇宙萬象一齊に聲を放つて萬歳を唱へたのである、圓悟は謂つ可し是れ箇の時節と必ず此の呵々大笑の時節が無ければならぬのである、此の呵々大笑で錦上に花を細くが如く、本地の風光に益々光彩を添えたぞと云ふ、世間の婦女子が諺ふ俗曲に「露は尾花と寝たといふ、尾花は露と寝ぬといふ、寝たと云ひ寝ぬといふ、尾花が穗に出てあらはれた」と云ふのがあるが、其の寝たと云ふのが我名慧寂と云ふ所で、寝ぬと云ふのが慧寂是我と云ふ所、そこで尾花が穗に出て露はれたと云ふ所が即ち呵々大笑の時節ではあるまいか、圓悟は更に天下の人落處を知らず何が故ぞ土廣く人稀れにして相逢ふ者少し、此の仰山呵々大笑の味ひを合點する者が少いと云ふ、又一へに巖頭の笑に似て又巖頭の笑に非ず、コレは前々則に巖頭が呵々大笑したのは問者の僧の不啣喙を氣の毒がつて笑ふた

のであるから謂ゆる苦笑であり、今仰山の呵々大笑したのはソレと全く違ふて、謂ゆる天籟の聲である、又一等には是れ笑なり什麼としてか却て兩段と作ると云ひ、更に具眼の者は試みに定當して看よとあるのは、皆後人の書き入れが混じたので決して圓悟の下語ではない、風外老人は前の天下人不知落處の下の何故以下は皆取らぬと言はれたが誠に御尤のことである。

頌 雙收雙放若爲宗知他幾人八面玲瓏騎虎由來要絕功若不

門上眼肘臂下有符爭得到這裏騎則不笑罷不知何處去
萬古有清風只應千古動悲風如今在什麼處
雙收とは双方ともに收拾するので、取り抑へて散らさぬ姿、即ち汝名は什麼と取り組んでゆけば、直に悲寂と對手の名を奪ひ、賊馬に騎て賊を逐ふ有様、又放とはソレと反對に何も彼も開放して手を推し廣げ、悲寂は是れ我と云へば我名は慧然と帶紐といた姿、此の賓主唱酬、互ひに相ひ契ふた調子の好き、此れは一體若爲なる宗ぞ若爲と云ふは如何と同じことであるから、之を俗に言へば其の双收双放の取り組の面白さに思はず知らず聲を放つて、これはマア何といふ面白いことであらうぞと言ふたやうなアンバイ、それを若爲なる宗ぞと言ふたのである、圓悟もそれに大賛成で知んぬ他に幾人かあらん、此の仰山と三聖との外には恐らく斯のやうな面白い相撲はあるまいと云ふ、更て八面玲瓏と喝采した、將に謂へり真箇無麼の事

あらんとコレは圓悟が門下及び後來の學人等が此の双收双放の機に取り附いて金鎖玄關に滯ふらんことを怒み、ナニ本統に其のやうなことがあるものかと奪ふて見せたものと見える、虎に騎るには由來絶功を要す、馬に乗るのでさへも馬術を知らないものは往々蹴落されるのであるに、況んや虎に騎らうと云ふには奇絶妙絶の功を積んだ者でなくては、到底蹴落されるばかりでは無く、一嚙に食ひ殺されるは勿論のことである、然るに今この仰山と三聖との問答は、互ひに虎となり騎手となつて、ヒラリと騎るかと思へば又ヒラリと飛び下りるアンバイ、ほとんど曲馬師が馬の上で藝をするやうなものであるとの稱讃である、着語に若し是れ頂門上に眼あり肘臂下に符あるにあらずんば争でか這裡に到るを得ん、言ふに及ばぬことこんな着語は無くも好いと思ふ、且つ語の意味を辨するまでも無いが、肘臂下の符と云ふことは前にもあつたと思ふ、コレは支那の道教の人たちが護身符と云ふ守り札を肘に懸けて居れば、如何なる惡鬼も惡魔も害を加へることが出来ないと思つて居る、それが俗間の風習となつて斯のやうな俗話も出來たものと見える、日本の佛教、別して眞言天台や日蓮宗などの或部分に於て、輒もすれば御守りとか御符とか云ふて人に授けるのは、皆此の支那の道教の風俗が傳染したのである、然るに禪や神道までが其眞似をして色々な守れなどを出すに至つては誠に滑稽至極と言はねばならぬ次第である、次に騎ることは則ち妨げず只恐らくは備下り得ざらんことをとある、此の着語は肝要のことで、語意はコレも辨するまでも無いが、何事も只進むことばかり知つて退ぞくことを知らぬやうなことでは、決して成就することが出來ぬ、祖師が常に退歩の學を學べと言はれたのも全くコ、である、是れ無麼の人にあらずんば争てか無麼の事を明めん、

この著語も言ふに及ばぬ、無くても好い、笑ひ罷て知らず何の處にか去る、虎の頭に騎つたり下りたりは左もあらばあれ、最後の呵々大笑し去つた、其の笑聲を眞實に聞き得て諦當なる者が幾人ある、統大智が笑聲起、清風、清風絶、蹤跡と評してあるが、實に其の通りのことで、圓悟も盡四百軍州、恁麼の人を覓むるに也、た得難しと言ふたが、支那一國を四百州と云ふことは、趙宋の時に天下の軍區を四百軍に分けて一軍を一州と定めたのである、言猶ほ耳に在り、仰山の笑ふた聲が今も尙ほ聞えるやうであるぞと言ふ、吾人も皆必らず與かり聞かねばならぬのである、千古萬古清風あり、何ぞ唯清風のみならんや、明月も飛花も落葉も笑聲古今に通徹して居るでは無いか、然るを何處去など、は何事ぞと咎めたと見え、只應に千古悲風を動かすべし此の一句は古人も色々に見て居られるが、統大智は大笑の落花便ち是れ本分斷腸の悲風であると言ひ、風外老人も亦た仰山の一笑に逢ふては天下人も腹を斷たねばならぬ、雪竇も頗る斷腸ぢや、汝諸人從劫至劫工夫を下しても此笑は知れまい、其のはすぢや佛祖も親ふことがならぬと言はれてある、圓悟は如何に今什麼の處に在る、其の千古の悲風は現在即今何處に在るか、雪竇に問ふやうにして門下への注意である、更に咄と蹴はなしてしまふた、大笑にも悲風にも取り着くまいぞとの咄却ぢや、既に是れ大笑什麼として却て悲風を動かすと一拶して、大地黒漫々サア此の黒漫々地に笑ふべきことがあるか悲しむべきことがあるか、到頭蹤跡を泯絶してしまふた、これは圓悟が學人のために慈悲深重なるところぞ。

第六十九則 南泉拜忠國師

垂示 無啗啄處。祖師心印狀似鐵牛之機。透荆棘林。衲僧家如紅爐上一點雪。平地上七穿八穴。則且止不落黃緣。又作麼生。試舉看。

啗啄なき處といふは宇宙の本體に形象の見るべきもの無い姿を言ふたので、啗も啄も齒を立て、物を噛み砕くことであるが、それが無いと云ふのであるから、齒の立て處が無いと云ふことで、謂ゆる不可思議不可説不可量の姿である、偈又祖師の心印すなはち達磨所傳の心法は、狀鐵牛の機に似たり鐵牛のことは前にもあつたが黄河の守護神であると云ふので、すさまじく大きな鐵の牛を作つて大河を跨がせてある、それは如何なる力を以ても揺り動かすことが出来ないと云ふ譬喩、且つ又已に鐵牛である、それに何の心機もあるべきは無い、心機は無いはずであるが河を守る所の神であると云ふ、祖師の心印は如何なる狀であるかと云ふに、本是れ心印である何の狀もあらうはずは無い、何の狀も無い其まゝに活潑々地に能く働らくものは祖師の心印である、そこで此の譬喩があるのである、荆棘林を透る衲僧家、荆棘と云ふは都べて往來の妨害になる所の草木、吾人の一心上に自由自在の働きを妨げる者、即ち人我は勿論その上の

法我、乃至法身二種の病とも云へば金鎖玄關とも云はるゝ、悟りの上の佛見法見、それらの障害物を悉く透り越してしまふた真箇の衲僧であつたならば、如何なる時に如何なる事に出あふても、紅爐上一點の雪の如く赫々と起りきつてる火の上の一つまみの雪を載せたやうに、あるかと思ふまに跡跡は無い、如何なる心機發動しても發動するまゝに即空即寂、少しも痕跡を留むべきでは無い、然しながら是の如き平地上すなはち灑々落落たる太平無事の境界に於て、七穿八穴とは何事にも自由自在に働くことは即ち且く止く、資縁に落ちざる又作麼生、資縁は連絡の義であるから、何事にもせよ色々と複雑した關係のあることを資縁と云ふので、和訓にはマツハルとも讀ませ纏綿と同じやうな意味にも見ることがある、今は即ち都べての言説伎倆を離れて、謂ゆる鐵牛の機に似たる心印の状を示すことは何うしたものぞ、試みに擧す看よ。

本則 擧南泉歸宗麻谷同去禮拜忠國師至中路

三人同行 必有我師

○有_二什麼奇特_一南泉於地上畫一圓相云道得即去無風起浪也
○也要_二辨端的_一歸宗於圓相中坐一人打和麻谷便作女人拜一人打鼓
泉云恁麼則不去也半路抽身是好人一人打和歸宗云是什麼心行一人打鼓

一識破 一當時好與 一掌 一孟八郎漢

南泉の普願禪師と歸宗の智常禪師と麻谷の寶徹禪師と三人で、同く去て光宅寺の慧忠國師を禮拜せんとなす、此中で南泉のことは前に屢々出てあつて、第二十八則にも第四十則にもあつたが、別して例の斬猫で名高い人、麻谷のことは第三十一則にあつた、只歸宗のことは未だ前になかなかと思ふ、此人は南泉及び麻谷と同じく馬祖道一禪師の法嗣で達磨九世の孫である、麻山の歸宗寺と云ふに住せられたから、歸宗が通稱になつて居る、又忠國師のことは第十八則に委しくあつた通りで、唐の肅宗皇帝及び代皇帝二代の帝師で、王者の尊敬を受けたことに於ては古今無類、強いて例を求むれば我が國の夢窓國師のやうな人であつた、そこで當時の衲僧たちが皆歸宗の門下に集まる勢ひであつたが、南泉・歸宗・麻谷三人のためには祖父の南嶽の兄弟であるから、三人は國師の又甥に當る緣故もあり、三人打揃ふて又叔父の國師に遭ひに往かうといふのである(コ、に去ると云ふ字を使つてあるのが今日通常の漢語では分りにくいのであるが、ヤハリ往くと云ふことで後にも此字が肝要の語になるから贅言ながら申添へて置く)着語に三人同行すれば必ず我師あり、論語の三人行則必有我師をもじつたので、圓悟の下語らしく思はれないけれども別に害もなからう、什麼の奇特がある、コレは確かに圓悟らしい、國師に何の奇特があつて遙々と何の爲めに禮拜しに往くぞと叱る、とは云ふものも也た端的を辨せんことを要す、之を機縁として三人お互ひに其の端的を辨驗するも好からうぞと云ふ、中路に至りて南泉は地上に一圓相を畫して云く道ひ得ば即ち去らん兄弟三人同行ではあるが、中にも南泉は兄の資格であるから、途中あるきながらも油断なく他の二人を搦搦してゆく様子である、遂に途中で南泉が地上に一つの圓相すなはち丸い輪の形を畫いて、サア尊公等二人

とも各々自分の見處を言ふて見ろ、其の言ひやうが我が氣に契へば國師の處へ往かうし、若しも二人の見處が詰らぬとしたら、モウ國師の處へ往くことは止めにしやうと云ふ相談である、一回相と云ふは宇宙萬象の本體圓明寂靜にして都べての形象を絶し、而して都べての徳用を具足せざることなき姿を表示するのである、之に對して何となりとも一言のべて見ると云ふのが南泉の發議である、圓悟は風なきに浪を起すと云ふた、元來言語道斷心行處滅の境たる一回相に對して、何とか言ふて見るとは餘計なことでは無いかと抑へるやうに言ふて、益々宗乘の高尙なることを詮表するのである、然しながら此の一回相の消息は也た人の知らんことを要する所ぞと言ふて吾人の參究を勧め、又陸沈の船を擲却すと奪ふた、船といふものは海の中で沈没したのでもモウ用には立たぬものである、況んや陸上で沈没してしまふた船が何の用に立つぞ、其のやうな不用の物を持ち出して何うするつもりかと、眞理は到底形容することも詮表することも出来るものでは無いにと云ふ意味、とは云ふものゝ驗過せずんば争でか端的を辨ぜん裏から云ふたり表から云ふたり、百方便して吾人に宗意を示されるのである、歸宗は圓相中に於て坐す宇宙の全體ことごとく歸宗の膝下に歸してしまふ、歸宗の外に宇宙なく宇宙の外に歸宗は無い、圓悟は一人鑪を打てば同道まさに和す、南泉が銅鑪を叩けば歸宗が歌ふ、イヤモウ面白いお芝居であるワと云ふたアンバイ、そこへ又一人おどり出したのは麻谷便ち女人拜を作す、アラ有難や圓相歸宗如來光明遍照十方世界南無南無と合掌恭敬して拜む有様、女人拜と云ふは男子の如く五體投地をするに及ばず、たゞ合掌して腰を屈することを云ふので、一體かやうな場合に女人拜をするに云ふことは、彼の翻筋斗すなはちトンボガヘリをすると同じ

やうなことで、眞面目の仕方では無い、人を馬鹿にしたやりかたである、然し今の處は實に三人同道唱和の調子、少しも隙間はないのである、着語に一人鼓を打てば三箇も也た得たり、これで十方法界を舞臺とした三人兄弟の大演劇が滞ふりなく演ぜられた、そこで頭取の南泉は無麼ならば則ち去らじ貴公等二人が其ういふわけであるなら、モウ國師の處へ往くことは止めにしやうと云ふ、ハテナ最初に道ひ得ば即ち去らんと云ふ約束であつたに、歸宗の坐斷と麻谷の女人拜を見てモウ往かないと云ふからは、此の二人の仕打が氣に入らぬと云ふのかナ、まさかソウではあるまい、然らば二人ともに能く道ひ得て居るから、モウ國師の處へ參究に往く必要もないと云ふので往くことを止めたのであらうか、人情を以て推量して見ればそれに違ひないやうであるが、これは結局人情を以て模索し得らるゝことではあるまい、要する所は南泉の活機は、去も不去も自由に轉身する所に在るのちや、それ以上は各自實地の參究に任せるより外は無いて着語に半路に身を抽んずる是れ好人と、これは南泉の轉身自由を稱讃したのである、又好一場の曲調と云ひ更に作家作家と重々の喝采である、然るに歸宗云く是れ什麼の心行ぞ、言葉の上では南泉が去ると云ふて置きながら、更に去らぬと云ふのを咎めたのであるが、まさか其のやうな情識の計度では無からう、亦た是れ歸宗一段の轉法輪畢竟如何と參じて見ねばなるまい、着語に頼ひに識破するを得たり、歸宗は南泉の心行を飽くまで識破して此の一拶を下したるぞと云ふのである、當時好し一掌を與ふるに其時すかさずピシヤリと南泉を打つてやれば好かつたに、然るに歸宗は元來孟八郎の漢であるから、斯のやうなことを言ふて人を惑はすのであるぞと、其實は歸宗に大賛成のことと見える。

頌 由基箭射猿 當頭一路誰敢向前 遶樹何太直 若不承當爭敢恁麼
觸處得妙 未發先中 是 誰曾中的 箇一箇半箇也 用不得相 也
多時 千箇與萬箇 如麻似粟 野狐精 一 是誰曾中的 箇一箇半箇也 用不得相 也
餘 呼相喚歸去來 歸去好 曹溪路上休登陟 不 曹溪門下 抽
客 復云曹溪路坦平爲什麼休登陟 不 曹溪門下 抽
餘 高高低低處平之有不足 雪寶也 悲這般病痛

由基の箭猿を射る、コレは三人の言語動作個々別々のやうでありながら、結局同道唱和であつて少しも調子の違はぬ所を、由基が猿を射た故事を以て頌せられたのである、由基と云ふは姓名を養叔と曰ひ、由基は其字である、或時楚の恭王が獵に出て一疋の白猿を見出して多くの人に射させたけれども、猿が悉く其の箭を捉へて戯れて居る、そこで群臣が養由基ならば確かに射當てるであらうと申したので、由基を召して射させた所が、猿が由基の顔を見るやいなや樹に抱きついて悲しんだが、由基が遂に箭を放つに及んで、猿は樹をグル／＼と遶つて箭を避けやうとしたけれども、不思議なことには由基が放つた箭が猿と共に樹を遶つて遂に射落したと云ふ怪談がある、今此の三大老の作略も其の妙處に至つて居る有様は、ほとんどそれと同じ様な調子であると云ふのである、着語に當頭の一路誰か敢て向前せん天下萬人誰ありてか能く此の箭先に向つて進み得るものがあらうぞと、三大老の作略を讃歎する、又觸處得妙と云ひ未だ發せざる

に先づ中ると云ふ、皆重ね／＼の讃歎のみである、第二句に樹を遶ること何ぞ太だ直なる、樹を遶ると云ふことは前に言ふた通りのこと、何太直の直の字には古來色々の説がある、直は當なりの訓で、只能く當つたと云ふことに見る説もあり、又すでに樹を遶るとあるからには、箭がグル／＼と迂曲したわけであるが、結局その目的の猿に當つたと云ふ點から見れば、曲り遶つたまゝに即ち真直であると云ふことにならる、今三大老の作略も個々別々のやうでありながら、其の別々のまゝに同一調子であると云ふ姿を頌したのであると云ふのも一説である、いづれにしても意味に格別の差異はない、要は只其の妙處を語ふたまでのことぞ、着語に若し承當せずんば争でか敢て恁麼ならん三人ともに皆能く本分の宗旨に承當してあればこそ、斯の如く異曲同工の中したのであると云ひ、又東西南北一家風東西南北と別々のやうではあつても、元來同一馬祖門下の兄弟であるから其の家風に異りは無い、已に周遮すること多時、周遮と云ふは遶ること、イヤモウ先刻から一回相と遶つたり、坐圓相と遶つたり、女人拜と遶つたり、久しい間いろい

ろ周遮したが、それが皆能く當つたぞと云ふ、千箇と萬箇と是れ誰か曾て的中つ古今東西千箇萬箇の參禪の客は多くあつて、このやうに能くの中し得たものは誰あらうぞと重々の讃歎ぢや、着語に麻の如く粟の如しとは千箇萬箇の相鈍、野狐精一隊も妄修暗證の徒に多いことを歎き、然し其中に南泉を得るを争奈何せん、全く一人も無いとは言はれまいぞと弄し、更に一箇半箇はあらうぞと云ひ、又更に一箇も没し其の實は南泉と雖も許されぬ所があると、四方八面から評論して吾人參究の資料を與へられた、其上に一箇も也た用不得と云つて、縦ひ一箇の能く的中てた者があつたとしても、それが何の用に立つぞ、喚で如

如と做すも早く是れ變了と云ふでは無いかと云ふ調子で、ますく吾人に自分の草料を給與せられた、相呼び相喚で歸去來、三人が途中の相談と云ふてモウ此處から歸りまじやうと云ふことに成つた、此の歸去來が肝要ぞ、承陽大師は空手にして郷に還つたと言はれた、佛法だの祖道だのと云ふ重荷を負ふて歸つたのでは無い、何事につけても皆此の故郷本家へ歸つてからでなければ本統の仕事は出来ぬ、圓悟は一隊泥團を弄するの漢と三人が去るの去らぬのと言ふて居るのを罵りつゝ、更に往くよりもイツソ歸り去るの好きには如かずと賛し、又却つて此子に較れり其れも未だ本分とは言はれぬけれども、國師を禮拜するなどと云ふて他國に流浪してあるく、他力の念佛行者よりは好からうよと云ふたアンバイ、曹溪路上に登陟するを休む、國師は曹溪六祖の嫡嗣であるから、國師の處へ往くのを休めて、故郷へ歸るが好いと云ふのである、要する所は人々各自に自己本分の家郷がある、それを忘れて輒もすれば他に求めやうとするは、大丈夫たる者の耻づべき事である、之は何事につけても同じことで、回轉の機尤も肝要なる所以である、著語に太勞生往きかけて見たり戻つて見たりサテモく御苦勞な事ぞと冷かし、想ひ料るに是れ曹溪門下の客にあらず、必らず曹溪へ往かねばならない人たちでは無いのであるそうナ、曹溪のみならず靈山へも、兜率へも、極樂へも、低々の處は之を平ぐるに餘りあり高々の處は之を觀るに足らず、之は曹溪の路と云ふ路の字に就て、雪竇の此の頌が未だ圓成して居ないと云ふ事を評したので、俗語に帶に短かし襌に長しと云ふやうな著語である、要は次の結句を喚び起して此の頌を圓成させやうと云ふのである、そこで雪竇が復た云く曹溪路坦平、什麼として登陟を休む、南泉兄弟三人はナゼ曹溪へ登ることを休めたの

であらうぞ、曹溪の路は平々坦々で何も登り難い處では無いにと言ふて、吾人の道程を案内せられた、三祖の至道は無難であると言はれたのも同じ調子である、圓悟は評唱の中に、曹溪路上は塵を絶し迹を絶し露躰々未灑々平坦々脩々地なり各自に脚下を看よと言はれてある、さては吾人お互ひ行住坐臥みな是れ曹溪路上の往來かナ、著語に唯南泉半路に抽身したるのみならず雪竇も亦た乃ち半路に抽身せりとある、南泉は道ひ得ば去らんと言ひながら途中で更に去らじと言ふたが、今また雪竇も前に登陟を休むと言ひながら更に什麼としてか登陟を休むと反覆した、畢竟同じ穴の狐であるぞと抑へたやうに揚げたのである、然し好事も無きには如かず、幾ら面白い事でも徹底無事なものには及ぶまい、何でも餘計なことは爲ぬことよ、けれども雪竇も也た這般の病痛を患ふ、とかく雪竇は文筆の巧みに任せて言ひ過ぎる癖があると抑へたのであるが、其の病痛は圓悟も亦た免かれまい、昔し天桂和尚は釋迦の饒舌には誠に困ると言ふたことがあるそうナ、兒を懲んで融を忘るゝは、都べて人の親たる者の常態と見える。

第七十則 瀉山侍立百丈

垂示 快人一言快馬一鞭。萬年一念。一念萬年。要知直截。未舉已前。且道未舉已前。作麼生模索。請舉看。

快人の一言快馬の一鞭は讀んで字の如く、固より字句を講釋する必要は無い、要する所は主客相對して這

の事を商量する上に於て、纔かに一言一句を發すれば、其の俊發爽快なることは千里の駿馬に一鞭を加へて風を蹴つて飛ぶが如きものであることである、偕又是の如き俊發敏捷なる應對の間には寸分の隙間もない有様を萬年一念一念萬年と言はれた、此の語は三祖僧璨大師の「信心銘」にあるのを引いてきたので、萬年といふは永久の時間と云ふことを假りに萬年と云ふたのであり、一念と云ふは吾人の心がチラリと動く一刹那の極めて短かい時間のことである、それを双方から掛け合せて萬年を一念に縮め、一念に萬年を具へる、即ち時間の長短を論すべき程度を超過したことで、俗に言へば考へる暇も思ふ隙間も無いといふのである、直截を知らんと要せば未だ舉せざる已前なるべし、直截といふは如何なる事件に出あふても、見るにつけ聞くにつけ、決して第二念に涉らず直にスラリと抜き打ちに截りするやうに、忽ち裁斷し得ることであるが、それも已に其の事件が現はれてからではモウ遅い、未だ舉せざる已前に早く已に其の處分を作し了らなければならぬぞ、とは云ふもの、且く道へ未だ舉せざる已前にはマダ何の事とも見えもせず聞えもせぬのに、それを何うして作麼生か摸索せん、其れが謂ゆる父母未生以前の機とも云へば、天地に先だちて萬象の主となるとも云ふのである、其れに就ては好い公案がある試みに舉す看よと本則を舉揚する。

本則 舉瀉山五峯雲巖同侍立百丈 君呵呵○終始語訛○百丈
問瀉山併却咽喉唇吻作麼生道 難一將求瀉山云却請和尚道

借路過丈云我不辭向汝道恐已後喪我兒孫 不免老婆心切○面皮厚
劫打

瀉山と五峰と雲巖と同一百丈に侍立す、潭州瀉山靈祐禪師のことは第二十四則の處で申して置いた、五峰のことは此次の本則で申すことにしやう、雲巖のことは又其次の本則に出て居る、百丈大智禪師のことは前の第二十六則にあつたが、更に第五十三則にも出て居る、偕この三人のうち瀉山と五峰とは二人とも百丈の法を嗣がれたのであるが、雲巖は後に藥山惟儼禪師の法を嗣がれるのであるけれども、此の時には百丈に隨身して居たこと、或時三人で師家百丈大智禪師のお側に立つて居た、圓悟が呵呵々と笑ふ、三人でボンヤリと老爺の側に立つて居るのが、子供がお菓子でも欲しさうにして居るやうであるぞ、老爺にもらはないでも自分等には自分等の物が有るのを知らないかと云ふやうなアンバイ、然し此の公案は終始語訛で、最初から終局まで中々入り組んで居る、なぜかと云ふに三人が三人皆それ〴〵方針が違つて居て、君は西秦に向へ、我は東魯に之くと云ふやうな調子であるからである、さて百丈老人の門下に對する慈悲心は一寸の間も打棄てゝは置かれぬに因て、直に其の三人の兄弟子である所の瀉山に向ふ咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん、獅子の親は千尺の斷崖から己れの子を蹴落して其の氣力を試みると云ふことであるが、今も亦た其の通りの勢ひで、口を閉ぢ舌を動かさず何とか一言を述べて見ると云ふのである、垂示に謂ゆる未だ舉せざる已前の消息を直截せんければならぬ場合である、一將は得難しサスガは馬

祖の嫡子として、黄檗や瀉山の嚴父たる百丈の如き大將は、古今の傑出であると圓悟が讃歎の聲を放った、瀉山は此の一撈を受けた端的いはゆる萬年一念一念萬年の時節、直に賊馬に騎つて賊を逐ふの機を以て却て請ふ和尚道へ、口を閉ぢ舌を動かさずと言ふて見ると仰せられるが、先づお手本に尊師が口を閉ぢ舌を動かさずと言ふて聞かせて下さいと逆振に問ひ返した、即ち快馬の一鞭で其の壯快さは限り無き奇觀である、圓悟は路を借て經過すと着語した、人に路を聞かせて置いて己れが自由に通る調子であるぞと云ふ、我が國の四百年ばかり前に之に能く似た話がある、其頃鎌倉の圓覺寺は中々禪風さかんなもので、多くの雲衲が坐禪辨道に怠りなかつたが、同じ相州のうちで小田原在の關本の最乗寺開山、了庵和尚の門風も亦た日の出の勢ひで、多くの雲衲が命がけの修行をして居る、然るに或時その最乗寺から鎌倉の圓覺寺へ使僧を遣らねばならない用事が出来た、此使僧は豈へば敵の陣中へ往く軍使も同様で、其の用事は用事として辨じ得たにしても、萬一にも宗旨の上の門答失敗を取つたとなつては實に最乗寺の耻辱になると云ふのであるから、餘程たしかな衲僧を擇んで使ひに遣らなければならぬと云ふ評議であつた、其時に了庵和尚の妹が出家して尼になつた慧春と云ふ女僧があつたが、自から進み出て其お使僧には私しを遣つて下されと兄の了庵和尚に申し出でた、和尚の門下には今日現在彼の最乗寺に於て道了大薩埵と祭られて、東京はじめ諸方に多くの講中信者を持て居る大天狗を始め、幾百人の衲僧達が頭を揃へて居るのに、斯かる使僧を柔弱なる比丘尼に任せると云ふことは一山の面目にも係はると云ふので、中々やかましい議論もあつたが了庵和尚は直に慧春尼の願を許してソレが宜からう其方が往けば決して失敗する氣遣ひが無いと

言はれた、さて慧春尼が愈々圓覺寺へ到着する、圓覺寺の方では多くの衲僧だちが禮を厚くし山門の前に整列して最乗寺の使僧を迎へられた、一同はドンな雄偉なる衲僧が来たかと思つて見れば、纖弱なる比丘尼であつたから、圓覺寺の方では甚だ不快に感じた、人を馬鹿にするも程のあつたものである、如何にも悪き最乗寺の仕打ぞと中には憤ふる者もあつたので、よし／＼大耻辱を與へて遣れと云ふので、其中の一人がグルリと前をまわつて如何はしき物を丸出しにぶらさげて、ヅカ／＼と慧春の前へ進み寄り「我が物長きこと三尺、汝以て如何と作す」と持ちかけた、これには慧春比丘尼も閉口するかと思ふたら、謂ゆる賊馬に騎て賊を逐ふの機で、慧春も亦たグルリと前をまわつて「我が物には底なし」と受けた、底なしと三尺では相談に成らない、遂に慧春は堂に上り方丈に進んで、愈々圓覺寺の和尚に謁見の拜も済んで座に就く、そこで圓覺寺の和尚は侍者に命じてお茶を進せると云ふ、時に侍者は洗足盥を持ち出してソレへ少しばかり土瓶の茶を注いで恭々しく慧春の前へ持つて来てお茶を召しあがれと云ふを、慧春は受取つて直に和尚の前へ持つて往つて「これは是れ堂頭和尚平常受用底のもの請ふ喫せよ」と云ふて差しつけたと云ふ、謂ゆる路を借て經過する機会、今の瀉山の働きと見たり難く弟たり難いでは無いか、其時に圓覺寺の和尚は之に對して何と云つたかは傳はつて居らぬが、百丈老人は直に瀉山に向つて、我れ汝に向つて道ふことを辭せず恐らく已後我が兒孫を喪はんと言はれた、これは果して咽喉唇吻を併却して言ふたと云ふものか、又は咽喉唇吻を開放して言ふたと云ふものか、汝に向つて道ふことは譯も無いが道ふならば法孫が絶えるであらうと云ふ、なぜであらうか咽喉唇吻に涉らざる底の言句を、思慮分別を以て計較すべきで

は無い、さりながら承陽大師が「言語道断と云ふは一切の言語なり心行虚滅と云ふは一切の心行なり」と言はれてある、コ、が参究一番を要する所であらう、圓悟は百丈を評して免かれず老婆心切なることをと云ひ、又面皮厚きこと三寸と抑へ、又和泥合水と冷かし、就身打劫と稱讚した、和泥合水と云ふは己れの醜態を忘れて兒孫の相手に成つて居る姿、就身打劫は前にも屢々あつたが拘兒が人の巾着を切り取るやうに、百丈と瀉山とは拘兒と拘兒との立合ひのやうで、父子とも油断のならない人だちであると云ふのである。

頌 却請和尚道 是傷鋒犯手 虎頭生角出荒草 不可驚 十洲

瀉山が師匠の抄問を逆振に逆浪滔天の機で却て請ふ和尚道へと言ふた一言を直に第一句に置いて、其の咽喉唇吻を閉却して道へと言ふた百丈の舌頭を坐断した機合と云ふものは、譬へて言はゞ虎頭に角を生じて荒草を出づ左なきだに威風凛々たる猛虎が頭に角を捧げて莽々たる荒草の中から一聲高く吼えて飛び出したやうな勢ひぞと稱揚した、着語に函蓋乾坤と瀉山の活機を褒め、然りながら却て請ふ和尚道へと言ふたとけハヤ己に之れ鋒を傷り手を犯したと云ふものぞと抑へて、益々那一着の高尙なることを知らしめ、けれども彼の猛虎が角を生じて荒草を出で來つた有様には、可煞群を驚かす、誰でも喫驚するであらうぞと譬し、更に妨けず奇特なることをと重々の稱揚である、これで本則の頌は済んだのであるが、更に雪竇は

例の文才を弄して十洲春盡きて花凋落、人間世界の花の開落は申すまでも無い十洲と云ふは仙境であると云ふことで、人間界とは大に風光が違ふであらうけれども、それでもヤハリ咲いた花は散るに因て、人間界と大同小異である、これは如何なる言句でも伎倆でも凡夫の情識で彼れの此れのと考へたことに價値の無い申すまでも無い、縦ひ大悟徹底の衲僧であるとか見性明心の上の働らきであるなど、云ふても、己に咽喉唇吻に涉り運爲動作に現はれた言句伎倆は皆悉く本分の地から見れば、第二第三に落在したことである、尙ほ十洲と云ふことは、一に祖洲は返魂香を出だし、二に瀛洲は芝草を出だし、三に玄洲は仙薬を出だし、四に長洲は木瓜玉英を出だし、五に炎洲は火浣布を出だし、六に元洲は靈泉を出だし、七に生洲は山川ありて寒暑なし、八に鳳麟洲は鳳呀麟角を取て續絃膠を煎じ、九に聚窟洲は獅子銅頭鐵額の獸を出だし、十に檀洲は瓊吾石を出し、劍を作て玉を切るに玉も泥の如しとある、これは支那の古人が人間以外の仙境を想像した話であるのを持ち來りて、言句伎倆の眞價なきことを花に譬へて言ひあらはしたのである、着語に觸處清涼とあるは十洲の花の散り盡したやうに、都べての知解分別も言句伎倆も皆超越した處の境界は、如何に清らかに涼しいであらうぞと言ふたのである、讚歎するに及ばず何とも言ふて見やうがない、然らば其の春の盡きると云ふことも無く花の凋殘すると云ふことも無い、常住不滅の風光は如何なるものであらうぞと云ふに、珊瑚樹林日杲々、彼の底干しられぬ大海に生ずると云ふ珊瑚の林の美しくさ、其れに朝日の光が輝やきわたつた風光と云ふものは、春の盡くると云ふ憂ひも無ければ花の凋殘すると云ふことも無い、即ち未だ舉せざる已前の消息はコ、に在る、圓悟は其の風光を弄して千重百匝、その

美しくさに限りは無いと云ひ、これは到底百草頭上に他を尋ねるも得ざるを争奈せん、知解分別の間に模索することは出来ぬぞと云ふ、コレ皆瀉山の答處の蓋天盖地他の獨得の妙處を稱したのであるぞと云ふのである。

第七十一則 百丈併却咽喉

本則 舉百丈復問五峰併却咽喉唇吻作麼生道阿呵阿呵 箭峰云和尚也須併却擡旗奪鼓 丈云無人處斫額望汝士

人稀相違者少

百丈復た五峰に問ふ筠州五峰の常觀禪師は瀉山の法弟で、同じく百丈の法を嗣いだ人である、咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん、これは前の瀉山に問ふた後に又別に斯う同じことを五峰にも問ふたのでは無い、其實は侍立して居た三人に向つて一同に問はれたのであるけれども、其の答が三人三色で、而も其れに階段があるに因て、雪竇が之を三則に分けて別々に頌を作られたのである、着語に阿呵々と笑ふ、百丈老人がまだ其の様なことを問ふて御座るか笑止なことよ、箭新羅を過ぐ何時の昔に話は濟んだに、今更其のやうなことを問ふても落處は知れまいと云ふ、峰云く和尚也た須からく併却すべし、人に向つて口を開

かず物を言ふて見ろなど、言ふ、其口を御自分にお塞ぎなされと逆振を喰はせた、前の瀉山と同工異曲であるが、瀉山の答は壁立萬仞と云ひながらも、却て請ふ和尚道へと云ふ調子に、多少寛和の所もあるが、此の五峰の答は和尚黙れと怒鳴りつけた氣味で、甚だ緊急である、そこで着語にも旗を擡き鼓を奪ふと云ひ、又一句截流萬機寢削と云ふてある、只一言に宇宙萬象を泯滅してしまふた、そこで丈云く人なき處に斫額して汝を望まん、餘りに遠く萬里無人の境に走り過ぎてしまふて見えなくなつたぞ、斫額と云ふは額に手をかざして遠方を望んで見る姿、此れは百丈が五峰を揚げたのか抑へたのか、評唱には只他に一點を與へたのであると云ふてある、着語には士曠人稀にして相逢ふ者少し、何うも此れには相手になり手がなからうと云ふ。

頌 和尚也併却巴在言前了 龍蛇陣上看謀略須是金牙始解 人長憶李將軍妙手無多子 萬里天邊飛一鶚大衆見麼

打云飛過去也

例の如く五峰の答話を其儘に第一句に置いた、即ち和尚也併却せよ、着語に、已に言前に在り了る、只此の一句すなはち和尚お黙りなされと云ふた一言の立ち場は、實に百丈がまだ咽喉唇吻を併却して作麼生か道へと言はぬ以前の處に地歩を占めて居るぞとの稱讃である、それ故に此の一言で衆流を截斷して萬事

休することを得るのであると更に褒めた、偕て其の五峰の衆流を截断する活機は、龍蛇陣上に謀略を看るが如くである、龍蛇の陣と云ふことは、武備志には東方は青龍の獸なり龍陣と曰ふ、西方は白虎の獸なり虎陣と曰ふ、南方は朱雀の獸なり鳥陣と曰ふ、北方は玄武の獸なり蛇陣と曰ふとあり、又諸葛孔明の八陣の圖には、天と地と風と雲と飛龍と翔鳥と虎翼と蛇蟠とを八勢と曰ふとある、又孫子には常山の蛇と云ふことがあつて、其首を撃てば則ち尾至り、其尾を撃てば則ち首至る、其中を撃てば則ち首尾俱に至るとある、今五峰が百丈の言下に間に髪を容れず、壁立萬仞の勢ひで和尚お黙りなされと怒鳴りつけたアンバイ、實に神出鬼没自由自在なものよとの稱讃である、着語に須らく是れ金牙にして始て解すべし、金牙と云ふは金色の牙旗といふことで、我が國の錦の御旗と同じく天子の旗幟のことであると云ふが、他の古寫本には此着語を金毛の獅子にして始めて得べしと書いたのもあるのを見れば、金牙は即ち獅子のことであるとも見られる、いづれにしても、意味は辨するまでも無からう、七事隨身とは前にもあつたが、戦争の七つ道具が揃つて居ると云ふことである、又慣戰の作家と云ふ、重々の稱讃ぢや、人をして長く李將軍を憶はしむ、李將軍と云ふは漢の李廣のこと、前の第四則の頌に飛騎將軍とあつた弓の名人である、着語に好手多子なし、今此の五峰の如き衲僧は、李將軍の弓術と同じく古今に多くは得難いと褒め、又匹馬單鎗まことに勇將の風采が見えるぞと云ひ、更に千里萬里何處を尋ねても、千人萬人の中を幾ら探してもと限りなく褒めあげる、評唱の中には圓悟が自から山僧只管に五峰を讃歎して、渾身泥水に入り了るを覺えずと言ふて居る、實に圓悟が是の如く徹頭徹尾古人を讃歎し盡したのは珍らしい、萬里の天邊に一鷲を飛ばす、彼

の百丈が咽喉唇吻を併却して作麼生が道へと挨拶したのは、譬へば萬里の天邊茫茫として涯際なき處へ、一羽の鷲、すなはちさなきだに飛ぶことの疾い鷹のやうな鳥を放つたやうなもので、到底これを一矢に射おとすと云ふことの出来べきわけのものでは無いのであるが、李將軍の妙技にも齊しき五峰であればこそ、其れを一矢にハツシと射とめて、サスガの飛鷲もモウ羽翼を働かせることが出来なくなつた、圓悟は大衆見るや、何うちや五峰の矢先が見えたかと門下を警醒し、更に且く道へ什麼の處にか落在す、五峰が射おとしたる所の鷲は何處へ往つた、結局の公案の落着如何と吾人に參究せしめられるのである、中れりとは圓悟が五峰の矢先をたしかに見とめた様子、打て、云く飛び過ぎ去れりイヤ何處かへ往つてしまふたワイト、従上の痕跡を都べて打ち消してしまはれた。

第七十二則 百丈問雲巖

本則 舉百丈又問雲巖。併却咽喉唇吻。作麼生道。

巖云。和尚有也未。

百丈又雲巖に問ふ咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん、潭州雲巖の曇晟禪師は、初め百丈に隨待して二十年の久しき間參禪辨道せられたけれども、終に大悟徹底と云ふ所にまで到り得ず、其うちに百丈は遷化されたに依て、今度は藥山惟儼禪師の處へ往かれた、然るに藥山に二十年百丈に在つて習氣だも也た未だ除

かすと叱られて、更に南泉の處へ往つたけれどもヤハリ其機かなはず、再び樂山の處へ歸つた後に始めて方に契悟すと傳に見えるから、實に久しい間、斯の道のために慘憺たる苦辛を経られたことゝ見える、今此の本則の問答は、即ち百丈の處に居た時の事であるから、到底瀉山や五峰と同格には働けないは勿論のことである、それ故に圓悟は、蝦蟇窟裡より出で來ると冷かし、又什麼と道ふぞ、何うせ活機のある答は出來まいと豫じめ抑へた、巖云く有りや也た未しやこれを通俗に言ひ換えて見れば、和尚がソウ仰せられるのは、それは咽喉唇吻を併却して道はれたので有りませうかと反問したので、百丈の語下に死在してしまふた、更に言ひ換えれば百丈の言葉の上に超脱することが出來なかつたのである、最初の瀉山は和尚御自分に分言ふて見なされと云ひ、五峰は和尚だまれと云ひ、いづれも百丈の語を踏翻して居るが、雲巖は和尚の其の語が即ち咽喉唇吻を併却したのでありますかと云ふのであつて見れば、何うも前の二人のやうな働きは見えない、雲巖も、後の第八十九則に於て通身是れ手眼と言はれた調子になつてからであつたならば、サスガは洞山禪師であると云ふ眞價が見えるのであるけれども、此時には未だしであつた、是非も無い次第である、着語に皮に粘し骨に着く、ベタベタして料理が出來ない、拖泥帶水で女乞食が夕立雨にあふたやうなイヤハヤ見られたものではない、前は村に構せず後は店に迷せずドツチつかずの煮え切れない言ひやうぞと都べて抑へた、文云く我が兒孫を喪ふ、ア、なさけ無い其のやうなことを言ふて居るやうではと、百丈は深く雲巖を感みての警誡である、着語に灼然として此の答へ得て半前半後なるあり、コレは前に百丈が瀉山に答へた時には、汝に向つて道ふことを辭せず、恐くは以後我が兒孫を喪はんと言はれてあ

つたが、其れを今度は前半を言はずに只後半の我が兒孫を喪ふとばかり言はれたのは、全く百丈が雲巖を肯はない故であると云ふのである。

頌 和尚有也未 逐浪 金毛獅子不踞地 灼然 兩 可憐許
兩三三舊路行 併却咽喉唇吻 大雄山下空彈指 不

○可悲可痛○若
天中更添三總一苦

和尚有りや也た未だしやと、雲巖の語を其儘第一句に置いたことは、前則および前々則と同例であるけれども、前の如くに愛嘗して提出したのでは無い、圓悟は公案現成イヤハヤこれが雲巖の公案現成すなはち悟りの當體かと冷かし、更に隨波逐浪と言ふ、コレは雲門大師に隨波逐浪の句と云ふことがあるが、それとは違ふて雲巖の答が百丈の語に着き廻つて居るのを抑へたのである、又和泥合水と雲巖の繞路に過ぎるのを叱る、金毛の獅子踞地せず、雲巖も其實は金毛の獅子であるけれども、踞地はせぬに依つて猫も同様である、踞地といふは、猫などでも鼠を捕ふと云ふやうな時に、身をすくめて地にヒタリと踞はる、虎でも獅子でも踞地せんければ其の威力を現はすことは出來ぬ、着語に灼然と云ひ、什麼の用處か有らんと云ひ、可惜許と云ふ、皆雲巖の脱灑ならぬ所を抑へたのである、コレは昔の雲巖當時のこととは見て居れぬ、吾人お互ひ誰か金毛の獅子ならざる、然りながら如何にして踞地し、如何にして猛威を振はうぞ、人々各

自に脚下を照顧せねばなるまい、兩々三々舊路に行く。天下古今多くは是れ此の仲間ぞと雪竇が歎息の聲を漏らした、そこで圓悟が咽喉唇吻を併却して作跟生道はんと、舊公案を新たに門下後學への抄問である、吾人お互ひは何とか之に答へて見ねばなるまい、身を轉じ氣を吐けと奨勵して更に脚蹉下に蹉過了也と警醒せられた、大雄山下空しく彈指す、大雄山と云ふは即ち百丈山のことで、大智懷海禪師所在の地である、空しく彈指と云ふことに就いては二説ある、一は雲巖が二十年の久い間百丈の提撕を受けたけれども何うも悟りが開けなかつたので、百丈が齒がゆがつて屢々瓜彈きせられたと云ふ説と、又一説は雲巖みづから何時まで百丈に隨學して居ても大事を究明することが出来ないのを残念がり、悵然として彈指して山を下つたと云ふ説である、いづれにしても百丈山に於ての二十年は只其の準備の時間であつたと見える、後に藥山の處に於て立派に開悟傳法が出来て、洞山大師の如き傑出の弟子を打出するに至つたも、皆彼の二十年辛苦の功果であらう、何事も時機の熟するまで怠たらすに忍耐精進するのが肝要である、着語に、死更に再活せず百丈が如何ほど彈指して警誡しても殆ど死馬に鞭打つやうなものであつた、悲しむべし痛むべしと云ひ、又蒼天中に更に怨苦を添ふ、コレ等の着語は無くもがなと思はれる。

第七十三則 馬大師四句百非

垂示 夫說法者無說無示。其聽法者無聞無得。說既無說

無示。爭如不說。聽既無聞。無得爭如不聽。而無說又無聽。却較些子。只如今諸人。聽山僧在這裏說。作麼生免得此過。具透關眼者。試舉看。

夫れ説法といふは無說無示なり、通常に説法と云へば言葉を以て道理を説き明かすことのみ思ふて居るのであるが、佛敎では其の口で法を説き示すのを口業説法と謂ひ、又身の行ひを以て法を實現させるのを身業説法と謂ひ、意に考へ思を運び一切衆生に慈悲を蒙らせるのを意業説法と謂ふ、然しながらソレは皆一切衆生は迷ひの凡夫であるに因て、其の迷ひを除き悟りを開かせて三世の諸佛と同じ境界に到らせやうと云ふが爲めにこそ、都べての説法度生と云ふこともあるのであるが、それは全たく宇宙萬象を迷ひと悟りとの二つに見た上のことであるから、一味平等無差別なる本體の上のことでは無い、若し夫れ之を本體の上すなはち謂ゆる本地の風光とも本來の面目とも云ふ所から見るときには、除くべき迷ひも無ければ證すべき悟りも無い、本より佛だの凡夫だのと云ふ差別のあるべきでは無いに依て、救ふと云ふことも無ければ救はれると云ふことも無い、それが眞實の法の本體の現はれた姿であるから、説くべき法も無ければ示すべき法も無い、それが即ち眞實の説法であるぞと云ふのである、已に是れ無說無示の法であるに因て其の聽法と云ふも無聞無得である、法は耳にばかり聞くものでは無い、眼にも聞き鼻にも聞き乃至意識に

も聞く、其れもハヤ第二第三に落ちたことで、其の實は花は咲くに任せ紅葉は散るに任せ、月は照るに任せ風は吹くに任せる、それが即ち眞實の聞法である、本統の得法である、然らば則ち説と云ふも既に無説無示であるならば争でか不説に如かん、聽と云ふも既に無聞無得であるならば争でか不聽に如かん、元來説だの聽だのと云ふ言葉さへも要らぬでは無いか、而も其の無説又は無聽と云ふさへ却て些子に較れり、比較的幾分の眞實に近いと云ふまでのことで、未だ十分の本統のこととは許されないのである、然るに只如今諸人は山僧圓悟が這裏に在て是の如くに法を説くを聽く、若しも諸人が此の圓悟の説法を説法として聞き、己れの耳に聽聞として聽聞するやうなことで有つたならば、其の眞實の法體に背くの罪過は輕からぬことになる、作麼生か此の過を免がれ得ん到底免かるゝ道は無からうぞ、さりながら若し能く透關の眼を具して居る者であつたならば、次に擧ぐる所の本則に於ては眞に承當することを得て、忽ち其の罪過を免がるゝことが出来るであらう、とにかく試みに擧す看よとの垂示である。

本則 擧僧問馬大師離四句絕百非請師直指某甲西來意○什麼處得這話頭來馬師云我今日勞倦不能爲汝說問取智藏去○影○不○妨○是○這○老○漢○推○過○與○別○人僧問智藏○也○須○與○他○一○樣○患○這○般○病○痛云何不問和尚○草裏焦尾大蟲出來也○道什麼僧云和尚教來問○直得草繩白練○去死十分○受三人處分○前藏

云。我今日頭痛不能爲汝說問取海兄去○不○妨○是○八○十○四○員○善○知○僧問海兄○轉○與○別○人海云我到這裏却不會○不○用○初○初○從教僧舉似馬大師○這僧却有馬師云藏頭白海頭黑○實中外將軍令

僧あり馬大師に問ふ、馬大師と云ふは江西馬祖山の道一禪師のことで、最初第三則の處で申して置いた通りの祖師である、四句を離れ百非を絶して請ふ師某甲に西來意を直指したまへ、佛の説法八萬四千の法門と稱し、其の聖典を五千四十八卷と數へ、大乘だの小乗だの、顯教だの密教だの、聖道門だの淨土門だのと、色々むづかしく言ふけれども、詰まる所は四句百非の外には出でぬと云ふ説もある、四句と云ふは有と無と亦有亦無と非有非無との四つである、これは佛教には限らぬことであつて、凡そ世の中の都べての道理を研究するには、皆この四つの中の孰れか一つ、又は其の中の幾つかに就て彼れの此れのと云ふて居るのである、例へば此に靈魂と云ふものが有ると認めるのが第一の有句、又それと反對に無いと思ふのが第二の無句更に亦有亦無で或は有ることもあり亦た無いこともあると云ふのが第三句、又それと違ふて有でも無ければ無でも無いと有無の二つを俱に否定してしまふのが第四句である、偕て又百非と云ふは此の四句に各々互ひに四句を具するとすれば十六になる、其の十六を過去と現在と未來との三世に配當すれば四十八になる、更に其れを已起と未起とに約して九十六になる、其れに根本の四句を加へて百非と作すと

云ふのが普通の數へかたで、要する所は世間または出世間のすべての理論言説を、四句百非と云ふ一言に約したのであるから、今此の馬大師に問うた僧の意は、都べての理論も言説も離れて而して拙者に西來意を直指して下されと云ふのである、西來意と云ふことは前にも屢々あつたが、達磨大師が西域の印度から何しに支那へ來られたのであるか、其の意思を聞きたいと云ふのである、直指とは讀んで字の如く、迂曲遠廻を離れて率直に指示してほしいと云ふのである、着語に什麼の處よりか、這の話頭を得來る、此の僧が馬大師に向つて四句百非を離れてと云ふ問ひであるが、已れの先づ四句百非を離れたならば何うして此の様な問を發せられやうぞ、誠に怪しい奴であるぞと答めた、又那裏よりか、這の消息を得たる、コレは前の着語と同じことを語を換えたまでのことであるから、例の後人が註解的に書き入れたのであらう、偕てかやうな問題を常に五時だの八教だの、觀念だの觀法だのとばかり言ふて居る教家の人に向つて發したならば、幾んど答へやうの無いことであらうが、馬大師は平氣なもので、我今日勞倦汝が爲めに説くこと能はず智藏に問取し去れ老僧は今日大きに疲れて居てナ貴様に説いて聞かせることが出來ないから、あの智藏に問ふが好いぞと言はれた、これが即ち無説無示の說法である、若しも此の僧が已に透關の眼を具したる無聞無得の人であつたならば、此時直に禮拜感謝して大事了畢すべきであるが、遺憾ながらソウは往かなかつた、圓悟は退身三步、此の答にあづかつては後退りするより外は無いぞと云ふ、一體に此の答は身を藏して影を露はして居る、ナゼかと云ふに言葉の上では答が出來ないと言ひながら、其實はコレが即ち四句を離れ百非を絶して西來意を直指せられたのである、妨げず是れ這の老漢別人に推過し與ふることを、然し此

の他人に讓つて逃げたやうな言ひかたをした作略は、サスガに老練なものであると褒めた、然るに圓悟は更に評唱の中に於て、若し山僧が馬祖であつたならば此時に直に一棒を此僧に食はせるのであつたと言ふてあるが、近代の天桂老人はソレを評して一棒を食はせるなどと云ふことは禪宗くさい匂ひがして却つて面白くない、それよりヤハリ馬祖の答へすして答へた方に妙味があると言はれた、然るに此僧は正直に智藏に問ふた智藏と云ふは虔州西堂の智藏禪師と申して、百丈と同じく馬祖道一禪師の法嗣である、此の僧まことに正直は正直であるが、宗眼は全く盲して居る、馬祖が智藏に問へと言ふたからと云ふて、智藏の處へ問ひに往くと云ふならば、若しも馬祖が其時に天邊の月に問へとも、又は門前の馬の糞に問へとも言ふたならば何うするつもりであるぞ、千萬里の長空を凌いで月宮殿へ往くつもりであるか、又は門前の馬糞を禮拜してお問ひ申しあげるつもりであるか、都べて語路を逐ひ語脈裡に轉ぜられて、自から轉身の處を知らないと言ふのは皆此やうなものである、故に着語にも也、た、須、く、他、に、一、撈、を、與、ふ、べ、か、り、し、に、と云ふてある、若しも此僧が作家の漢であつたならば、馬祖が智藏に問へと言ふた時に直に馬祖に向て一撈を與ふべきであるに、オメ、と智藏の處へ問ひに往くとは何事ぞ、蹉、過、す、る、も、也、た、知、ら、ず、モ、ウ、疾、に、失、敗、し、て、居、る、と云ふことも未だ分らぬかと叱つた、藏、云、く、何、ぞ、和、尚、に、問、は、さ、る、其、の、様、な、こ、と、を、拙、僧、に、問、は、な、い、でも和尚すなはち馬大師に問ふたら好からうにと、一旦ヒラリと身をかはした其の轉身の機の鋭どさを圓悟は、草裡より焦尾の大蟲が出て來たやうであると着語した、智藏は繞路に答へるかと思ふたに、何ぞ圖らん草莽々たる處からガサ、と虎が飛び出したやうなアンバイで、人を喫驚させるぞと褒め、又什麼と

道ふぞと其語に響きあることを表明し、直に得たり草繩自縛することをと、此の僧が身分不相當なる問題を出して、到る處に失敗してあるくのを抑へ、更に去死十分モウ死に切つて居ると罵つた、風外老人は此の二つの着語を、次の僧云の下に置くが好いと云はれてある、僧云く和尚教へ來りて問はしむイヤ和尚のお差圖で貴僧に問へと仰せられたのであります、どこまでも正直は正直であるが愈々出で、愈々盲目ぢや、圓悟は人の處分を受くと云ひ、又前、箭は猶ほ軽く、後、箭は深しと云ふ此の僧少しも自家の見處が無くて諸方を問ひ廻つて居るが、前に大師の處で受けた疵はまだ浅かつたが、今度智藏の處で愈々大負傷になつたぞと云ふのである、藏云く我今日頭痛す汝が爲めに説くこと能はず海兄に問取せよ、いかに親子とは言ひながら斯うも親の馬大師と同軌を履むも亦た不思議では無いか、親は勞倦したと云ひ子は頭痛がすると云ふ、親は子に問へと云へ、弟は兄に問へと云ふ、圓悟は、妨げず是れ八十四員、善知識一様に這般の病痛を患ふることを云ふ、馬祖の法嗣は八十四人ある、皆悉く同じ本師の印可を受けたのであるから、同じ遺傳症に罹つて居るに相違ない、僧は海兄に問ふ、海と云ふは即ち前則の主人公たる百丈懷海禪師のことである、着語に、別人に轉與すとあるは、前の海兄に問取せよと云ふ下に置いて見れば能く分る、臟を抱いて、屈と叫ぶと云ふは、現に盗んだ品を持つて居ながら我が盗んだのでは無いと言ふて居ること、即ち此僧が自から好んで辱を買つてあるくのを抑へたのである、海云く我這裏に到りて却て不會イヤ其の事ならば我には分らぬと些の氣力をも費さずに灑々落落々、四句百非を離れたる西來意を答へ了つた、此の只不會の二字、釋迦は曾つて不可思議と説き、達磨は嚮に不識と言ふた、圓悟が、切々を用ひすと云

ふ、餘計な言葉を費さぬと云ふことである、從教あれ、千古萬古、黒漫々たるを、到底此の不會の端的は何時の世になつても分らぬも儘よ、偈て此僧誰の處へ往つても遂に要領を得ず、元へ戻つて馬大師に舉似す、子供が物を買ひに往て處々方々探して見ても、遂に其品が見あたらずに宅へ歸つて何處にも有りませんと言ふたやうなアンバイ、其れを圓悟が冷かして、這の僧却て些子の眼睛ありと云ふ、モウ一度馬大師の直指を受けやうと思ふたのが感心であると云ふのである、然るに馬師云く藏頭は白く海頭は黒しとコレが終局の裁判ぢや、これは到底理論言詮を以て彼れの此れのと分別すべきでは無い、即ち謂ゆる無説の説をも超過した以上の消息である、まして況んや四句の百非の、離れるの絶するのと云ふ沙汰の話では無い、けれども強いて他の語を以て極めて通俗に翻譯すれば、柳は緑花は紅と云ふやうな姿にも見え、山は高く水は長しと云ふやうな調子にも聞える、圓悟は之を評して、寰中は天子の勅、塞外は將軍の令、さすがに天子には天子の詔勅があり將軍には將軍の號令があり、誰ありて之に違背することの出来ない如く、此の馬大師の判決には、佛祖も天魔も皆俱に服從せねばなるまいぞと云ふのである。

頌 藏頭白海頭黒 半合半開 一手撮 金聲玉振 明眼衲僧會不得 更行脚三十年

却偏鼻孔 山僧 馬駒踏殺天下人 叢林中也 須是這老漢 臨濟未是白拈 故是口似 離四句絶百非 道什麼也 須是自點 天上人間 賊 手也 被捉了也

唯我知

若^レ無^レ人^{無^レ我^{無^レ得^レ無^レ失^{將^レ何^レ麼^一}}知^或}

藏頭白海頭黒と例の如くに本則の眼目を抜き上げてきて第一句に置いた、着語に半合半開と云ふ、半分白くて半分黒いと云ふのでは合とも開とも名けやうがない、即ち四句百非を離れた姿ぞ、一手は擡げ一手は擲む馬大師が智藏と懷海とを兩手に携へて孰れを揚げたでも無く孰れを抑へたでも無い、鶴は長いままに鴨は短いまゝに各自獨尊ぞ、金聲玉振これは此の馬祖の語に出格の響あるを讃歎したのであるが、イツそ無くもがなと思はれる、明眼の偏僧も會不得この藏頭白海頭黒と云ふ一語の眞意は如何なる作家の漢でも會することは出来ぬ、其の實は元來會不會を超越したる消息であるからである、着語に更に行脚せよ三十年其の會不得底の道理を會せんと要せば、更に三十年の參究を經歷せよと云ふ、さもなくば何時でも終に是れ人に偏が鼻孔を穿却せられて失敗ばかりするであらうぞ、山僧故に是れ口區擔に似たり我圓悟も此に至りては口が開けぬ、イヤ誰でも口は開けまいぞ、馬駒踏殺す天下の人、馬駒と云ふは即ち馬祖のことであるが、此れは馬祖の祖父たる曹溪の慧能禪師が會て馬祖の父たる南嶽懷讓禪師に向つて、向後佛法汝が邊より去らん、已後一駒を出して天下人を踏殺せんと豫言せられたことがあるが、今日果して一馬駒が藏頭白海頭黒の一句を以て、天下古今の人天佛魔を一時に踏殺してしまふたぞとの讃歎である、着語に叢林の中また須く是れ這の老漢にして始めて得べし、叢林と云ふは山林と云ふも同じことであるが今は禪宗の大善知識が多くの衲僧を接化して居る處の代名詞になつて居る、偕て其の到る處の叢林に多くの高僧名師

も居られる中に、是の如き活機は馬祖一人特得であるとの讃歎ぢや、又這の老漢を放出す、雪竇の此の一句が馬祖を共儘こゝへ突き出したやうに見えること云ふのである、臨濟も未だ是れ白拈賊にあらす白拈賊といふは眞畫中に平氣で人の物を盗んであるく盜賊のことであるが、雪竇和尚が臨濟大師のことを白拈賊であると云ふて讃歎したことがあるけれども、今此の馬祖が天下人を踏殺する活機に比べて見れば、とても臨濟が未だ白拈賊の本職とは言はれない、馬祖のやうにあつてこそ眞の白拈賊といふものであると重々の讃歎ぢや、我が國の大智祖繼禪師は釋尊のことを嬰臺白拈賊と言ふたことがある、禪語には往々是の如き罵倒の言句を以て佛祖を歎美する所あるを、初心の人は誤解しないやうにせんければならぬ、着語に癡兒伴を牽く馬祖の引合に臨濟を出したは癡病人の道づれで能く似合ふぞとほめる、直僞好手も也た人に捉へ了らるこれは雪竇が臨濟を馬祖に劣ると言ふたのを評したので、雪竇に逢つては臨濟も男ぶりを下げたと云ふのである、四句を離れ百非を絶すと彼の僧の問話を擧げて、それは天上人間唯我知を決して他人に問ふて知れることでは無いと云ふ、前句の着語に什麼と道ふぞ四句だの百非だのと佛法くさいことを言はぬが好いぞと咎めた、也た須く是れ自から點檢して看るべし、これは人々各自に冷煖自知すべき所であるぞ、阿爺は阿爹に似たり元來諸法の實相は四句を離れ百非を絶したもので、山は自ら高くして山の如く水は自から流れて水に似たもので、承陽大師は鳥飛で鳥の如く魚行て魚の如しとも言はれてある、又後の句の着語に我を用ひて什麼か作さんは此れは雪竇が唯我知を言ふけれども、其の我と云ふものには用は無いぞ、一體に何も知るべきものは無いではないかと、一層高く本分を示したのである、拄杖子を奪却せん若

しも唯我知と云ふやうなことに住着して居るやうなことであるならば、拄杖子を携へて人の師となる資格は無いに依て、其の拄杖子を取りあげてしまふぞと云ふ、或は若し人も無く我も無く得も無く失も無くんば、什麼を將てか知らん、已に是れ四句を離れ百非を絶したる妙境、本より人我も得失も無いのであるに、何の我とか知るとかの沙汰があらうぞ、愈々益々本地の風光を現はしたのである。

第七十四則 金牛和尚呵呵笑

垂示 鑊鉞横按鋒前剪斷葛藤窠。明鏡高懸句中引出毘盧印。田地穩密處着衣喫飯神通遊戲處。如何湊泊還委悉麼。看取下文。

鑊鉞を横に按じて鋒前に葛藤窠を剪斷す、これは宗師の機鋒甚だ峻峻にして、人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る、四方八面寄り附けない銳利の勢ひを以て、參學の徒を接化する様子を言ふ、日本では正宗の寶劍といふのが銳利の代表であるが、支那では直に干將莫耶と謂ふ、葛藤といへば左なきだに樹木に纏はつて遂に根幹を枯らすものであるに、今は窠の字が附いて葛藤の穴の中へ陥入たやうに、知解分別の窠窟に陥入て、佛だの法だの禪だの悟だのと迂路つき廻るのを、一言半句の下に豁然として本地の風光に接

しさせる手際は、尋常容易の作略の能くする所では無い、明鏡高く懸けて句中に毘盧印を引出す、これも前と同じやうなことを言葉を変えて對句に言ふたものではあるが、強て差別を附けて言へば、前の鑊鉞の話は利他の方便を明かしたので、此の明鏡の方は作家の宗師たる人の自己の見地の明白なる様子を謂ふのである、乃ち其の慧眼を以て一切を照らすことは明鏡を高く懸けて、漢來れば漢現じ胡來れば胡現じ、花が映れば花のまゝに、紅葉が映れば紅葉のまゝに、巍々たる山岳も渺々たる海洋もアリ／＼と優に方寸の鏡面にも入れ、肉眼には見えぬ細かい物でも、照徹して洩らす所のない如くに、宇宙萬象を歴々分明に諦観洞視するのであるから、句中に毘盧の印を引出す、即ち一言半句の間に十方法界の一切諸法を悉く道盡する、毘盧といふは毘盧舍那といふ梵語を略したので、毘盧舍那を漢譯すれば遍一切處と曰ひ、謂ゆる無限の空間に滿ち塞がつて居るといふ意味、之に人格を附し尊稱を加へた時には大日如來とも謂ひ、又は久遠實成の釋迦牟尼佛とも法性法身の阿彌陀佛とも、又は盡十方無碍光佛だの不可思議光如來だのとも名け、基督教などでゴツドとかエホバとか見て居るのも、孔子などが上帝だの上天だのと云ふたのも皆其の光明即ち其の働きを色々の方角から望んで見たまでの事であらう、今は其の毘盧の印とある印は印信とか印證とか印可とか續いて、事を確かに證據だてる意味である、故に或は佛印と云ふたり心印と云ふたりするものも、皆其の本意を確かに證明する意味である、即ち今は毘盧舍那如來の本意を確かに證明するのであるから、それを引出すと云へば宇宙萬象の本體たる絶對不可思議の大光明を輝やかして、普ねく十方法界を照すと云ふことになる、吾々お互ひの本心本性みな悉く此の大作用を具足して居るのであるから、人々各

自自由に發展し得るやうにせなければならぬのである、已にモハヤ其う成り得たる人であれば、田地穩密の處に着衣喫飯するのである、田地といふは即ち人々本分の立ち場、其の立ち場即ち立脚の地が穩密縮密で、些の風塵もなき泰平無事であれば、着衣喫飯即ち朝な夕な起居動作すべて平穩快樂の境界に安住するのである、偕又其の無事安穩の人が世に處し人を接する方法手段に至りては、往々に凡情を以て測り知ることの出来ない事蹟が現はれる、それを名けて今は神通遊戯の處と謂ふ、サア其の神通遊戯の接化に遇ふ場合に至りては、如何か湊泊せん、尋常容易なことでは寄り附くことは出来ぬぞ還て委悉すや何うぢやソコが能く合點が往くかな、それに就ては下文を取らせよ此の本則に參究するが好いと云ふ。

本則 擧金牛和尚每至齋時自將飯桶於僧堂前作舞呵

呵大笑云菩薩子喫飯來竿頭絲線從君弄不犯清波意自殊○醍醐毒藥一時羅列○爭奈相逢

雪竇云雖然如此金牛不是好心是誠識賊○是精識精○僧問

長慶古人道菩薩子喫飯來意旨如何不防疑着○元來不知○慶

云大似因齋慶讚相席打令○

金牛和尚と云ふは、前則の主人公たる馬大師の法嗣八十四員の一人で、鎮州の人であると云ふことである、齋時に至る毎に自ら飯桶を將て僧堂前に於て舞を作し呵々大笑して菩薩子喫飯し來れと言ふた、傳燈

錄の本傳に據て見れば、金牛和尚自から飯を作りて衆僧を供養すと云ふてある、さうして見れば此の和尚は自分の弟子たる衆僧を養ふ所の飯を人手にかけず、自分手づから之を炊いで齋時すなはち日中の御飯時になれば飯櫃を將て衆僧の修行して居る堂の前へ往つて舞を作して呵々大笑すとあるから、踊りをおどりに愉快そうにデラ／＼笑つたものと見える、さうして一同の衆僧に向つて菩薩子喫飯し來れ、サア／＼菩薩だち御飯を召しあがれと云ふのが、一度や二度や三日や四日のことでは無い二十年の長い間、毎日かならず其の通りに行つたと云ふのである、これは一體に何のためで有らうか、禪林の都べての規則は、此の人の法兄たる百丈和尚が始めて定めたのであるから、此時には未だ食時の作法なども確定しては居なかつたであらうけれども、いづれ多くの衆僧の集まつて居る處では、鐘を撞くとか太鼓を鳴らすとか拍子木を打つとかソレ／＼の方法があるべきはづであるに、殊更に舞を作して呵々大笑すると云ふやうなことは、謂ゆる金牛の神通遊戯で、此れが、即ち毘盧の心印を引出する方法手段である、然るに碌々たる多数の頭顱が毎日／＼此の神通遊戯を看過して、湊泊し得る者が無かつたものと見える、實に眞實の知音は千古にも得がたきものぞ、圓悟は竿頭の絲線君が弄するに従つ清波を犯さず意おのづから殊なり、と歎した、實に是れ清波を犯さず風靜かなる江海に向つて、竿頭の絲線すなはち穩やかに釣を垂れて居る風流さ、太公望も嚴子陵も亦た遠く及ばぬ所であるが、いかにせん文王も光武帝も出て來ない、然し金牛の神通遊戯が只一往の接化方便ばかりでは無い、醍醐毒藥一時に行すで、謂ゆる鑊錘を横に按じて觸るれば命が無いのであるから、當時その僧堂に集つて居た衆僧ばかりでは無く、如何なる作家の衲僧も寄り附けな

い場合である、けれども其の機に契はぬ者には此飯を食はせぬとは言はぬ、毎日／＼一同に供養して怠りは無かつたのである、又是なることは則ち是とある、此の一句は次の七珍八寶一時に羅列すと又次の争奈せん相逢ふ者少しとの間に於て三句を一連にし、只此の一飯桶なれども山海の珍味皆備はつて居るから誠に結構な御馳走ではあるが、此の御馳走にあづかりて能く食ひ得る者は古今に稀であるとするが好い、然し其實は三句ともイツツ削つた方が好いと思ふ、雪寶云く然も此の如くなりと雖も金牛好心ならずと、金牛が飯粒で鯛を釣らうとする釣糸を、チョイと引つ張つて七珍八寶の御馳走を食逃す雪寶の手段である、好心ならずと云ふは金牛の作略を尋常容易に看過しては成らぬぞと、金牛を評しつゝ門生後學の者を警醒せられたのである、其の好心ならざる所如何と參究して見ねばなるまい、圓悟は是れ賊にして賊を識る、雪寶元來金牛と同類であるから能く其の内情を知つて居ると褒めた、是れ精は精を識ると云ふ、コ、の精の字は前にもあつたが妖怪の意味であるから、金牛も雪寶も化物仲間よと云ふのである、來て是非を説くは是れ是非の人、一體に人のことを是だの非だのと評判する者は、其人がハヤ其の同類であると云ふことが分ると雪寶を抑へるやうに揚げる、此の三つの着語も最初は是賊識賊の一つあれば足りる、それを後に色々な註解を下したのが却て煩はしく思はれる、僧あり長慶に問ふ古人いはく菩薩子喫飯し來れと意旨如何、此れは後に或る僧が此の公案を長慶に問ふたのである、長慶のことは第二十三則にあつたが、雪峰の法嗣で又一方の大善知識である、此の僧の間は只菩薩子喫飯し來れと云ふだけのことのやうであるが、其の實は彼の飯桶を將て舞を作し呵々大笑する所がなくては、金牛の神通遊戯が面白くない、本より相逢

ふ者少しと云へる本則のことであるから、容易に會する者の無いは勿論のことながら、これが叢林の一大問題となつて居て、諸禪者が頻りに參究したものであつたと云ふことが、此の僧の此の一間でも分る、着語に妨げず疑着することを、これは誰でも疑ひが起ること、疑ひが起れば問はねばならぬことである、ナゼなれば元來落處を知らず何うも金牛和尚神通遊戯の眞意が合點がゆかぬからであると重々に起させ、更に長慶は什麼とか道はんと之に對する長慶の答話を豫想させ、そこで慶云く大に齋に囚て慶讚するに似たり、それは何もサウ面倒に考へるには及ばない、御飯を食べるに就ての禮儀であらうよと誠に平氣な答へである、慶は慶賀の義で讚は讚歎である、何事でも物の出來あがつた時に、先づ／＼此れで出來あがつた誠に有り難いおめでたいと云ふやうな場合、例へば堂塔などの建築落成した時に、其の落成を賀するの慶讚と謂ふ、今は其日にいたゞく所の御飯が出來あがつたので、其の喜びが舞となり呵々大笑となるので、即ち慶讚の意に過ぎぬのよと云ふ心もちである、一體いづれの宗教にも食事に對してはソレゾレの禮儀作法があつて、儒教でも蔬食菜羹と雖も必ず祭ると教へ、基督教でも必らず神に對して感謝祈禱した上で始めて喫する様子、佛教では之を咒願とも食作法とも申して、中々丁寧なる法式があるのである、尤も宗派によりて多少の違いもあり、或は只食物に向つて合掌するぐらゐのこと、別に作法などを行はない宗派もある様子であるけれども、拙老の家庭では妻子眷屬皆もろともに、食物に向つて合掌し簡短なる偈を唱へることにして居る、其の偈は「上分三寶、中分四恩、下及六道、皆同供養」といふ四言四句の一偈と、モ一つは「爲斷一切惡、爲修一切善、爲度諸衆生、皆共成佛道」と云ふ偈である、此の二つ

の偈文を唱へるには時間として一分間もかゝらない、然るに此の意味を玩索すると云ふことになれば、佛教八萬四千の法門も只此の二偈三十二字で説き盡すことが出来ると思ふ、今此の公案の話とは甚だ程度の違ふたことではあるやうであるが、齋に因ての慶讚といふ話の序を以て同志の人に披露し且つ實行をお勧め申して置くのである、尤も今の公案と話の程度が違ふとは云ふものゝ、金牛和尚が此の如き神通遊戯を以て法界の眞理を一飯桶の上に全提せられるのも、要する所は吾々一切衆生が朝な夕な起居動靜が、天眞爛漫に宇宙の眞理共儘と成らせやうと云ふの外は無いのである、さうして見れば只々面白いとか高尚なとか云ふて空想にばかり走つては何の詮もない、少しづつでもソレが實踐躬行せられてこそ、碧巖集などを參究する効もあると云ふものである、さて着語に席を相て令を打す、これは臨機應變といふも同じ意味で、長慶の答話が此の僧に對しては誠に適當であると云ふのである、更に、欸に據て、案を結す先づコレで此の訴訟の裁判も濟んだと云ふのであるが、吾々お互ひ此の長慶の答話に因て此の公案を眞實に會することが出来やうか、更に大に工夫を費やさねばなるまいぞ。

頌 白雲影裏笑呵呵 笑中有刀 天下納僧不知落處 兩手持來付與他 豈有

事○莫○金○牛○好○喚○作○飯○桶○得○麼 若○是○金○毛○獅子子 須○是○他○格○外○始○得○許○三○二 千里外見請訛 不直半文錢 一處漏逗 諸訛在什麼處 諸漢

白雲影裏笑呵呵、白雲と云ふは飯桶に飯を高く盛りあげた形容とも見るべく、又衆僧の安居して居る僧堂のことを常に雲堂とも云ふに依て、斯ういふたと見ることもあるが、要は絶對向上の境界を白雲と渺たる處に譬へたので、即ち金牛和尚は白雲深く鎖して常人の登臨を許さざる立ち場に立ちて、舞を作し呵々大笑して居るぞと云ふのであらう、着語に笑中に刀あり、油斷のならぬ笑ひかたぞと云ふ、熱發して什麼をか作さんと、これは笑を笑とは見ないのである、熱發とは血液上昇して面の赤くなつた有様、其のやうに氣張つて何うするのぢやと反對の方から見た、天下の衲僧落處を知らず此の呵々大笑の落處は誰にも合點がゆくまい、イヤ合點する必要も無いに合點しやうとするから愈々合點がゆかぬのよ、兩手に持ち來りて他に付與す此れは金牛和尚が飯桶を捧げて菩薩だち召しあがれと持ち出して來た姿、謂ゆる飯とは何のことであらうぞ、桶とは何のことであらうぞ、他に付與すと云ふたは、其時僧堂に居た所の衆僧ばかりのことでは有るまい、現在吾々お互ひも日々三度飯を食ひつゝありながら、能く其の味ひを知つて金牛に點頭せしむる者幾個あらん、圓悟は豈恁麼の事あらんや、何を付與すといふのであるぞ、元來他に付與すべきものでも無ければ、他の付與を受くべきものでも無い、然るに他に付與すなどと云ふて金牛を謗すること莫くんば好し、又其兩手に持ち來つたと云ふは何を持ち來つたのであらう、喚で飯桶と作し得てんや或は他に何とか名けられるものであらうか、諸人審細に氣をつけて見るが好いぞと云ふたアンバイ、若し是れ本分の衲僧ならば這般の茶飯を喫せず、我圓悟などは其のやうな御馳走は御免かふむらう、美食も飽人の喫には當らぬからナと云ふた調子、若し是れ金毛の獅子子ならば三千里外に請訛を見ん、金毛の獅子

兒にも比すべきほどの眞の作家であつたならば、金牛が未だ飯桶を持ち出さざる以前に於て、早く已に此の公案の諸訛即ち尤も合點しにくい所を、歴々分明に洞觀するであらうにと云ふ、着語に須く是れ格外にして始めて得べしと云ひ、他の具眼を許すと云ふ皆尋常人の企て及ばざる所と云ふまでの事、それでも尙ほ只恐くは眼正しからざらん金牛の眞意をば見そくなふであらうぞと云ふ、半文錢にも直らずとは、若し其の諸訛が見えたなどとは價値の無いことよ、見られるやうでは一場の漏逗ハヤ疵物じや、一體に其の諸訛とか云ふことは什麼の處にか在る其のやうなことが有らうかい、エー瞎漢めくらども、又雪竇の語路につきまはり居るかと掃蕩し了つた。

第七十五則 烏白問法道

垂示 靈鋒寶劍常露現前亦能殺人亦能活人在彼在此。同得同失若要提持一任提持若要平展一任平展且道不落賓主不拘回互時如何試舉看

靈鋒の寶劍と云ふは、或は金剛王寶劍とも又は般若の智劍とも、時にとりては彌陀の利劍なども名けられるので、三世の諸佛も六道の衆生も皆もろともに寝ても起きても肌身を離さず身に添へて居る所の守

り刀のことで、時としては眞如とも法性とも本來の面目とも主人公とも名けられる那一物のことである、偕て其の寶劍は常露現前で常にぬき放つたまゝで、決して鞘に收めたり錦の袋に入れたりして居るのでは無いから、多くの者は此の寶劍を自由自在に利用することが出来ないで、之れがために始終怪我ばかりして守り刀が却つて災害の種になる、其の黨類を六道四生の凡夫と謂ふのである、然るに之を自由自在に使用ひ得る底でさへあれば亦た能く人を殺し亦た能く人を活かす、極樂へ往つて二十五菩薩に囃させて劍舞を踊らうとも、又は地獄へ往つて釜の下の火をかきまはさうとも、思ふまゝに自分の働きが出来、偕て又此寶劍は自分の手に於てばかり使ふべきでは無い、或時は又全く他人の手に渡して自由自在に使はせることもある、ソコの様子を彼に在り此に在りと謂ふ、又同得同失と我も他も諸共に其の働きを一時に現はすこともあれば、全くソレと反對に我も他も諸共に其の働きを一時に隠してしまふこともある、それ故に若し提持せんと要せば提持するに一任す、斬つて斬りまくらうと云ふならソレも御勝手、若しまた平展せんと要せば平展するに一任す、提持と云ふは常に把住と云ふも同じことで手を放さぬ姿、平展と云ふは常に放行と云ふも同じことで、兩手を開いて投げ出した貌、且く道へ賓主に落ちず回互に拘はらざる時如何、或は賓客と主人の眞劍勝負の立ち合となつた時に、どちらが勝つたとも負けたとも片落ちの無い姿、回互といふは双方相互ひに主となり賓となる其間に孰れを孰れと拘束せらるゝ所の無い機合、それに適當なる逸話があるぞと云ふので、試みに擧す看よと本則を喚び出した。

本則 舉僧從定州和尚會裏來到烏白。烏白問定州法道

何似這裏言中有響。僧云不別死漢中有活底。白鐵樵子一般踏著實地

云若不別更轉彼中去便打灼然。僧云棒頭有眼不得

草草打人也是這作家始得。云白今日打着一箇也又打三下說一升

萬箇千箇僧便出去元來是屋裏人。白云屈棒元來有人喫在啞子

瓜放去又收來僧轉身云爭奈杓柄在和尚手裏依前三百六十日

白云汝若要山僧回與汝知他阿誰是君阿誰是臣。僧近前奪

白手中棒打白三下也是一箇。白云屈棒屈棒點

着什麼急僧云有人喫在柄却是幾箇杓。白云草草打着箇漢不

僧便禮拜是丈夫兒。白云尚却恁麼去也點。僧大笑而出家

方知盡始盡終猛虎須得濟風隨。白云消得恁麼消得恁麼可

棒○將謂走到什麼處去

僧○定州和尚の會裡より來りて烏白に到る、傳燈錄に定州和尚と云ふ人が兩人ある、其の一人は定州の善崔禪師と云ふて臨濟門下の人であるが、其人では烏白と時代が違ふに依て、モウ一人の定州であらうと云ふことである、それは定州の石藏和尚と云ふて、北宗の初祖神秀禪師の嗣の普寂と云ふ人に法を繼いだ人である、今此の本則の賓位に立つた僧は、其の定州石藏和尚の處で餘程充分修行をして來たものと見える、烏白と云ふは景德傳燈錄の第八に其名が見えるが、馬祖の法嗣八十餘員の一人で、玄上座と云ふ僧が烏白に見えた時に、直に拄杖を以て打つた、其時に玄上座が久しく和尚に此の機要あることを知ると言ふた事があるのを以て見れば、頻りに棒を行じ人を打つと云ふことが評判になつて居たほどの人と見える、そこで此の僧が往つて相見するやいなや、直に烏白の方から問ひかけた、貴公は定州和尚の處に居たと云ふことであるが、定州の處の法道は這裡と何似、何か拙僧の處と違ふことがあるかナ、着語に言中に響きあり此の烏白の擲問に對して容易の看をするわけには往かぬぞ、ナゼカと云ふに這裡といふは一體に何處のことを謂ふのであるか、只現に烏白の住んで居る寺のことではあるまい、深淺を辨ぜんと要す烏白は此の一擲を以て此の僧の見處如何を試験するのである、即ちソレが探竿影射ぢや、此の着語は贅言である、太煞人を嘯す定州と這裡と何か違ふた所があるかなどと問ふは甚だ馬鹿にした言ひぐさといふものぞ日本の虚空は支那の虚空と何似と云ふやうなもので、其の實は問題にならぬのである、然るに頼ひに此僧

も中々の作家の漢であるから、僧云く別ならず何にも異つたことは無いネと云ふたやうな調子、此の僧はお世辭などは言はない、若しも烏白の間に對して貴方の處は本來無一物の南宗の嫡流であらせられますから、彼の北宗の塵埃を惹かしむること莫れと云ふやうな流義とは、格段な違ひがあるとお見受け申しますとでも言ふてあつたならば、それでモウ烏白に脚元を見てとられて、さなきだに打つことで評判を取つて居る烏白の棒下に命は無かつたかも知れぬが、圓悟が死漢中に活底ありと着語した如く、此僧の簡短には別ならずと言ふた答に中々の力がある、此の僧の如きは千萬人中の一箇半箇で容易に得がたい作家であるから、只此の別ならずと云へる一句が鐵樞子と一般で、チョット手が着けられないぞと云ひ、又實地に踏かずと圓悟は重々の讚歎ぢや、白云く若し別ならずんば彼の中に轉じ去れと云つて便ち打つ、天上天下同一風光で何の異りも無いと言ふのか、それならば其處此處と何を探してあるくのぢや、己れの家郷にナゼ還らないぞ、と言ひつゝドシンと一棒くらはせた、圓悟が灼然テツキ其うくるであらうと思ふた、正令當行、何うしても斯うなければならぬ所ぢやと圓悟は大賛成である、然るに僧は平氣なもので棒頭に眼あらば草に人を打つことを得ざらん盲目どち／＼ならばイザ知らず假初にも棒頭に眼があつたならば、眞に打つべき時に當つて打つてこそ打つが好い、其のやうに鹿相ツかしく安りに人を打つものでは御座らぬぞと烏白をたしなめる様子、着語に也た是れ道の作家にして始めて得てん此僧餘程舊參の人であると見える、却て是れ獅子兒と今度は圓悟が此僧に兩手を舉げての喝采ぢや、烏白もたしかに此の僧の力あることを認めた様子で大得意になり今日一箇を打着す拙僧は是れまで多くの人に向つて棒を行じたことであつたが、サ

テ／＼打ち効のあるほどの者は絶えて無いものであるが今日といふ今日こそヤツと一人打ち心地の好い奴を打ち得たぞと言ひながら、更にドシンドシンと又打つこと三下、どんなに愉快であつたやら、迷子になつた子に巡りあふたやうな心持であつたらうけれども、尙ほコレが第二の試験である、圓悟が、什麼の一箇とか説かん千箇も萬箇もと言ふ、何も其のやうに珍らしがるには及ぶまい、此僧ぐらゐのは幾らも有るぞと抑へた、僧便ち出で去る、思ふさま棒を食はせられ、御馳走さまとも言はずに此僧サツサと出で往つてしまふ、これが中々凡庸の人には出来ない、圓悟は元來是れ屋裡の人これで愈々此僧は佛祖屋裡の人である、決して他の路頭の人では無いと云ふことが分ると云ふ、けれども此の棒の食ひ逃げをして只屈を受くるを得たり屈といふは冤罪すなはち罪の無いのに刑を受けることである、然しコレで何も言はずに、出で去るのは只是れ機を見て作す、進むも軍略なれば退くも軍略である、名將の策略は他人の窺ひ知るべきでは無い、烏白は本より他の知音である、何で之を黙つて見て居やうぞ、白云く、屈棒元來人の喫すること有る在り、屈棒と云ふは前にも申した如く罪の無いのを罪に落すのが屈であるから、打つべき道理の無いのに打つのが屈棒である、即ち烏白が此の僧のノソノソと出て往く後から聲を掛けて、罪も無いのに棒を食はせられてノソノソと出て往く奴があるかと冷かしたやうに言ふのである、着語に啞子苦瓜を喫す此の屈棒には尋常容易ならぬ妙味があるのであるが、其の味ひは甘いとも辛いとも到底言葉で言ひあらはすことが出来るものではない、譬へば啞子が苦瓜を食つて妙な顔をするばかり何とも言ふことの出来ないやうなもので、放去又收來打つて打つて打ちする所は放去して勝手に出て往けと云ふた様であつた

が、更に後から聲をかけて又喚びもどしたナと云ひ、更に點得し、回り來るも何の用をか作さん、コ、で此僧が後へ戻らずツと往つてしまへは面白いが、若しも後へ戻るやうでは何の用にも立たぬと云ふ、けれども果して僧は身を轉じて云く争奈せん杓柄和尚の手裡に在るを、何うも仕かたが無い貴方が主位に立つて棒を握つて居るのであるからと言ふ、天地萬物皆此の通りのもので、何なりとも此に一物が主位に立てば他の萬物は皆其の賓位に立つて服従せねばならぬのである、春になれば花が主位に立つて萬物皆花の眷屬となる、秋になれば月が主位に立つて萬物皆月の眷屬となる、酒を主位に置くものは「酒なくば何のおれが櫻かな」とも云ひ、歌を主位とするものは三十一文字で天地をも動かすと云ふ、着語に依然として三百六十日此れは此の僧の見識の動かすべからざるを賛じたので、昔も今も一年三百六十日に定つたやうなものぞと云ふ、又却て是れ箇の恰柄の衲僧とほめた、此の身を轉じた所に力が見えると云ふのである、白云く汝若し要せば山僧は汝に回與せんヤア今度は貴公が主位に立たうと云ふのか、それならばサア此の拄杖を貴公にわたさうぞと言ふ、コ、の回の字は貸の字と同義になつて、回與は即ち貸與の義である、即ち是れ垂示に謂ゆる賓主に落ちず、回互に拘はらざる底の機會、烏白にして之を回與し得べく、又此僧にして其回與を受け得べきである、圓悟は、知らん他の阿誰が是れ君にして阿誰が是れ臣なる、嚴子陵が光武帝の腹の上へ脚をのせたやうな姿である、客星帝座を侵すなどと恠しむまいぞ、敢て虎口裡に身を横たふ烏白が此の僧に拄杖をわたすのが誠に危險であると圓悟が冷かし、或然好惡を識らず前後をも顧りみない仕かたでは無いかと常情を以て之を弄し、吾人に向つて參究の材料を與へられるのである、僧近前して

白が手中の棒を奪つて白を打つこと三下主位に立てば誰でも此の通りでなければならぬ、圓悟が亦た是れ一箇さきには烏白が此僧を打つて今日一箇を打着したと言ふて喜んだが、今度は此僧が烏白ほどの偉人を打つたのであるから、打ち効があらうよと同情を寄せた、又作家の禪客にして始めて、到底尋常凡庸の人に出來る仕事では無いとほめる、更に賓主互換と云ひ、縦奪時に臨むと云ふ、二つの着語は無くもがな、そこで白云く屈棒屈棒イヤハヤ無理な打ちやうでは無いかと全く賓主の位地が代つてしまふ、只此の屈棒、さきには花となつて春に咲き今は月となつて秋に照る、圓悟は點と云ふソコぢやと云ふたやうなアソバイ、又這の老漢什麼の死急をか着けたると云ふ、烏白老漢少々狼狼の氣味では無いかと冷かした、僧云く人の喫すること有る在り其の屈棒を食ふ人がありますからねと言ふたやうな調子、圓悟は呵々と笑ひをもらして愉快がる、是れ機箇の杓柄か却て這の僧の手裡に在る烏白から回與した拄杖は一本であつたと思ふに、此の僧は幾本も杓柄を持つて居るらしいぞとほめる、白云く草々に箇の漢を打着すイヤモウ貴公は中々豪氣なものぢや、それを拙僧が屈棒を與へたのは誠に草々であつたと言ふて、此の僧の顔をジロリと見たらしい、これが烏白の比僧に對する第三の試験である、コ、で又烏白が主位に立ち戻つた姿が見える、圓悟は兩邊に落ちず實に大善知識の機に應じて物を接するは、與奪自在なものであるとの稱讃ぞ、知んぬ他は是れ阿誰ぞ、烏白が箇の漢を打着したと云ふが其の箇の漢と云ふは誰のことであるぞ、審細に實參實究せよと門下後學への警醒である、僧便ち禮拜す、イヤこれは恐れ入りましたと云ふやうな調子で烏白を禮拜した、此の禮拜は中々油斷のならぬ禮拜である、嚮には烏白の棒を奪つて打つこと三下、今度は

殊勝らしく禮拜する、其の轉身の機の敏捷なる、眞に殺活自在の働きである、着語に花に臨んで變せず方に是れ大丈夫と此僧の作家たることを稱揚して、曰云く却て恁麼にし去るや、モウそれだけのことでお歸りかナ、と烏白は更に彼の殊勝らしい禮拜などを受けては居らぬ、着語に點とある、これもソコだと擗い處へ手の届いたのを示すやうな點である、僧大笑して出づ、此僧どこまでも逆順縦横で中々烏白の旗下に降らない、圓悟は作家の禪客天然に在るありとほめ、猛虎は須く清風の隨ふを得べしと此の僧の大笑して出で去る姿の意氣揚々たるを讚歎した、又方に知る始を盡し終を盡すことをと其の始終一貫したるを稱し、更に天下人摸索不着此の僧の機鋒は誰にも合點はゆくまいと云ふ、然し是等の着語多くは後人の安添であらうと思ふ、着語では無くて注解が多い、曰云く消得恁麼消得恁麼、此の消得恁麼といふ語は、是れまで餘り見あたらない語であるが、此の時の消の字は用の字と同じ意味で、即ち消得恁麼の四字が是の如きことを用ひ得たのかと云ふ意味であるから、今烏白が斯う云ふたのを極めて俗語に言ひ換えて見れば、それだけの事か、それだけの事かと云ふたので、ヤハリどこまでも烏白は老大善知識の立場に立つて居る着語に惜むべし放過するを、こゝで更に此僧を打つこと三十棒すべきであるにと云ひ、更に何ぞ劈脊に便ち棒せざる笑つて往く背からドシンとナゼ一棒を食はせぬぞと云ふは、此の着語も亦た前の着語の注解である、將に謂へり、走て、什麼の處にか、去る、烏白は此の僧の曾つて出で去つたのを喚び戻して、拄杖まで回與したのであるから、結局何うするであらうぞと思ふて居たに、サスガは馬大師の一子である、遂に消得恁麼消得恁麼と其の資格を十全に保ち得たる、實にエライものぢやと云ふの讚歎である、惜しいことには此

僧は如何なる人であつたやら、其の名蹟の傳はらぬのは誠に千古の遺憾である。

頤呼即易天下人總疑着遺即難不妨勦絶互換機鋒子細

看一出二人劫石固來猶可壞滄溟深

處立須乾向什麼處安排烏白老烏白老可憐許幾何般

與他杓柄太無端已在言前

百箇無端漢百十萬重與他杓柄太無端已在言前消合打破蔡州一好呼ぶことは易く遣ふことは即ち難し、これは她を捕へる者の譬喩であるやうな、她を捕へる者が飄々としてた笛を吹くと、それに欺むかれて她が集つてくる、それは誠に心易いことであるが、偕て此の集つて來た她を僅に捕へ損なへば忽ち其毒に觸れ、其齒に咬まれて命を失ふことになる、乃ち其の處分に至りては甚だ困難である、今また烏白が此の僧を勘檢するため、定州は這裡に何似れと問ひかけたり、又は屈棒人の喫することありと云ふて呼び戻したりするだけのことは、或は他人にも出來るかは知らんが、更に彼の中に轉じ去れと云つて打つたり、今日一箇を打着すと云つて又打つたり、乃至却て恁麼にし去るやと擗搦したり、結局消得恁麼消得恁麼と弄し了つた調子に至つては、到底他人の能くし得ざる所であると稱揚したのである、偕又之を彼の僧の方から見ても亦た同じことである、爭奈せん杓柄和尚の手裡に在りと云ふことは言ひ易いとしても、拄杖を回與された上の働きは容易なことでは無い、着語に天下人總に疑着す、

遺ることの難い蛇を呼び來つて何うするであらうかと云ふことは誰でも疑着する所である、此に烏白の如き肉臭あれば此の僧の如き蠅を引き來るは容易なことよと云ふて其の賓主呼應の姿を言ふた、然るに其の呼び來つたる眞意に至つては、天下の衲僧も總て落處を知らずであらう、又遺ることは難しの下に防げず勦絶すること、何も難いことは無い勦絶してしまひさへすれば好いのぢや、海上の明公秀此れは幻人が幻人に遇ふと云ふことの方語であるそうな、それには色々の説もあるけれども、明公秀といふは日輪のことであると云ふ説が好いと風外老人は言はれてある、海中には七珍萬寶あつて輝いて居ても、日輪即ち太陽が昇れば皆其光を失ふてしまふ、それと同じやうに作家と作家の賓となり主となるは、幻人と幻人と相遇ふやうなもので、互ひに出没自在で蹤跡の見留めやうは無い、互換の機鋒子細に看よ、今此の烏白と彼の僧と互ひに賓となり主となつて逆順縦横與奪自在なる、其の機鋒の銳利敏捷さ人々各自子細に實參實究して見ると言ふ、着語に、一出、一入、二俱に、作家と云ひ、又一條の拄杖、兩人扶るとある、いづれも辨するには及ぶまい、且く道へ阿誰が邊にか在る、此れは前の拄杖の語に連ねて其の烏白と彼の僧と賓主與奪して打ちつ打たれつした一條の拄杖は、今日現在誰の手元に在るぞと雪竇に向ひつゝ吾人への警誡である、劫石固うし來るも猶ほ壞る可しコレは印度に於て無限の時間を説明した譬喩である、乃ち劫といふは梵語に劫波と云ふのを略したので、漢譯すれば時間と云ふことである、其の限りなく長いことを説くために小劫中劫大劫乃至無量阿僧祇劫と云ふやうなことを説く、其の中の小劫の説明に、此に方四十里の大石がある、それを天人の衣の重さ僅かに三銖のものゝを以て、百年に一たび撫で又百年に一たび撫で、遂に其の方四十里の石が磨

滅してしまふただけの時間を、一小劫と名けると云ふのである、そこで今は二人の機鋒銳利を言ふために其の劫石は如何に固いと云ふても、此の二人の機鋒に遇ふては忽ちに磨り潰されてしまふであらうとの意にも見える、又此の二人の賓主互換の機は無量阿僧祇劫を経て如何に磨擦したからと云ふても、決して滅盡の期は無い、なぜかと云ふに此の機は元來宇宙本體その儘に活動し來つたものであるから時間のために移さるゝものでは無いと云ふの意にも見える、取捨は諸人の自由に任せる、着語に袖裏の金錠如何か辨得せんコレは人々各自の袖裏に天地開闢以前から持ち傳へたる金錠を以て打ち砕くのであるから、如何なる劫石でも何の事も無い、其の金錠を諸人は何う辨得するぞとの拶問である、更にソレは千聖も不傳よ他人に與へることも出来ねば、他人から受けることも成らぬものぞと言ふ、滄溟深き處も立ちどころに須く乾かすべし、此の句も立の字を古人は皆立てと讀んである、然るに今立ちどころにと訓むのは、拙老の愚案であるが、前の句と同じやうに、如何なる大海の水も此の二人賓主互換の活機を以ては忽ちに竭盡させるであらうと見るのである、なぜかと云ふに二人の機は即ち蓋天蓋地の活動であるからである、着語に什麼の處に向て安排せん、此の枯渴し盡した大海を何處へ置いたものぞと弄し、又棒頭に眼あり獨り許す他親く得ることを、是の如き機鋒は棒頭に眼ある所の二人で無くては斯くまで親く得ることは出来ぬと云ふ、烏曰老烏曰老と其名を重ねて喚んで其人を稱揚し、幾何般かあると言ふた、實に烏白老の活手段は擒縱殺活逆順與奪限りも無いぞとの讚歎ぢや、着語に可惜許とあるは、雪竇に是の如く囃されるのは烏白のために却て氣の毒であると云ふので、それと云ふも這の老漢好惡を識らず、一體に烏白が餘りに騒ぎ過ぎ

るからであると抑へるは、尙ほ宗乘は此より以上の立ち場あることを示さうとてのことぞ、也た是れ箇の端なき漢、拄杖を他人に貸すといふものがあるものかと抑へ、百千萬重イヤそれには亦た種々様々の深い意味のあることぞと更に與へる。他に杓柄を與へて太だ端なし、衲僧手中の拄杖を輕々と他人に貸與するとは甚だ謂れの無いとでは無いかと言ふた、其の言葉は咎めたやうに聞えるけれども、其の實は烏白を稱讚し盡したのである、若しコレが他の人であつたならば、これほどの相手に向つて手中の拄杖を回與することの出来るものでは無い、然るにソレを譯もなく回與して平氣な所、そこが即ち天地をも喝散する機鋒である、譬へば劍術の眞劍勝負をするやうなものである、相手の人に刀をわたしてサアお出でなさい、某は空手でお相手になりまじやうと云ふことは、到底非常出格の人で無ければ出来ることでは無い、即ち此の端なく杓柄を與ふるところ、却て是れ烏白の烏白たる所である、着語に已に言前に在り、それは今更言ふには及ばぬことよと奪ひ、洎ど蔡州を打破すべし、打破蔡州と云ふは死而不弔と云ふ意味の俗諺である、そうな、乃ち今は殆ど其の死でも弔ふ人の無いやうに、烏白がなるので有つた、ナゼかと云へば生殺與奪の大權を敵手にわたしてしまふたのであるからと云ふのである、然るに其の命の危い所に於て自由を得るのが即ち烏白の手段である、好し、三十棒を與ふるに雪竇が太だ端なしなどと云ふて居るよりは、烏白を打つて打つて打ちすゑてこそ眞の稱讚にもならうにと云ふ、且く道へ過は、什麼の處にかある、烏白が三十棒で打たるべき價値は何處にあるぞ、參究して見ると學人への拶着ぞ。

第七十六則 丹霞問甚處來

垂示 細如米末。冷似冰霜。逼塞乾坤。離明絕暗。低低處觀。之有餘。高高處平。之不足。把住放行。總在這裏許。還有出身處也。無試舉看。

細なること米末の如く冷なること氷霜に似たり、此の垂示は先づ宇宙の本體、すなはち眞如法性の體相を明かすので、最初に萬徳圓滿を細の姿と冷との二つを擧げて説く、其の微細なる點から云へば米末よりも細かであると云ふ言葉の裏には、其の廣大なる點からは萬里の長空よりも廣大であるぞと云ふ意味は自ら含んでゐる、又其の寒冷なることは氷霜よりも冷やかであると云ふ言葉の裏には、其の煖熱なることは猛火よりも熱いと云ふ意味も含んでゐる、其の他の長短淺深厚薄醜美曲直と云ふやうなことが、皆悉く圓滿して居らぬと云ふことは無い、其の萬徳圓滿の本體が乾坤に逼塞して明を離れ暗を絶す、乾坤と云ふたのは漸く凡夫の常識に當て、言ふたまでのこと、其の實は虚空に限量なきと同時に此の本體にも限量は無い故に、古人は圓なること太虚に同じとも言ふてある、明かと思へば明中に暗があり、暗かと思へば暗中に明がある、古人は之を夜半正明天曉不露とも言ふて居る、畢竟明だの暗だの、是非だの曲直だの、苦樂だ

の迷悟だのと云ふ所の、兩々双々離れ盡し絶了りたるものである、それ故に之れが目前諸法の上に現はれたる相に於ても、低々たる處、すなはち低いとか淺いとか細いとか少いとか云やうなる方面に於ても之を觀るに餘りあり、謂ゆる六道四生の迷ひの衆生で、地獄や餓鬼の苦しみを受けて居る其儘に彌陀や釋迦と少しも異ならぬ所の常住佛性を確かに具へて居る、偕又これとは反對に高々たる處、すなはち高いとか深いとか厚いとか大いとか多いとか云ふやうなる方面に於ても、之を平ぐるに足らず謂ゆる十力四無畏の佛菩薩と雖も、緣なき衆生は度し難しと云ふが如き三不能の數もあつて、佛に在つても増すこと能はず、衆生に在つても減することの無いのが、即ち這箇の這箇たる所以である、そこで之を實地に提げて把住するとも放行するとも、殺して働らかせるとも活かして眠らせるとも、總て這の裏許に在り、寢ても起きても皆悉く此の乾坤に逼塞して明暗を離れたるもの外に出ることは出来ぬのであるが、其の中に於て還て出身の處ありや也無や、何と自由を働いたものであらうぞ、それに就ては古人の佳話がある、試みに擧す看よ。

本則 擧丹霞問僧甚處來 正是不可總沒來處也 僧云山下來 著草鞋入備肚裏過也 只是不離會 言中有 霞云喫飯了也未 第二句惡水澆 僧云喫飯了 却然擗着筒露柱 却被旁人穿 却然擗着筒露柱 霞云將飯來與汝喫 却然擗着筒露柱 底人還具眼麼 雖然好撒倒禪床 僧無語 果然走不得 僧若長慶 當時好撒倒禪床 僧無語 果然走不得 僧若長慶

問保福將飯與人喫報恩有分爲什麼不具眼 也只得一半 福云施者受者一俱瞎漢 據令而行 長慶云盡其機來還成瞎否 未甚好惡 福云道我瞎得麼 兩箇俱是草鞋

丹霞と云ふは鄧州丹霞の天然禪師と申して、初めは儒者であつて仕官を求めてあつたが、選官は選佛に如かずと云ふて馬祖の弟子になり、更に馬祖の指示に依て石頭希遷禪師の法嗣となり、即ち達磨九世の祖位に即いた人である、或時僧に問ふ甚の處より來る、これは例の如く初相見の時のお定りである、然し此の間は世間の旅宿で宿帳をつけるのとは大に違ふ、何の處より生れ來れりやとも聞こえねばならず、何の處に於て如何なる修行をして何の悟りをか得たりやとも聞こえねばならぬのである、着語に正に是れ總て來處なくんばある可からずと言ふてある、眞如から來たか無明から來たか、いづれ來處があるには相違あるまい、然し丹霞が此の僧の來處を知らんと要せば也た難からず、別に問ふて見るにも及ばぬことであるが、大善知識のお慈悲を以て此の僧の脚下を勘檢してつかはされるのである、然るに此の僧は甚だ生意氣な奴で、却て丹霞を擲捨する氣があるから、僧云く山下より來るハイ直このお寺の山の下から參りましたと云ふた、尤も傳燈錄の丹霞の本傳に書いてあるのを見れば、初め丹霞が什麼の處にか宿すと問ふたの

で、此僧は山下に宿すと答へたとある、それならば或は正直であつたかも知れぬけれども、其の脚跟の未だ實地に落ち着いて居ないことはヤハリ同様である、着語に草鞋を着けて、備が肚裡に入て過ぐ、此僧が山下より来るなどと意表外のつもりで答へて居るうちに、ハヤ丹霞老人は草鞋がけて貴公の腹の中をグルリと廻つて来たやうな様子であるぞと冷かす、只是れ會せず、到底此の僧には丹霞の問意が合點ゆくまい、しかし言中に響あり、其の來處を言はずに山下と言ふたは何か此僧も作略があるらしいと云ひ、更に語合し來ると云ふ、語合といふは明言せず其の意を含んで居るとする、然らば前の句と連ねて言中有響語合來といふ一句にして見る方が好いようである、知んぬ他は是れ黄か是れ緑か、此の僧に何ぞ特色があらうかと門下に拶したとも見るべきかなれど、こんな着語は無くもがなと思はれる、霞云く喫飯し了れりや也た未だしや、丹霞老人更に再び此の僧を勘檢せられた、山下から來たと云ふなら山下には宿屋も茶屋も無いはずであるが、御飯は食べてきたかな又は未だ食べないのかナ、誠に腹を抉るやうな問ひかたである、圓悟は第二杓の惡水を澆ぐと着語した、又何ぞ必しも定盤星のみならんや端的を知らんと要す、此の間は何も只普通お定りの喫飯が済んだかと云ふだけの事では無い、尙ほ確かに此の僧の腹の底まで、檢査して見やうと云ふのである、然るに何ぞ料らん其の効もなく僧云く喫飯し了れりと愈々語路に付き廻りて少しも出身の活路が無い、着語に果然として箇の露柱に撞着す、最初からドウせ盲目であらうとは思ふて居たが、果して目の前の柱に頭をコツリと打ち附けた、露柱の露の字には別に意味は無い、單に柱と云ふことである、却て傍人に鼻孔を穿却せらるる生意氣に山下より來るなどと言ふに依て、到頭丹霞に鼻を捏りあげら

れたぞと冷かす、元來是れ無孔の鐵鏡、今さらの事では無い元々から手の付けやうの無い愚僧と見えると罵る、そこで霞云く飯を將ち來りて汝に與へて喫せしめたる底の人、還て眼を具するや、それでは貴公が山の下で喫飯を済まして來たと云ふが、貴公の處へ飯を將て往つて食はせた人に眼があつたかナおほかた盲人であつたらうと云ふたアンバイ、着語に此の丹霞の言ひやうは然も勢に倚て人を欺き罵倒したやうではあるけれども、畢竟これは欺に據て案を結したので、罪人の自白に本づいて刑を宣告したのであると云ふ、若しも此の僧が眞實作家の衲僧であつたならば當時好し禪床を掀倒するに、丹霞の椅子を引くりかへして痛い目に遇はせるのであつたものと、圓悟が齒がゆがつての着語である、然るに端なくして什麼をか作さん、ボンヤリとしてハイ喫飯し了りましたなどと譯も無いことを言ふて居るつまらん奴ぞと叱る、僧無語、こゝに至りてはモハヤ生意氣なことを言ふわけには往かぬ、一言もなくしてボンヤリしてしまふた、着語に果然として走り得ず盲目の上に蹇足と見える、イア無語とあるからには啞も亦た兼ねて居るげな、這の僧若し是れ作家ならば他に向て道はん和尚の眼と一般、ハイ貴師と御同様でありましたと言へばよかつたにと、これは圓悟が此僧の辯護士に雇はれたやうであるが、誰が辯護をしても裁判終結の上は致しかたが無い、只こゝで注意して置きたいのは斯ういふやうな問答の言葉にばかり付き廻つてあるくと、禪學と云ふものは市井シキの熊公や八公が人の隙間をねらひ揚げ足を取つて、罵しりあふたり打ちあふたりするも同様に見えるかも知れぬが、要は只如何なる場合に臨んでも身も心も灑々落々として、運爲動作に一點の曇り無く、事に當りて自由自在に活潑の働きが出来るや否やと云ふ所に在るのである、ソコを誤まら

ぬやら慎密に參究せねば何の詮も無いばかりでは無く、却つて種々なる害毒を流すことにもなる、深く注意しなければならぬ次第である、偕て此の公案を後に長慶と保福とが商量して、其の話を雪竇が之に附け加へて一則の公案にしたのである、長慶と保福とのことは前の第二十三則で申して置いた通り、二人とも雪峰和尚の法嗣である、或時長慶が保福に問ふ飯を將て人に與へて喫せしむることは恩を報ずるに分あり什麼としてか眼を具せざる、これは嘗つて丹霞が彼の僧を罵つたまでの語で、別に深い意味のあつたわけでは無いのであるが、それを今長慶が更に一條の間端として、保福の見處を勘檢するのである、飯を人に施すと云ふことは布施の善行であつて、佛祖の恩を報ずる上にも、社會の恩を報ずる上にも誠に結構なる美事であるに、ナゼそれが眼を具せざる盲目であると罵られるので有らうかと云ふのである、着語に也た只一半を道ひ得たり、恩を報ずるに分あるからソレで眼を具して居るわけであると云ふやうなことは、宗乘を全提したとは言はれないと抑へる、更に通身是遍身是と言ふ、凡そ眼と申すものは通身遍身、天窓のギリ／＼から足の爪先まで、皆悉く眼で御座るぞ、然るに具するとか具せぬとか何を言ふぞと本分の上から着語した、一刀兩段、風外老人は此の一語を取らぬと云ふて削られたが之を次の保福の答の下に置けば必要であると思ふ、一手は擲げ一手は擲る、これは長慶の此の一間が兩端に涉りて一半は他を勘檢し一半は自家の見解を陳べて居ると云ふのである、福云く施者受者二俱に瞎漢、飯を施す者が盲目であるばかりでは無い、飯を受ける者も亦盲目である、其の實は其の施される飯も亦た盲目でなければならぬ、之を教育家に於ては三輪空寂と云ふ、只此の一大盲目即ち是れ十方法界を平等に照す所の大光明である、然るに世人

の多くは皆都べて何事に就ても直に眼を丸くして何とか彼とか理屈をつけて、那の爲であるとか、此のわけであるとか、とかくに自分の情議を標準にして判断しやうとするのが、尋常凡庸の人ばかりでは無くて、佛法とか祖道とか言ふて居る人にも多い、然るに今此の保福が言語道斷心行處滅の立ち場から、黒漆の崑崙夜裡に走ると云ふ調子で、報恩だの不報恩だの具眼だの不具眼だのと云ふ閑妄想を一刀兩殺に打ち碎いた勢ひ、實に壯快きわまる奇觀では無いか、圓悟は之を令に據て行ず即ち是れが本分の號令ぞと言ふ、一句に道盡すと云ふはモウ分つて居る、其人に遇ふと罕なりとは長慶と保福とは眞に兄弟であると言ふのである、長慶云く其の機を盡し來る還て瞎と成んや否やと、祖師の心印は其の狀鐵牛の機に似たりと云ふが、今長慶は其の機を盡し即ち本分の立ち場から言ふのであるが、それでもヤハリ盲目であるかと思ふのかと意味を一轉して、更に保福の見處を徹底探檢するのである。着語に甚の好惡をか識らん、長慶は譯の分らぬことを言ひ出したぞと抑へ、更に猶ほ自分から未だ肯はず何か長慶自分に承知のならぬ所があると思へると扶り、什麼の碗をか討ねん其の機を盡すなどと食後に膳碗を尋ねるやうなことを言はぬがいいぞと抑へる、福云く我を瞎と道ひ得てんや、それでは拙者が盲目であると云ふのかと、せつかく眞黒に塗りあげた佛像に班點を生じたやうな答をして、着語に兩箇俱に是れ草裡の漢、兩人ともに横道へはいりこんでしまふた、龍頭蛇尾どこまでも透せば好いに、我は瞎でないぞと云ふやうなことになつては甚だつまらぬ、當時他の其機を盡し來るも還て瞎と成さんや否やと道ふを待て只他に向て瞎と道はん、これは評唱の中の語が此へ混入したので、着語ではないけれども、圓悟の保福の答話を肯がはぬ様子はコレで能く分

る、徹頭徹尾に君も膳よ我も膳よ、佛も衆生も皆悉く大膳三味に安住せしめたいのであつた、也た只一半を道ひ得たり結局不完全よ、一等に是れ作家什麼としてか前は村に構せ、後は店に構せざる、長慶と云ひ、保と云ひ、孰れ劣らぬ作家の漢でありながら、何うして斯のやうな不満足に畢つたのであらうと言ふて、門下後學の參究を誠進せられた。

頌 盡機不成瞎 只道得一半也 要按牛頭喫草 北失錢遭罪 〇半河南半河

四七二三諸祖師 有條攀條 帶累先聖 寶器持來成過咎 盡大地人

間同陸沉 天下一坑埋却 〇若天蒼天 無處尋 〇換索不着 天上人

機を盡せば瞎と成らず、これは長慶が機を盡し來ると言ふたのと、保福が我を膳と道ひ得てんと言ふのを合せて一句にした、都べて此頌は長慶保福の問答を表して、丹霞の宗乘を暗に示すのである、着語に只、一半を道ひ得たり此れは雪竇に向つて斯う言ひ出したのが未だ十分でない抑へたのである、也た他を驗し過さんことを要す、つまり長慶も保福も互ひに他を勘檢しやうと云ふに過ぎないのである、言猶ほ耳に在り、已に先刻本則で聞いたのであるが、隨分面白い問答ではある、牛頭を按じて草を喫せしむ、これは本則が喫飯と云ふところが問題になつて居るから此の句が出て來たので、句の意は大智度論に在る譬喩である、

昔し或人が世人の供物を備へて神を祭つて居るのを見て、其の傍へ牛の頭だけを持つて往つて、其の口の處へ草を當て、食はせるやうにした、それを人が笑つて牛の頭だけで草が食べられるかと言ふのに答へて、ソレならば神も供物を食はぬであらうと云ふ話である、今此の長慶と保福の問答も其れと同じで、時節因縁の熟さぬからには、食ふことの出來ぬ者に食はせやうとしても、其の効はないぞと云ふ、着語に失錢遭罪イヤハヤ骨折り損の疵びれ瀧けと云ふ始末よ、半は河南半は河北、河南北と云ふは黄河の南と北のことで、今は半分と云ふ意味に取るのであるから、其の問答は面白いけれども却て理に落ちて落着が悪いと云ふことである、殊に鋒を傷け手を犯すを知らず、互ひに本分を呈露しやうとして却つて落草になつた、四七二三の諸祖師四七は二十八で西天の初祖摩訶迦葉から東土の祖師菩提達磨まで二十八世、二三は六で達磨から曹溪の慧能まで六世である、着語に條あれば條を攀づ、雪竇は何か古い記録をしらべ初めたナと弄し、先聖を帶累す四七二三の祖師などを引出しては恐れ入るぞとからかひ、唯只一人を帶累するのみならず、如何にも大勢の迷惑であるぞと云ふ、斯のやうな着語は皆贅言であるが、果して圓悟の下語であらうやら、誠に疑はしく思はれる、寶器將ち來つて過咎と成る、初め釋尊が摩訶迦葉尊者に向て「我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬す」と言はれてから、以來四七二三と傳燈相承し來つた謂ゆる以心傳心の妙訣を、或は拄杖子と名けたり、或は那一物と名けたり、又は單に這箇とばかり稱したりすることがあるが、其れを今は寶器を將ち來ると言はれた、即ち喫飯の上の話であるから佛祖正傳の鐵鉢であらう、此の鐵鉢で喫飯することは、彼の丹霞老人が山下より來れる僧を接したるやうに活動せ

ねば成らぬのであるが、それを長慶と保福とが報恩とか不報恩とか機を盡すとか盡さぬとか、遂に瞎だの不瞎だのと論量することになつては、正宗の寶劍で菜や大根を切るやうなもので、大切な寶器の鐵鉢、即ち喫飯の機が却て過咎になるぞと抑へられた、着語に盡大地の人手を換て胸を撞つ、誰でも痛敷に堪えぬであらうぞと言ふ、又我に拄杖を還し來れ其の寶器を圓悟に渡せ、我なれば過咎に落ちぬやう喫飯して見せやうぞ、山僧を帶累して也た出頭し得ざらしむ若し其の寶器に疵が附いては圓悟甚だ迷惑する、モウ何處へも而出しが出來なくなるワと言ふ、過咎深し此れから例の雪竇の見識で其の過咎を翻弄する、イヤ其の過咎が尋常容易で無い、圓悟は可煞だ深し、イヤモウ其深さの底が知れないぞと相鐘を打つ、天下の衲僧も跳不出、如何なる者でも此の過咎を免れることは容易に出來ぬ、且く道へ深さ多少、サア其の深さが何ほどあるやら測れるならば測つて見ると拶着した、尋ぬるに處なし到底測つて見ることは出來ぬ、圓悟は、備が脚眼下に在り、何も其う遠方を尋ねるには及ばない、ソレ其處に在るでは無いかと言ふ、尤も其の摸索不着の處が過咎の本色である、元來過咎も幸福も性不可得で手の着けやうのあるものでは無い、天上人間同く陸沈と云ふことは前にもあつたが、莊子に出て居る語で、市中の隱者を形容したのである、沈は沈沒沈溺で、水の中のことであるに陸地で沈溺すると云ふのであるから、山の中に居るべき隱者が市中に居ると云ふ譬喩になるのであるが、今はソレを沈溺すべからざる所に沈溺して、自から束縛して居る姿に取るのである、即ち保福等が瞎の不瞎のと云ふ所に滯ふりて、灑々落々たること能はざるのみならず、天上も人間も皆陸沈ぞと警醒せられたの見える、着語に天下の衲僧一坑に埋却す、到頭雪竇が天下人を皆悉く溺

死させてしまふた、還て活底の人ありや、誰ぞ一人でも其の埋却を免がれ得る者があるかと坐下を警醒し、一着を放過す、こゝで一棒を揮ふべき處であるがマア許して置かう、蒼天蒼天さてもくと悲しみの聲を放つた。

第七十七則 雲門答胡餅

垂示 向上轉去可以穿天下人鼻孔似鶻捉鳩向下轉去
 自己鼻孔在別人手裏如龜藏殼箇中忽有箇出來道本
 來無向上向下用轉作什麼只向伊道我也知爾向鬼窟
 裏作活計且道作麼生辨箇緇素良久云有條攀條無條
 攀例試舉看

向上に轉じ去らば以て天下人の鼻孔を穿つ可し、先づ大善知識たる宗師が應機接物する手段の尤も峻峻なる様子を示して、向上すなはち本分の立ち場に立つて孤危峭絶なる機用を弄することになれば、天下人はサテ置き三世諸佛も歴代の祖師も、皆倒退して命を乞はなければなるまい、其の勢の敏捷なることは鶻の鳩

を捉ふるに似たり、ソレツと云ふ暇もあるべきでは無い、然るに若し向下に轉じ去るときは自己の鼻孔別
人○の○手○裏○に○在○り、謂ゆる草裡に落ちて拖泥滞水で、田村將軍が小兒の守をするやうな場合になつては、小
兒○の○た○め○に○鼻○も○つま○れ○髯○も○む○し○ら○れ、イヤハヤ龜の子が手も足も首も尾も皆甲の中に引こめて、少しも
自○由○の○き○か○ぬ○や○う○な○も○の○よ、然し若し箇中に今この圓悟の門下に忽ち箇の出で來りて本來向上向下なし轉
ず○る○こ○と○を○用○ひ○て○什○麼○を○か○作○さ○ん○と○道○ふ○こ○と○あ○ら○ば、これは前の向上をも向下をも超絶したる立場であ
る、其の時に圓悟は只伊に向つて道はん我也た知る偏が鬼窟裡に向つて活計を作すことをと、向上である
向下であると云ふのがそも／＼癪にさはつて、更にソレを取り除いた處に腰を掛けやうと云ふは、それこそ
鬼窟裡の活計で餓鬼道の料理の獻立、空腹高心の贅言冗語何の役に立つぞと叱るのである、且く道へ作麼
生○が○箇○の○緇○素○を○辨○ぜ○ん○サア何れが本統の處であらうぞ、白い黒いを辨別して見るが好いと言ひつゝ良久と
暫時考へるやうであつたが、條あれば條を攀ち條なければ例を攀づると云ふのが法律上の定りである、幸
に其の好條例があるぞと言ふて、試みに擧す看よと本則に結歸した。

本則 擧僧問雲門如何是超佛越祖之談○旱地門云餠餅

舌挂上 餠
○過也

雲門の文偃大師に向つて、或る僧が如何なるか是れ超佛越祖の談と問ふた、これは世の多くの參學者が、
或は如何なるか是れ佛と問ひ、又は如何なるか是れ祖師西來意と問ひ、或ひは向上と問ひ、向下と問ふの

を古臭いと思ふてか、謂ゆる鬼窟裡の活計を弄して、超佛越祖、即ち三世の諸佛を翻倒し、歴代の列祖を
蹂躪して、孤峯頂上に高い／＼ときめこんだ見識と見える、一體此の問の起つた動機は、最初雲門大師が
上堂の垂語に於いて、若し祖意佛意を將て這裡に商量せば、曹溪の一路平沈せん、還つて道ひ得る底あり
やと釣針を下したのであるから、此の僧がソレに釣られて佛を離れ祖を離れ、超佛越祖の談と出かけたの
である、圓悟が開と着語した、何がドウ開いたものであらう、古人の見かたも千差萬別であるが、此の僧
の千佛萬祖を推しのけて飛び出した調子が、兩手を開いて何も彼も放下してしまふたやうであるぞとも見
える、旱地の忽雷、イヤ豪氣な勢ひで喫驚したぞと冷かす、撈うまく雲門老漢に食つてかゝつたぞと擲掄
する、門云く餠餅いかにも離れた答ではある、これは佛意であらうが、祖意であらうが又は超佛越祖であ
らうが、絶えて思量分別の容れやうは無い、餠餅と云ふは胡餅とかくのが本統で、餅に胡麻を付けたのを胡
餅と謂ふのであると云ふことである、餠の字は寄食と云ふ意味で、日本の俗に居候といふことであるそう
ナ、此の一箇の胡餅、いかにして之を喫却したものであらうぞ、圓悟は舌上餠を狂ふと言ふ、斯やうな御
馳走にあふては何とも口の開けやうが無いと云ふのぢや、過也ヤア何處へか往つてしまふたぞと言ふたア
ンバイ、其の蹤跡が見えぬぞと云ふのである、要する所は常に拄杖子と云ひ這箇と云ひ乾屎橛と云ひ柏樹
子と云ひ、毘盧と云ひ彌陀と云ひ、色々なる名の附くものが、今は胡餅と名乗つて來たのである、千佛萬
祖も皆只此の胡餅の爲めに頭出頭沒せられたのである、吾人も必ず此の胡餅を喫し得て、其の眞味を知ら
ねばならぬのである。

頌 超談禪客問偏多簡德出來便作這般 縫罽披離見也麼已在言前
自尿不餽餅壑來猶不住將木樵子換却 至今天下有誦訛畫箇圓相
覺臭○大地茫茫愁殺人 便打○便打

超談の禪客問偏へに多し、古今東西凡そ參禪に心さす所のものは、いづれも競ふて超絶的の談論を求めて色々なる問端を起すことである、着語に箇々出て来て便ち這箇の見解、すなはち超佛越祖の見解を作す、其の人の多きこと麻の如く粟に似たり悉く是れ鈍栗の長くらべよ、縫罽披離見るや、其の佛祖を超越しやうと云ふのが、ハヤ佛病祖病に取りつかれて居る證據であるから、縫罽披離と疵だらけであるぞと言ふ、縫罽といふは衣服などの縫目の綻びたことを云ふので、披離といふは其の綻びの爲めに襟や袖がバラバラになつた姿である、乃ち今は超佛越祖の談を求むる言端にハヤ大きな破れ穴がある、諸人ソレが見えるかと云ふのである、着語に已に言前に在りソレはモウ未だ如何なるか是れと問を發しない前から大穴が開いて居るのである、開也ソリヤ大穴であらうが、けれども自尿は臭を覺えず俗の諺に臭いもの身知らずと云ふ通りで、己れはエライ向上のつもりであるが、それがハヤ臭氣鼻を衝くのである、餽餅壑し來りて猶ほ住まず、ソコで雲門が其の縫罽の大穴へ餅を詰めこんで塞いでやつたのであるけれども、猶ほ住まずと云ふことは此の本則には無いけれども、雲門録に據れば、雲門が胡餅と答へたのを僧は更に什麼の交渉かあ

ちんと言ふ、雲門がソレを與奪して灼然として什麼の交渉があらんと言はれた、今雪竇は其の事を知に持ちこんで斯う言ふたのである、着語に木樵子を將て備が眼睛に換却し了る、木樵子と云ふは珠數を作るに用ひる木の實であるが、日本で木樵子と云ふて黒い木の實のあるのは、此の木樵の穂の字を樓の字と誤つたのであらうと思ふ、サテ今この着語は、雲門が胡餅を拈じ來りて、此僧の超佛越祖を見て居る眼玉を入れ換えてやつたのぞと云ふものである、今に至りて天下に誦訛あり然るに昔も今も世の大抵の禪客は皆只語脈裡に轉ぜられて、今度は胡餅にばかり嚙り附いて居るから誦訛有り、即ち眞味を嘗め得ないのであると言ふ、着語に箇の回相を畫いて、云く此れは記者の言葉である、恁麼に會すこと莫しや、胡餅と聞けばハヤ胡餅に取りついて斯のやうな丸い形のものと思ふて居りはせぬかと誡め、人の言句を咬て甚の了期があらん、他人の言語にばかり嚙りついて居て何うするぞ、大地茫茫として人を愁殺せしむ、何處も彼處も眞參實證の者の無いには痛歎の至りぞと、重々に警策して便ち打つと更に其の蹤跡を打ち消してしまふた。

第七十八則 十六開士入浴

本則 學古有十六開士○成集作除有什麼用處 於浴僧時隨例入浴撞着露柱 忽悟水因惡水幕 諸禪德作麼生會他道妙觸宣漆桶作什麼